

来たる艱難期：黙示録の歴史

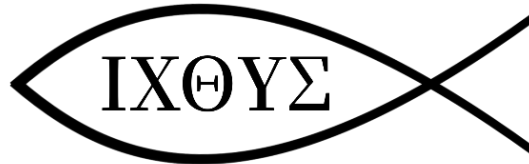
第7部：

艱難期への備え

黙示録 22 章 6-21 節

https://ichthys.com/Tribulation-Part7.htm#_ednref3

ロバート・D・ルギンビル博士著



来たる艱難期：

黙示録の歴史

第7部：

艱難期への備え

黙示録 22 章 6-21 節

ロバート・D・ルギンビル博士著

内容

I. 目を覚ましていることの重要性：黙示録 22 章 6-21 節.....	2
II. 艱難期における行動規範.....	11
III. 艱難期のひな型(パラダイム).....	39
IV. 艱難期への備え.....	47
V. 神の御国.....	62

I. 目を覚ましていることの重要性：黙示録 22 章 6-21 節

(6)そして彼は私に言った。「これらの言葉は信頼するにふさわしく、真実である。預言者たちの霊の神である主は、ご自分のしもべたちに、まもなく起こるべきことを示すために、その御使いを遣わされたのである。(7)見よ、わたしはすぐに来る。この書の預言の言葉を守る者は幸いである。」(8)これらのことを見、また聞いたのは、この私ヨハネである。そして私は、それらを見聞きしたとき、それを私に示していた御使いの足もとにひれ伏して、彼を拝もうとした。(9)すると彼は私に言った。「それをしてはいけない。私は、あなたの兄弟たち、預言者たち、またこの書の言葉を守る者たちと同じしもべである。神を礼拝せよ。」(10)また彼は私に言った。「この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近づいているからである。(11)不正な者は、なお不正を行わせよ。汚れた者は、なお汚れたままでいさせよ。しかし、正しい者は、なお義を行わせよ。聖なる者は、なお聖さを保たせよ。」(12)「見よ、わたしはすぐに来る。そして、わたしは報いを携えて来る。それぞれの行いに応じて報いるためである。(13)わたしはアルファでありオメガであり、最初であり最後であり、初めであり終わりである。(14)自分の衣を洗う者は幸いである。彼らはいのちの木にあずかる権利を持ち、門を通過して都に入ることができるからである。(15)外には(すなわち火の池¹の中には)、犬ども(すなわち汚れた、価値のない者たち)、魔術を行う者、淫らな者、殺人を行う者、偶像礼拝者、また偽りを愛し、それを行うすべての者(すなわちさまざまな不信者たち)がいる。」(黙示録 22 章 6-15 節)

(16)「わたしイエスは、これらのことを諸教会についてあなたがたに証しするために、わたしの御使いを遣わした。わたしはダビデの根であり、またその子孫であり、輝く明けの明星である。(17)御霊と花嫁が『来てください[そして救われなさい]!』と言っている。また、これを聞く者も『来てください[そして救われなさい]!』と言いなさい。また、渇いている者は[救いへと]来なさい。望む者は、いのちの水を価なしに受けなさい。(18)私は、この書の預言の言葉を聞くすべての者に厳かに証しする。もしこれらに付け加える者があれば、神はこの書に記されている災いをその者に付け加えられる。(19)また、この預言の書の言葉から取り去る者があれば、神は、この書に記されているいのちの木と聖なる都に対するその者の分け前を取り去られる。(20)これらのことが真実であると証しする方が言われる。『しかし、わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ、すぐに来てください。(21)主イエスの恵みが、[あなたがた神の]聖徒たちとともにあるように。」(黙示録 22 章 6-21 節)

艱難期の到来と私たちの主の再臨を見据えた霊的覚醒の重要性は、黙示録のこの最後の節全体を貫く明確な主題です。これらのことはまさに「すぐに起こる」と預言されており(6 節)、またイエスは「すぐに来る」と言われています(7 節前半)。したがって、目を覚ましてこの書の預言の言葉を「守る」ために特別な努力を払

¹ [マタイ 8 章 12 節](#)参照。そこでは「外の暗やみ」は、ここで述べられているのと同じ神からの隔絶を指している(ギリシア語エクソテロス ἐξ ὧ τ ε ρ ο ς は、ここで用いられている ἐξ ὧ と同じ語根に由来する)。

うことは、すべての信者にとって不可欠です(7 節後半)。黙示録は、信者が目を覚まし続け、やがて起こるすべてのことに対して正しく備えるために不可欠な書であり、そのため、この書は「封じてはならない」のです(10 節前半)。なぜなら、「時が近い」からです(10 節後半)。おそらくこの理由によって、8-9 節には、この警告のメッセージを御使いが力強く示したことに対するヨハネの反応と、それに対する御使いの同様に強い戒めが記されているのでしょ。この書の言葉を「守る者たち」(9 節前半)は、選ばれた御使いたちや預言者たちと同じく、神に仕える仲間のしもべだからです。黙示録の真理を学び、それを保ち続け、靈的に目を覚ましていることこそが救いへと導くのであり、逆に、目に見えるものや体験する出来事に過度に心を奪われること(ヨハネの場合には御使いの荘厳な姿、艱難期に生きる人々の場合には獣の偽りの奇跡など)は、私たちの信仰、希望、礼拝の真の対象である唯一のまことの神から私たちの心を逸らしてしまうだけなのです(9 節後半)。また、11 節にある御使いの許容的な命令も、終わりの時が差し迫っていることを強調し、それによって神の御言葉を正しく適用するよう私たちを励ますためのものです。もはや迷ったりためらったりしている時間はありません。これらの劇的な出来事はあまりにも急速に起こるため、どの信者も靈的な「ヨーヨー」のように上がったり下がったりしながら、それでもなおやがて来ることに備えられると期待することはできません。同様に、不信者が真剣で全面的な決意なしに救いを軽々しく扱うことも無意味です。なぜなら、残された時間は非常に短いからです(11 節;[第一コリント 7 章 29-31 節](#)参照)。主は「すぐに来る」のであり、まもなく「それぞれが自分の行いに応じて報いを受ける」時が来るのです(12 節)。ですから私たちは、どんなことがあっても目を覚ましていなければなりません。主が私たちの「アルファでありオメガ」であることを覚え(13 節)、永遠のあらゆる祝福にあずかることができるよう、主を喜ばせることに心を定め(14 節)、それを怠った者たちに待ち受けている恐るべき現実を、常に心に留めておかなければならないのです(15 節)。

16 節から始まる第二の段落においても、目を覚ましていることの主題は続いており、主は、この祝福された黙示録の書が、主ご自身から、主が遣わされた御使いを通して直接私たちにもたらされたものであることを思い起こさせておられます。主はこれらすべての祝福の源、「根」であり、また光、「輝く明けの明星」、すなわち神の御言葉そのものであります。私たちは、やがて来る闇の中を導かれて進むために、主が「昇る」時まで([第二ペテロ 1 章 19 節](#)参照)、またその大いなる日に私たちも主とともに立ち上がるまで、靈的に目を覚まして、この方に細心の注意を払わなければなりません。その救いの日はすでに近づいているのです(17 節;参照. [イザヤ 49 章 8 節](#); [第二コリント 6 章 2 節](#)参照)。したがって、この預言の真理と完全性を損なうこと、すなわち、それに何かを付け加えたり、あるいは何かを取り去ったりすること——とりわけ、心の中でそれを飾り立てたり、都合のよい考えによってその一部を信じないようにしたりすること——は、靈的な覚醒を鈍らせ、靈的破局を招く危険を伴うのです(18-19 節;[申命記 4 章 2 節](#); [箴言 30 章 6 節](#); [マタイ 5 章 19 節](#)参照)。なぜなら、私たちの主イエスご自身が、「すぐに来る」と言われているからです(21 節前半)。そして私たちは、この真理と、それが私たちに勧めている靈的な覚醒とを心から受け入れなければなりません。「アーメン。主イエスよ、すぐに来てください！」(21 節後半)。このようにしてこそ、主の恵みは、私たちの靈的な安全と救いのために豊かに私たちとともにあり続け、さらに、同じようにこれから間もなく来る暗い日々の間も目を覚ましていようと決意した、キリストにあるすべての兄弟姉妹とともに、永遠にわたる大いなる報いを私たちにもたらすことになるのです(22 節)。

(1)「その時、天の御国は、ともしびを持って花婿を迎えに出て行った十人の乙女のようになる。

(2) そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。(3) 愚かな者たちは、ともしびは持っていたが、油を持っていなかった。(4) しかし賢い者たちは、ともしびとともに、壺に油を入れて持っていた。(5) 花婿の到着が遅れたので、彼女たちは皆眠気を催し、やがて眠り込んでしまった。(6) 真夜中になって、『見よ、花婿だ。迎えに出なさい！』という叫び声が起こった。(7) そこで乙女たちは皆起きて、ともしびを整えた。(8) 愚かな者たちは賢い者たちに、『私たちのともしびは消えそうです。あなたがたの油を少し分けてください』と言った。(9) しかし賢い者たちは答えて、『いいえ、私たちにもあなたがたにも足りなくなるかもしれません。それより、売っている人のところへ行って、自分の分を買ってきなさい』と言った。(10) 彼女たちが買いに行っている間に、花婿が到着した。**用意のできていた乙女たち**は、花婿とともに婚宴に入り、そして戸が閉められた。(11) その後で、ほかの乙女たちも来て、『ご主人様、ご主人様、開けてください』と言った。(12) しかし彼は答えて、『まことにあなたがたに言う。私はあなたがたを知らない』と言った。(13) **だから目を覚ましていなさい。**あなたがたは、その日も、その時も知らないからである。』(マタイ 25 章 1-13 節/NIV 訳)

艱難期に靈的に目を覚ましている必要に関わる主要な問題は、この十人の乙女のたとえの中にすべて示されています。十人の乙女は艱難期に生きる信者たちを表し、彼女たちのともしびの光は彼らの信仰を表しています。また、花婿の到着はキリストの再臨を意味し、そして——花婿が来る前に尽きてしまい、愚かな五人が祝宴に入れなくなる原因となった——油は、御霊によって教えられる神の御言葉の真理を表しています。この真理こそが信仰を養い、力づけ、信仰を眠らせることなく目を覚ましていさせるものなのです。さらに、上の 13 節で強調されている「目を覚ましていなさい」という言葉は、より正確に訳せば「起きていなさい！」という意味であり、これから訪れる試練の時代において信仰を保ち続ける必要があることを示しています。靈的に目を覚ましていることの本質は、信仰にあります(そして祈りは、靈的に目を覚ましてい続けるための重要な手段です：[マタイ 26 章 41 節](#)；[マルコ 14 章 38 節](#)；[ルカ 22 章 40 節・46 節](#)；[コロサイ 4 章 2 節](#)参照)。

肉体的に疲れると眠気が生じることが多く、もしその眠りが不適切な時や状況において突然訪れるなら、非常に深刻な結果を招くことがあります。それと同じように、靈的に疲れてしまうことを許してしまうのも、どの時代においても問題ですが、ましてや艱難期という劇的な試練の時においては、なおさら重大な問題となります。十人の乙女のたとえにおいては、五人の乙女の信仰を表す光が、完全に「消えかけている」状態にあることが示されています。その悲しい結果として、愚かな乙女たちは主の再臨に間に合いません。これは、彼女たちが主の再臨の時に復活しないことを意味するにほかなりません。そして、再臨の時まで生き残っているすべての信者はその時に復活することが明らかである以上、ここで考えられる可能性は二つしかありません。すなわち、五人は完全に信仰を失ってしまい(もはや信者ではなくなったか)、あるいはすでに命を失っていたか(殉教によってではなく、艱難期の圧力の中で下した誤った選択の結果として、不必要に命を落とした)ということです。また、彼女たちが最も不適切な時に油を買いに走って行ったという細部も、きわめて重要です。このことから私たちは次の二点を推測することができます。第一に、彼女たちは試練が始まる前に、その耐え難い圧力に耐えることができるほど十分な真理を心の中に蓄えていなかったということ。第二に、そのような真理——信じ、それを継続して生活に適用することによって心の中に現実のものとした真理——が欠けていたために、彼女たちは、クリスチャンにとって少なくとも益とならず、最悪の場合には信仰を破滅さ

せてしまうような行動を取る危険にさらされていたということです。そして、艱難期にこのような備えのないクリスチャンの中には、必ずしも完全に信仰を失って背教に至らない者もいるかもしれませんが（とはいえ、これまで見てきたように教会の三分の一が背教することになるので、この危険は極めて現実的であり、決して軽視してはなりません）²。しかし、このたとえの五人は、まさにそのように信仰を失い、その結果として復活にあずかることができなくなる信者を象徴しているのです。主が彼女たちに言われた「まことにあなたがたに言う。私はあなたがたを知らない」という言葉が、それを示しています。

この五人の信者たちがこのような結果に至った理由が、靈的知識の不足のために不適切な行動に関わってしまったからであったのか（たとえば、獣の勢力に対抗するゲリラ運動のようなものに加わり、その結果、神のみこころの外で滅ぼされてしまった場合。下の第Ⅱ節参照）、あるいは、反キリストに対する世の熱狂に巻き込まれ、靈的準備が不足していたために信仰そのものを捨て、彼の刻印を受け入れてしまったからであったのか——いずれの場合であっても、その結果は背教でした。では、この恐るべき結果を避けるために、愚かな五人は何をすべきだったのでしょうか。彼女たちは、どのようにして靈的に目を覚ましてい続けるべきだったのでしょうか。その答えは、昔から変わらず一つです。すなわち、神の真理を継続して求め、それを信じ、信仰によって実生活に適用することだけが、靈的成熟を生み出し、その靈的成熟こそが、靈的に眠りに陥ることを防ぐために必要な靈的覚醒を可能にするのです。この愚かな五人は、艱難期が始まる前に、神の御言葉の「乳」と「固い食物」によって成長していくべきでした。すなわち、これから来る暗い時代の中でも信仰の「光」を燃やし続けることができるよう、十分な「油」を蓄えておくべきだったのです。そして、そのように備えをしていたならば、その真理を思い起こし、それに従って生きるよう最大限の努力を払い、靈的な無気力状態に陥らないようにすべきだったのです。御言葉を聞いて信じること、そしてそれを実際に行うこと（[マタイ 7 章 24-26 節](#); [ルカ 8 章 21 節](#), [6 章 47-49 節](#)参照）——この二つを共に行うことこそ、成熟した信者の特徴です。そして、靈的に未熟で成長していない信者であっても、今日の生活の中では何とか信仰を失わずに試練を乗り越えることができるかもしれませんが、艱難期においては、それははるかに困難になるでしょう（大背教がそれを証明することになります）。

したがって、「備えていること」「見張っていること」「目を覚ましていること」という表現は、いずれも信仰と忠実さを保ち続けることを意味する同義語なのです（[エペソ 6 章 18 節](#); [第一ペテロ 5 章 8 節](#); 参照. [第一コリント 10 章 11-12 節](#)）。このようなクリスチャンとしての備え、見張り、覚醒という姿勢に対する三つの主要な脅威——それはいつの時代にも致命的ですが、とりわけ艱難期の性質ゆえにその時代にはさらに危険なものとなりますが——それは、(1) 惑わし、(2) 圧力、(3) 誘惑です。このことは、まもなく訪れるその困難な時代において、目を覚ましているよう警告する多くの聖書箇所からも明らかです。

(35)「腰に帯を締め、ともしびを燃やしていなさい。(36)主人が婚宴から帰って来るのを待っている人々のようでありなさい。主人が帰って来て戸をたたいたなら、すぐに戸を開けることができるようにするためである。(37)主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見いだされるしもべたちは幸いである。まことにあなたがたに言う。主人は自ら帯を締め、彼らを食卓に着かせ、自ら進んで彼

² 『来たる艱難期』第3部 A.II.「大背教」を参照のこと。

らに給仕するであろう。(38)たとえ主人が夜の第二の見張りの時でも、あるいは第三の見張りの時に来たとしても、その時に備えているのを見いだされるしもべたちは幸いである。(39)しかし、このことを知っておきなさい。家の主人が、盗人が何時に来るかを知っていたなら、自分の家に押し入れられるのを許しはしなかったであろう。(40) **あなたがたも備えていなさい。**人の子は、あなたがたの思いもしない時に来るからである。」([ルカ 12 章 35-40 節](#)/NIV 訳)

(34)「あなたがたは自分自身に気をつけなさい。放縦や酩酊やこの世の思い煩いによって心が押しつぶされ、その日が、[強力に捉える]わなのように突然あなたがたに臨むことがないようにしなさい。(35)その日は、地の表に住むすべての者の上に臨むからである。(36)ですから、これから起ころうとしているこれらすべてのことを耐え抜き、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈っていなさい。」([ルカ 21 章 34-36 節](#))

「眠っている者よ、起きよ。死人の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストがあなたを照らされる。」([エペソ 5 章 14 節](#))

(1)さて、時と時期(すなわち、時間の流れと、その中で起こる個々の出来事)については、兄弟たちよ、あなたがたには、だれかがあなたがたに書き送る必要はない。(2)というのは、主の日が夜の盗人のように来ることを、あなたがた自身が十分に知っているからである。(3)[人々が]「平和だ」「安全だ」と言っているそのまさにその時に、破滅が彼らの上に急に臨む。それは、妊婦に陣痛が臨むのと同じである。(4)しかし、兄弟たちよ、あなたがたは暗やみの中にはいないので、[この][主の日]が盗人のようにあなたがたを不意に捕らえることはない。(5)というのは、あなたがたはみな光の子、昼の子だからである。私たちは夜の者でも暗やみの者でもない。(6)だから、ほかの[不信者である人類]のように眠ってはならず、目を覚まし、注意していよう。(7)眠る者は夜に眠り、酔う者は夜に酔うからである。(8)しかし、私たちは昼の者であるので、信仰と愛の胸当てを着け、救いの望み(すなわち、確信)のかぶとをかぶろう。(9)なぜなら、神は私たちを怒りのためではなく、私たちの主イエス・キリストを通して、(復活のときに完全に得られる)[私たちの]救いを受け取るためのために定めておられるからである。(10)このキリストは私たちのために死んでくださった。それは、私たちが目を覚ましていようと眠っていようと(すなわち、天に移されていようと)、[復活の日に]共にキリストと生きるためである。([第一テサロニケ 5 章 1-10 節](#))

すべてのものの終わりが近づいている。だから、あなたがたの祈りのために、慎み深く、心を整えていなさい。([第一ペテロ 4 章 7 節](#))

1. 欺き:

(3)そして、イエスがオリーブ山に座っておられたとき、弟子たちはひそかにイエスのもとに来て言った。「これらのことはいつ起こるのでしょうか。また、あなたの再臨と、この時代の終わりのしるしは何でしょうか。」(4)するとイエスは答えて言われた。「だれにも惑わされないように気をつけなさい。

(5)多くの者がわたしの名を名のって来て、『わたしがキリストである』と言い、多くの人々を惑わすからである。』(マタイ 24 章 3-5 節; マルコ 13 章 4-6 節参照)

(24)「その時、もしだれかがあなたがたに『見よ[(そのとき彼らがあなたがたに言うように)]! キリストはここにいる!』とか、『ここ[におられる]!』と言っても、それを信じてはならない。偽キリストたちや偽預言者たちが現れ、大きなしるし(直訳、「しるし」と不思議を行い、[もし可能であれば]選ばれた者たちさえ惑わそうとするからである。(25)見よ[(わたしが今あなたがたに言っているように)]! わたしは前もってあなたがたに告げておいた。(26)だから、もし彼らがあなたがたに、『見よ! [メシヤ]は荒野に[出て]いる!』と言っても、そこへ出て行ってはならない。また、『見よ! 彼は奥まった部屋(すなわち、町のどこかに隠れている)にいる!』と言っても、それを信じてはならない。』(マタイ 24 章 24-26 節; マルコ 13 章 21-23 節参照)

欺きが教会において常に問題であったとはいえ、艱難期の間ほど、それが重大な問題となることは決してありません。反キリストがあたかもキリストであるかのように世が彼に従い、この世の宗教が、表向きは保守的とされるキリスト教団体でさえも、背教の行列に加わり、さらに、獣自身とその偽預言者が、サタンの力によって与えられた、これまでにまったく例のない「奇跡」の現れを行うことになる時、非常に多くの人々が惑わされることは、むしろ驚くべきことではありません。この欺きに抵抗するためには、この節の主題となっている警戒が必要となり、その警戒とは、この場合、これらすべての問題についての真理を理解し、それを信じることから成り立つものです。言い換えれば、これらの出来事が起こり始めるとき、それらによって惑わされないためには、神の御言葉の真理を学び、それを信じることによって前もって成し遂げられた霊的成長に基づく霊的成熟が必要となり、そのことによって、警戒し、目を覚まし、これらすべての進展に対して効果的に見張りを続けることができるようになるのです。

結局のところ、私たちは終わりの時について、聖書の中に膨大な量の情報を与えられていますが、その情報は、それを正しく学ばず、また十分に信じていないクリスチャンにとっては、何の役にも立ちません。たとえば、再臨(Second Advent)におけるキリストの到来の状況について正しい理解を持っていなければ、未成熟なクリスチャンは、上に引用された二つの箇所において主が警告されたような、まさにその種の欺きに対して無防備な状態となってしまいます。一方、これらの事柄を理解するだけでなく、信仰によってそれらを心に刻み込み、どのようなことが起ころうとも信仰をもってこれらの真理をしっかりと握り続けている成熟したクリスチャンは、霊的な警戒によって、そのような欺きを退けることができます。言うまでもなく、私たちは艱難期の歴史の概略を与えられてはいますが(本シリーズは、聖書が許す限りの詳細をもってそれを描き出そうとしてきました)、多くの出来事が起こることになるでしょう。それらは原則としては私たちを驚かせるものではないとしても、その具体的な現れ方においては、なお私たちを驚かせることになるでしょう(ハバクク 1 章 6 節)。³ 艱難期の激しさが私たちすべてにもたらす衝撃や、未成熟なクリスチャンがそれらの出来事によってどれほど揺り動かされるか、また、いまはどれほど取るに足りないように思えるものであっても、あらゆる真理

³ たとえば、主がご自身の再臨の正確な「日と時」が知られていないという事実のゆえに、警戒している必要があると語られた言葉の真の力点は、まさにこの点にあります(マタイ 24 章 42 節, 24 章 44 節, 25 章 13 節; マルコ 13 章 35 節; ルカ 12 章 40 節)。

の一つ一つが、これから先に備えていま霊的に備えをしている私たちにとって、どれほど決定的に重要なものとなるかということ、事前に十分に理解することは難しいことです。というのも、反キリストの欺きに対する解毒剤は、私たちの心の中にある御言葉であり、それを信仰によってしっかりと保ち、あらゆる見張り、警戒、そして注意深さの中で、決意をもって適用することにあるからです(歴代誌下 12 章 14 節; ホセア 4 章 6 節; ローマ 13 章 11 節; 第一コリント 16 章 13 節; コロサイ 4 章 2 節)。

(29)「わたしが去った後、残忍な**おおかみ**があなたがたの中に入り込み、群れを容赦しないことを、わたしは知っている。(30)また、あなたがた自身の中からも、[長老たちの中から]人々が起こり上がり、弟子たち(すなわち、信者たち)を自分たちに従わせようとして**引き込む**ために、曲げられたことを語るようになる。(31)だから**目を覚ましていなさい**。そして、三年の間、わたしが涙をもって昼も夜も、あなたがた一人一人に[これらの危険について]警告することをやめなかったことを覚えていなさい。」(使徒行伝 20 章 29-31 節)

(11)キリストご自身が、ある者を使徒、ある者を預言者、ある者を伝道者、ある者を牧者また教師としてお立てになった。(12)それは、すべての聖徒たちを彼ら自身の奉仕の働きのために整え、その結果、キリストのからだ全体が建て上げられるためであり、(13)ついには、私たちすべてが、正しいことを信じることに、神の御子に対して完全な献身(ギリシヤ語: エピグノーシス(ἐπίγνωσις/epignōsis))をささげることという、一つの目標に到達し、それぞれが成熟した人となるためであり、すなわち、キリストによって定められた成熟の基準に到達するためである。(14)それは、私たちがもはや未熟な者でなくなり、人々の**策略**から出る、あらゆる教えの風によって道を外され、翻弄されることがないためであり、彼らは**欺き**を巧みに行おうとして、あらゆる手段を用いるのである。(15)むしろ、愛をもって**真理を受け入れること**によって、教会のかしらであるキリストを模範として、あらゆる点においてキリストにあって成長するためである。」(エペソ 4 章 11-15 節)

2. 圧力:

(12)「そして、[その時に]不法が増し加わるために、多くの人々の愛は冷えてしまう。(13)しかし、終わりまで耐え忍ぶ者、この[者こそが]救われるのである。」(マタイ 24 章 12-13 節)

(25)「そして、太陽と月と星にしるしが現れ、地上では、諸国民の間に[大きな]苦悩が起こり、彼らは海のとどろきと[その巨大な]波によって[大いに]途方に暮れることになる。(26)また、人々は、住んでいる世界の上に起ころうとしていることへの恐れと予想のために、気を失うであろう。というのは、天の光るものは[激しく]揺り動かされるからである。」(ルカ 21 章 25-26 節)

艱難期の中に警戒を妨げる第二の要因は、その最も厳しい時代の困難が、すべての真の信者の信仰に対して加えることになる、途方もない圧力です。上に挙げた箇所が示しているように、それらの困難な日々、緊張と重圧は、平常時であれば、献身の欠けた生ぬるの状態のまま何とかやっていけたであろう多くのクリスチャンを、仲間の信者に対する反感(マタイ 24 章 12-13 節)や、恐慌と恐れ(ルカ 21 章 25-26 節)へと追いやることとなります。艱難期は、多くの者の信仰を激しく揺り動かすことが、はっきりと予告されており、そ

の結果、多くの場合には報いの完全な喪失(たとえば、[黙示録 16 章 15 節](#))を招き、さらに、他の非常に多くの場合には、救いの喪失(すなわち、大背教(Great Apostasy)において;[黙示録 14 章 9 節](#)参照)に至ることになります。その恐るべき時代の圧力に対処し、報いを失うことも、さらに悪い結果を招くこともないようにするためには、私たちすべてが、多くの信仰と「忍耐」(ギリシヤ語:ヒュポモネー(ὕπoμoνῆ/hypomonē)、語源的には「圧力の下にしっかりと立ち続けること」を意味すること)を必要とすることになります。

わたしヨハネは、あなたがたの兄弟であり、イエスにあって私たちのものである苦難と王国と忍耐に共にあずかる者であるが、神の言葉とイエスのあかしのゆえに、パトモスという島にいたのである。
([黙示録 1 章 9 節](#))

だれかが捕囚されるべき定めであるなら、その者は捕囚される。だれかが剣で殺されるべき定めであるなら、その者は剣で殺される。ここに聖徒たちの忍耐と忠実さが求められるのである。([黙示録 13 章 10 節](#))

ここに、神の戒めを守り、イエスへの信仰を保つ聖徒たちの忍耐が求められるのである。([黙示録 14 章 12 節](#))

必要な忍耐、すなわち、自分の信仰に加えられる圧力に耐え、気を失わない力を身につけることは、不可能ではありませんが、艱難期そのものの中でそれを養うことは、きわめて困難な課題となるでしょう。艱難期の大きな肉体的・精神的・感情的重圧の下で、愛が冷え、望みが絶望へと変わり、信仰が崩れ去ってしまうことへの解毒剤は、これまでに私たちが、困難な状況の中で神の御言葉を適用することに慣れることによって、心の中に前もって築き上げてきた霊的な回復力にあります。すなわち、それは単に真理を知り、それを信じるようになっただけでなく、その知識と信仰が、人生の苦難やさまざまな変転の中で以前から鍛えられてきた結果として、私たちがそれを非常に深く、そして持続的なかたちで「知っている」ようになることを意味するのです。

(6)このことの中にあって、あなたがたは大いに喜んでいるのである。いましばらくの間、さまざまな試練によって悲しみを経験しなければならないとしてもである。(7)これらの試練が来たのは、あなたがたの信仰が一火によって精錬されてもお滅びる金よりもはるかに尊いものであるが—その真実さを証明され、イエス・キリストが現れるときに、賛美と栄光と誉れをもたらすためである。([第一ペテロ 1 章 6-7 節](#))

今この時に、信仰を精錬するこの過程に従うことこそが、後に必ず私たちに襲いかかる激しい圧力に耐え抜くために必要な資質を備える唯一の方法です。真理を信じることによる事前の霊的成長、そして主が私たちの信仰を精錬するために与えられるさまざまな試練や試験をうまく乗り越えていくことは、やがて訪れる前例のない艱難期の圧力のただ中で「眠り込んで」しまい、クリスチャンとしての徳が崩壊することを防ぐために必要な、目を覚ましていること、警戒していること、そして油断しないことにとって、不可欠な要素なのです。

(33)「気をつけていなさい。目を覚ましていなさい。その時がいつ来るのか、あなたがたは知らないからである。(34)それは、旅に出る人のようなものである。その人は家を離れるとき、しもべたちにそれぞれの務めを任せ、門番には見張りをするように命じて出て行く。(35)だから、目を覚ましていなさい。家の主人がいつ帰って来るのか、夕方なのか、真夜中なのか、鶏の鳴くころなのか、それとも明け方なのか、あなたがたは知らないからである。(36)突然帰って来たとき、あなたがたが眠っているのを見つけられないようにいなさい。」(マルコ 13 章 33-36 節/NIV 訳)

3. 誘惑:

艱難期における欺きの試練が、靈的に成熟した者たちの心の中にある真理によって対処されなければならないのと同様に、また、艱難期における圧力の試練が、イエス・キリストのために靈的前進を遂げてきた者たちの、戦いによって鍛えられた徳の回復力によって対処されなければならないのと同様に、誘惑の試練もまた、暗やみが訪れる前に、キリストのからだに仕えることを通してイエス・キリストへの献身が確かなものとされてきた者たちによる、奉仕における忍耐によって対処されなければなりません。

(34)「あなたがたは自分自身に気をつけなさい。放縦や酩酊やこの世の思い煩いによって心が押しつぶされ、その日が、[勢いよく閉じる]わなのように突然あなたがたに臨むことがないようにいなさい。(35)その日は、地の表に住むすべての者の上に臨むからである。(36)だから、これから起ころうとしているこれらすべてのことを耐え抜き、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈っていなさい。」(ルカ 21 章 34-36 節)

というのも、もし「生木でさえ」主に仕えることが難しいのであれば、「枯れ木ではどうなるのか」(ルカ 23 章 31 節)ということになるからです。また、現在の奉仕に対する反対に対処することさえ難しいのであれば、単なる人間に対してではなく、「馬とともに走らなければならない」としたらどうなるでしょうか(エレミヤ 12 章 5 節)。私たちは、真理であることを信じることによって信仰において一貫して歩むことを学び、また、真理であることに心を据えることによって望みにおいて一貫して歩むことを学んできました。それと同じように、私たちは愛においても一貫していなければなりません。すなわち、イエス・キリストにある兄弟姉妹に仕えることにおいて、自分たちが真理であると知っていることを実行し続けることです。そして、これから与えられる報いが、この地上におけるいかなる怠りへの誘惑よりも、はるかに重要であることを、確かな信仰をもって信じ続けることです。

主が私たち一人ひとりに与えてくださった務め——私たちはそれぞれの靈的賜物に従って、皆が何らかの奉仕へと召されているのですが(第一コリント 12 章 1-7 節)——その働きを忠実に果たし続けることは、良い時代においてさえ容易ではなく、困難な時代にはなおさら難しく、そして艱難期においては疑いなく飛躍的に困難さが増すことでしょう。自分自身を第一に置こうとする誘惑、あらゆる出来事を言い訳にして手を緩めようとする誘惑、そしてこれまでの実りある働きから後退しようとする誘惑は、疑いなく非常に大きなものとなるでしょう。しかし、そのようにして私たちが被る損失は、あらゆる反対にもかかわらず進路を守り続けることによって得られる益と比べれば、まったく比較になりません(第二コリント 4 章 17 節; 第一ペテロ 1 章 13 節; 黙示録 3 章 11 節)。そしてもし私たちが今、「時が良くても悪くても」(第二テモテ 4 章 2 節)イエス・キリスト

に対して熱心であり続けるならば、やがて来るその恐ろしい時代において、信仰の手を緩めさせようとする誘惑に対しても、よりよく対処できるよう備えられることになるでしょう。

(5)涙をもって種をまく者は、喜びの歌をもって刈り取る。(6)泣きながら出て行き、種を携えてまく者は、喜びの歌を、束を携えて帰って来る。(詩篇 126 篇 5-6 節)

(42)主は答えて言われた。「それでは、主人がしもべたちの上に立てて、定められた時に食物を分け与えさせる、忠実で思慮深い管理人とは、いったいだれであろうか。(43)主人が帰って来たとき、そのようにしているところを見いだされるしもべは幸いである。(44)まことにあなたがたに言うが、主人はその者を自分のすべての財産の上に立てるであろう。(45)しかし、もしそのしもべが心の中で『主人は帰って来るのが遅い』と思い始め、男のしもべや女のしもべを打ちたたき、食べたり飲んだりして酔い始めるならば、(46)そのしもべの主人は、思いがけない日に、知らない時刻に帰って来て、その者を厳しく罰し、不信者たちと同じ所に置くであろう。」(ルカ 12 章 42-46 節; 参照. [マタイ 24 章 45-51 節](#))

イエスは言われた。「だれでも、すきに手をかけてから後ろを振り返る者は、神の国に仕えるのにふさわしくない。」(ルカ 9 章 62 節)

したがって、信者たちは、来たる艱難期の困難を過小評価してはなりません。それは、歴史には、きわめて厳しい時代が数多く記録されているにもかかわらず、ほぼ確実に、これまでのいかなる歴史上の時代よりも過酷なものとなるからです。しかし、備えのない者たちの信仰を攻撃する欺き、彼らの望みを疑わせる圧力、そして彼らの愛を弱らせるさまざまな試練や誘惑という点においては、聖書的にも歴史的にも、これに先例となるものはありません。そして、広範にわたる事前の備えと揺るがない備え、さらに目を覚まして警戒し続ける姿勢がなければ、残念ながら多くの者が信仰から離れてしまうことになるでしょう。むしろ私たちは、今のうちに熱心に備え、やがてその時にも目を覚ましてい続けることによって、信仰の戦いに勝利し、主に栄光を帰す忠実な者たちの一人となることを決意しようではありませんか。

彼らは小羊と戦うが、小羊は彼らに勝利される。なぜなら、小羊は主の主、王の王であられ、召された者、選ばれた者、そして**忠実な者**たちは小羊と共にいるからである。(黙示録 17 章 14 節; 参照. [黙示録 13 章 10 節](#), [14 章 12 節](#))

II. 艱難期における行動規範

私は主イエス・キリストを信じる者です。何が起ころうとも、終わりまで主に忠実に従います。困難や迫害に直面しても、自分の信仰を捨てません。主以外のだれをも、また何をも礼拝せず、いかなる異なる神や偽メンアにも忠誠を誓わず、また、いかなる冒涇的なしるしを自分の体にも受け取らなうと誓いません。どのようなかたちで

あっても仲間のクリスチャンを裏切ることはせず、また、自分の命を守るために神の戒めを破るほど、自分の命を惜しむこともしません。主が私を救い出してくださるために戻って来られるその時まで、常に主イエスを心の中で聖なるお方としてあがめ、あらゆる言葉と行いによって主をあかしするために最善を尽くします。そして、もし主の祝福された御名のために殉教することが主の御心であるならば、主の御前に立つときに恥じることはないように、むしろいのちの冠を受けることができるように、勇気をもって主の御心を受け入れるために最善を尽くします。

以上に述べてきたことは、艱難期におけるクリスチャンの行動についての絶対的な最終的指針として提示されたものではなく、歴史の初め以来この世に生きてきたすべてのクリスチャンに当てはまる諸問題のうち、とりわけ艱難期において特別な重要性を持つ事柄の一般的な模範として示されたものです。他のあらゆる時代やあらゆる時期においては、激しい迫害の中にあっても、クリスチャンは通常、何らかの慣れ親しんだ組織的構造の中での結束や、また、自分の国ではクリスチャンとして生きることが不可能になった場合でも、この地上のどこかに安全な避難場所が存在することを期待することができました。しかし、艱難期においては、特にその後半である大艱難期においては、反キリストに取り込まれていない公式の集団は存在せず、また、彼の支配下にはない土地や国も存在しません。さらに、迫害はきわめて激しくなり、真の信仰に対する反対は極めて鋭く、またよく組織されたものとなるため、信仰に対してやがて臨む恐るべき脅威に直面したときには、友人や家族でさえも、頼ることのできる支えとはならないでしょう。

友を信頼してはならない。仲間に信頼を置いてはならない。あなたの懐に横たわる者に対しても、あなたの口の戸を守れ。というのは、息子は父を辱め、娘は母に立ち向かい、嫁はしゅうとめに立ち向かうからである。人の敵は、その家の者たちとなるのである。(ミカ 7 章 5-6 節; 参照. エレミヤ 9 章 4-6 節; マタイ 10 章 34-35 節; ルカ 12 章 51-53 節参照)

したがって、原則として常に真実であることではありますが、艱難期は、個々のクリスチャンが、自分の信仰を、ただイエス・キリストという堅固な岩の上のみしっかりと据え、いかなる組織や仲間にも支えられることを必要としないかたちで保たなければならない時となります。さらに、これから来るその厳しい時代の深刻さゆえに、ここで、艱難期を名誉あるかたちで乗り越え、その中であって信仰を保ち続けるために心に留めておくべき主要な原則のいくつかを、「要点一覧」として示しておくことは適切でしょう:

- ・ 嵐から身を避けること
- ・ 冷静さを保ち、出来事に感情的に反応しないこと
- ・ 出来事に落胆するのではなく、神がご計画を成し遂げておられることを喜ぶこと
- ・ 信仰を保ち、霊的成長と前進、そして実りある働きを続けること
- ・ 神からの具体的な命令と導きを心に留め、それに従うこと
- ・ 偽りの奇跡や偽キリストに決して頼らないこと
- ・ 反キリストに取り込まれた個人や集団との関係を続けないこと
- ・ 反キリストの偽りの宗教に加わったり、これに協力したりしないこと
- ・ 獣の刻印を受けないこと

- ・ 迫害や殉教を恐れないこと

1. 嵐から身を守る:

(20)「さあ、わたしの民よ、あなたの部屋に入り、あなたの後ろで戸を閉じよ。わたしの憤りが過ぎ去るまで、しばらくの間、身を隠していなさい。(21)見よ、主はご自身の場所から出て来て、地の住民の不義を罰しようとしておられる。地はその上に流された血をあらわにし、その殺された者たちをもはや隠さない(すなわち、信者への迫害は罰せられる)。』([イザヤ 26 章 20-21 節](#))

上の箇所が示しているように、この来たる恐るべき時代において、信者たちは、嵐から身を守るために、正当にできることを行うべきです(21 節前半)——それは、主の「憤りが過ぎ去る」ことを許すためです(21 節後半)。したがって、ここで思い描かれている「身を守る」とは、敵から身を隠すことではなく、主の働きを妨げないように身を引くことを意味しています。——それは、最初の過越のときに、エジプトの長子が打たれた際、イスラエル人たちが「血のしるしのもとに」家の中にとどまっていたことに似ています。したがって、信者が獣の体制に対して暴力的な反対行動を行うような攻撃的行為に関わることは、ふさわしくないこととなります。それは、そのような行為に伴う他の多くの霊的問題のためだけではありません——反キリストとその追隨者たちに報いを与えることは、主ご自身がなさることだからです。それは近い将来において(たとえば七つのラッパのさばきや七つの鉢のさばきにおいて)行われ、さらにももちろん艱難期の終わりにおいても(七つの雷のさばきにおいて)行われます。人類の歴史において、主が地上の悪をこれほど明白にさばかれる時は他に存在しないように、同様に、私たち信者が、この点において主の権威を奪うようなことをせず、知らないうちに主の御手と、その罰の対象との間に自分自身を置いてしまうことのないよう、これほど慎重であるべき時も他に存在しないのです。

(35)「復讐はわたしのものであり、完全な報復は[わたしに属する]。定められた時に、彼らの足は滑る。彼らの災いの日は近く、彼らのために備えられた[罰]は速やかに来るからである。(36)主はご自分の民を弁護し、そのしもべたちについては、彼らの力が尽き果て、捕らえられていようと[なお]自由の身であろうと、まったく力がなくなったのをご覧になるとき、彼らをあわれまれるのである。』([申命記 32 章 35-36 節](#))

主が罰する杖をもって彼らを打たれるその一打ごとに、タンバリンと豎琴の音が鳴り響く。主は御腕の打撃をもって、戦いの中で彼らと戦われるのである。([イザヤ 30 章 32 節](#)/NIV 訳)

私たちの務めは、忍耐をもって「主の救いを待ちつつ立ち止まって見よ」([出エジプト 14 章 13 節](#); [ゼパニヤ 3 章 8 節](#)参照)という姿勢を取り、その過程において、自分自身の力によって自分たちの救いを成し遂げようとする傾向を抑えることになります。

(1)「集まれ、集まれ、恥ずべき国よ。(2)定められた時が来て、その日がもみ殻のように過ぎ去る前に、主の激しい怒りがあなたがたに臨む前に、主の怒りの日があなたがたに臨む前に。(3)地のす

べてのへりくだった者たちよ、主を求めよ。主の命令を行う者たちよ、義を求め、へりくだることを求めよ。おそらく、主の怒りの日に、あなたがたは守られるであろう。」(ゼパニヤ 2 章 1-3 節/NIV 訳)

ここで述べているように、艱難期において効果的に避難することは、自分たちをこの世やその政治から物理的に切り離したり距離を置いたりすることによってというよりも(もっとも、そのようなこともその暗い日々においては有益であり、必要ともなるでしょうが)、むしろ神を知る信者たちにとっては、主との歩みをいっそう深めることによって成し遂げられるのです。出エジプト以前の日々において、パロとエジプト人を襲った災いからイスラエル人が守られたように、その時における罪深い地への主の罰が、私たちのためのものではないことを、私たちは確信することができます。予告されているあらゆる恐るべき出来事にもかかわらず、多くの信者が生き残り、イエスの再臨のときに生きたままの復活にあずかり、「空中で主と会う」ことになるでしょう(第一テサロニケ 4 章 17 節)。信者にとって、これほど困難な時代は決して他にはありません。そして、私たち一人一人がイエス・キリストのために自分の命を捨てることになるかどうかは分かりませんが、その時の激情に巻き込まれることを拒み、この世と罪に対しては死んだ者であり、キリストに対しては生きている者であるという真理をしっかり握り続けるすべての者においては、神の御心が何であれ、私たちの生によってであれ、また死によってであれ、キリストは栄光をお受けになることを、私たちは確信することができます(ピリピ 1 章 20 節; ローマ 6 章 1-14 節, 7 章 1-6 節, 8 章 13 節; ガラテヤ 2 章 19 節, 5 章 24 節, 6 章 14 節; エペソ 4 章 22-24 節; コロサイ 2 章 20 節, 3 章 1-11 節; ヤコブ 4 章 4 節; 第一ペテロ 2 章 24 節; 第一ヨハネ 2 章 15 節)。

万事には定まった時があり、天の下のすべての営みには時がある。(伝道者の書 3 章 1 節/NIV 訳)

聖書は、戦う時と平和の時を含め、すべてのことにはふさわしい時があると教えています(伝道者の書 3 章 8 節)。そして、神の時を尊ぶことは、艱難期において信者にとってこれまで以上に重要なものとなるでしょう。復活の時期を誤って理解していることは、多くのクリスチャンが、これらの厳しい七年間の前に「携挙」によって救い出されると予期しているために、まったく備えのないまま艱難期に入ることになる原因となる可能性が高いのです。イエスは、イスラエルに福音を告げ知らせる使者として遣わされた十二人と七十二人に対しては、旅に剣を持って行かないよう命じられましたが、十字架の前夜には、将来(すなわち教会時代において)は、異なる対応が必要になることを使徒たちに告げられました(ルカ 22 章 36 節)。このように、適切な行動を適切な時に合わせる必要があるという例は、ほかにも数多く挙げることができます(たとえば、異言や癒しのような奇跡的賜物が与えられていた正典成立以前の使徒時代と、それらが与えられていない今日との違いなどです)。しかしながら、艱難期に関する中心的事実とその本質的性質を正しく理解しないことは、やがて到来するその恐るべき時の圧力と惑わしのもとで、真の信者の三分の一が信仰から離れてしまう大背教の大きな要因となる可能性が高いのです。時と状況を誤って理解することによって、ある者たちは反キリストをキリストであると見なしってしまうでしょう。また、時と状況を誤って理解することによって、ある者たちは獣に対して武力を取るようになり、その結果、命を落とすか、あるいはサタン戦略に取り込まれてしまうことになるでしょう。艱難期は、信者たちが、自分自身の努力ではなく、神の恵みにほとんど全面的に依り頼んで救いを待ち望まなければならない、これまでになかった時となります——たとえ、そのような努力が今日においては確かに適切であるとしてもです。

あなたがたが捕らえられて裁きに引き出されるとき、何を言おうかと前もって心配してはならない。その時に与えられることを、そのまま語りなさい。語っているのはあなたがたではなく、聖霊であるからである。(マルコ 13 章 11 節/NIV 訳)

現在においては、私たちが自分に関わるかもしれない法的な問題に備えたり、あるいは福音について弁明する必要が生じたときに備えておくことは、確かに賢明なことです(第一ペテロ 3 章 15 節)。同じように、いま私たちが行うあらゆる霊的な備えも、これから来る大きな試練の時にあって、大きな助けとなるでしょう。しかし、上の節が示しているように、艱難期においては、信仰のゆえに訴えられるあらゆる法廷の場において、私たちがどのように応答するかという具体的なことは、神の御手に委ねられることになります。これから来るその特別な試練の時にあっては、反キリストを打ち破ることができるのはイエス・キリストだけであること、また、もし神の御心が私たちのだれかに殉教を定めておられるならば、それは避けることのできないものであるということも、理解しておかなければなりません——そしてまた、暗やみの世界の中で輝く星として主をあかしする中で、私たちが耐えるよう求められることになるその他すべてのことについても同様です(ピリピ 2 章 15 節)。

「人が[捕囚されることが定められて]いるのであれば、その者は捕囚される。人が剣によって殺されるべきであるなら、その者は剣によって殺されなければならない。ここに聖徒たちの忍耐と忠実さがあるのである。」(黙示録 13 章 10 節)

これらの時代は特別な時となり、私たちがこの地上にとどめられている第一の理由が、イエスのための証しとなる時となります。殉教であれ救いであれ、私たちの艱難期における経験の結果がどのようなものであったとしても(そして、殉教は定義上証しであり、それ自体がまた一つの救いでもあります:第二テモテ 4 章 17-18 節; 黙示録 2 章 10 節後半参照)、いずれの場合においても、この証しは、神の奇跡的な恵みに対する全き信頼によってのみ与えられることになります。すなわち、十二人と七十二人の場合のように(ルカ 22 章 35-36 節)、あらゆる必要を備えてくださる神に信頼することによってです。これは、いま主イエスと親しく歩むようになった信者たちにとっては、確信と励ましの根拠となるべき点ですが、その時にこれを実行するためには、疑いなく大きな信仰が必要となるでしょう。

獣が全世界を支配するようになると、バベルの塔以来、人間の自由を守るために神によって与えられてきた神よりの制度である国家というものは、突然機能しなくなり、それは多くの霊的な結果をもたらすことになります。艱難期の前半における主要な霊的潮流である大背教と、後半における主要な霊的潮流である大迫害とが重なり合うことによって、信仰を保ち続けること(すなわち背教に陥らないため)と、証しを保ち続けること(すなわち、どのような苦しみを求められたとしても、良い証しを立てるため)が、艱難期におけるクリスチャンの行動において、二つの最も重要な考慮事項となるのです。艱難期の前にどれほど大きな物質的備えをしたとしても、また艱難期の間どれほど勇敢な肉体的抵抗を行ったとしても、それによってその時代の経験を良い方向に変えることはできません。それどころか、それは状況をさらに悪くしてしまう現実的な危険を伴っています——というのは、そのような行動は、人が自分自身に頼るようになってしまう原因となり、神に直接頼ることがこれまで以上に不可欠となるその時にあって、それを妨げてしまうからです。したがって、この点を心に深く刻むことは、クリスチャンにとってきわめて重要です。あの七年間の間、私たちの避け所は、私たち

が計画したことや行ったこと、あるいは行おうとするいかなることでなく、神ご自身でなければなりません。

「神よ、私を守ってください。私はあなたに身を避けます。」(詩篇 16 篇 1 節)

したがって、嵐から身を守ることに言えば、これから来るその厳しい試練の時を耐え忍ぶよう召されるクリスチャンが、いま自分自身で物質的な備えを整えたり、その時に自分自身で攻撃的な行動を取ったりするよりも、神の備えに頼る側に立つべき理由が、いくつも存在します。たとえば、次のような点です：

1) 艱難期の予測不能な性質：

聖書の中には終わりの時について多くの情報が与えられていますが、その時に特定の場所(たとえばアメリカ)で実際に何が起こるのかという具体的な詳細については、私たちはほとんど知らされていません。最も重要な地域(イスラエル)における主要な出来事については知っていますし、艱難期全体における大きな流れについても知っていますが、たとえば、獣がこの国をどのようにして支配下に置くのか、あるいは彼が正確にだれであるのか、また彼の政治的・宗教的計画が具体的にどのような内容を持つのかについては、私たちは知りません。実際、それらの具体的内容には非常に多くの可能な変化があり得るため、いまの時点で抵抗のための組織を整えたり、前もって物質的な備えを整えたりすることについて判断を下したとしても、それはほぼ確実に的を外すことになるでしょう。しかし、私たちは、艱難期が、これまでも、またこれからも決してないほどに、地上の人々の心と思いを試すことになるということを知っています(マタイ 24 章 21 節; マルコ 13 章 19 節)。そのような事情である以上、わずかな霊的備えであっても、さまざまな憶測を巡らせたり物資を蓄えたりすること千倍にも勝って、はるかに大きな価値を持つことは間違いありません。大背教の中で、あの過酷な時の圧力のもと、実に信者の三分の一が信仰から離れることが預言されている以上、たとえ物質的な困難がどれほど大きなものであったとしても、艱難期における霊的な圧力はそれをはるかに上回るものであることは確実です。私たちは、獣の宗教的・政治的活動が、私たちの信仰に対してどのような具体的脅威をもたらすのかを正確に予測することはできません。しかし、もし私たち自身が霊的な意味で備えのない状態にあるならば、どれほどの社会的支援があろうと、どれほど多くの蓄えがあろうと、私たちが離れ去ることを防ぐことはできないということは、確かに言えるのです。

2) 艱難期における私たちに対する神の目的：

これまで見てきたように、黙示録 13 章 10 節は、私たちの「忍耐と忠実さ」が、投獄や殉教に直面する可能性を受け入れることに基づいていることを示しています。確かに、ある信者たちは艱難期を生き延びることになります(おそらく相当な人数ではあるものの、艱難期に入るすべての人々の中では小さな割合となるでしょう)。しかし同時に、その試練の時において、他の信者たちに対する神の明確なご目的は、殉教という証しである場合もあるのです。十四万四千人のすべては、二人の証人であるモーセとエリヤと共に殉教することになります。したがって、殉教は、それを耐え抜くよう選ばれた者たちに対して神が与えられる、大いなる栄誉であるということが分かります。もちろん、私たちのだれも死ぬことを望みませんし(また望むべきでもありません)。しかしクリスチャンとして、私たちは、もしそれが私たちに対する主の御心であるならば、私たちのために死なれた主のために死ぬ覚悟を持つべきです。現時点では、艱難期の中にこれらのことが私たち一人一人にどのように起こるのかを正確に知ることはできません。しかし、もし私たちが前もって「生き残ることを

目標とする道に自らを縛り付けてしまうならば、主が私たちをこの特別な方法で用いようとする場合には、少なくとも誤った方向に傾いてしまうことになるでしょう。艱難期の殉教者たちは、神の真理の力が自分の命よりもはるかに大きいものであることを、人にも御使いたちにも、全世界に対して証しする者となります——そして彼らは、そのゆえに永遠にわたって報いを受けることとなります。計画を立てることは、多くの場合必要です。しかし聖書は、人間の計画に過度に頼ることについて警戒すべきであることを、明確に教えています(ヤコブ 4 章 13-17 節)。もしその計画が不安から生まれるものであるなら(マタイ 6 章 25-34 節)、あるいは、もしその計画が、自分の蓄えを自分のためだけに保持しようとする貪欲さを生み出すようなものであるなら(多くの人にとってこれは非常に現実的な誘惑となるでしょう)、そのような備えは、その本来の目的を確実に失わせてしまうこととなります。艱難期は、思慮深い人であれば通常逃げ込むことができたはずの安全な避難場所が、この世界のどこにも存在しないという、特別な時となります。隠れる場所はなく、また獣が全世界を支配することに成功するのを、有効な方法で阻止する手段も存在しません。聖書がこれらの点について明確である以上、艱難期以前の現在における「これまでのやり方」に基づいて取られる行動は、多くの場合、本質を外したものとなってしまいうでしょう。そしてそのような考え方は、人を誤った理由で誤った行動へと導いてしまう可能性があります。したがって、信者たちは前もって心を固め、これまでと同様に、それぞれが置かれている国において、できる限り法に従う市民として歩み続けるべきです。ただし、霊的な事柄においてのみ一線を引き、すなわち、獣を拝むことや、その刻印を受けることよりも、むしろ死を選ぶ覚悟を持つべきなのです。

3) 艱難期前の備えが直感に反する性質を持つこと:

艱難期は、多くの点において歴史上きわめて特異な時代となります。世界全体がサタンの支配下に置かれ、安全な避難場所がどこにも存在しないという事実は、とりわけ「抵抗運動」のような考えについて、これまでの歴史の中に手本となるような前例がまったく存在しないことを意味します。過去においては、国家の宗教政策に反対する人々は、同情的な国々へ逃れることができましたし、あるいは人の住まない地域へ移動することもできました——少なくとも、自分と同じ考えを持つ多くの同胞と共に行動することが可能でした(通常、ある国の中の一部地域が宗教改革の影響を受けながらも従来の信仰を保ち、それを守る意思を持っていたからです)。しかし、これらの条件はいずれも、艱難期には存在しません。艱難期の中ほどまでには、獣の支配下にない場所は地上のどこにも残されていないこととなります。そして黙示録の記述は、すべての国々において世界人口の大多数が、彼とその政治的・宗教的政策を非常に強く支持し、ついには熱心に彼とその父である悪魔を拝むに至ることを、きわめて明確に示しています:

「そして[地上の人々]は、その権威を獣に与えた龍を拝み、また獣を拜んで言った、『だれがこの獣に比べられようか。だれがこの者と戦うことができようか。』」(黙示録 13 章 3-4 節)

反キリストに対して、(一時的にはあっても)有効な抵抗が存在する唯一の場所はイスラエルですが、もし主が時が来なくなって戻って来られなければ、ユダヤ民族を滅ぼすための最後の戦いは確実に成功していたことでしょう。しかし、中東におけるそれ以前の出来事のゆえに、適切で正しい時よりも前に(すなわち、ハルマゲドンの数か月前に与えられる「バビロンから逃げよ」という天からの命令以前に)イスラエルへ移動するこ

とは、現実的でないだけでなく、物質的にも霊的にも大きな危険を伴うものとなります。⁴他方で、バビロン、すなわち艱難期におけるアメリカは、信者たちにとってある程度の安全の可能性が残される唯一の場所となるかもしれません(迫害や困難が存在しないという意味ではなく、「逃げよ」という命令が与えられる時まで生き延びる機会があるかもしれないという意味です)。というのは、私たちは、多くのユダヤ人が艱難期を生き延び、主の再臨の時にイスラエルへ再び集められることを知っているからです(エレミヤ 46 章 28 節参照)。それらの人々はどこかから来なければなりません、その場所としてアメリカはさまざまな理由から非常に有力な候補と考えられます。その場にとどまり、霊的妥協をすることなく、自分の務めを続けながら、起こることを耐え忍ぶことは、ある場合には殉教へと至るでしょうが、同時に、はるかに多くの場合においては生き延びることにもつながるでしょう。しかし、反キリストに対して政治的または武力による積極的な抵抗を行うことは、確実に滅びを招くこととなります。そして、そのような人々は、本当の意味での殉教者とはならない可能性が高いと考えられます。なぜなら、彼らは主に信頼して主が道を定めてくださるのを待つ代わりに、この前例のない時代において、自分自身の道を選んでしまったことになるからです。

4) 欺き:

私たちは、反キリストが権力の座に上る過程において、巧妙な欺きが果たす非常に大きな役割を決して過小評価しないよう注意しなければなりません。今日でも、サタンが思想的立場の両極にある多くの政治運動に関与しているように、獣が世界征服へと向かう過程においても、彼は自らの目的のために政治という盤上のすべての駒を動かしていく可能性が高いのです。私たちクリスチャンは、政治運動に関わることによって、常に霊的に妥協してしまう危険を負っています。もしそれが今日において真実であるなら(そして実際に間違いなく真実なのですが)、無法の働きを抑えておられる聖霊の抑制が取り除かれ、悪魔がこれまでになく直接的に人間の出来事を支配する時代においては、なおさらそうでないはずがあるでしょうか。聖書の中には、政治的または軍事的な形を取るいかなる集団的努力も、獣に対して成功するという示唆はまったく見当たりません。それどころか、彼とその軍勢を滅ぼすことは、ハルマゲドンの戦いにおいて主ご自身が直接成し遂げられることとして委ねられているのです。したがって、霊的成長や奉仕のための交わりを別とすれば、信者によるいかなる種類の集団行動も、時間の浪費となるだけでなく、場合によっては霊性を損ない、さらには救いにさえ致命的な影響を及ぼし得る、非常に危険な過ちとなる可能性があります。実際に形成される多くの「反対勢力」の集団も、やがて取り込まれてしまう可能性が高く、また将来の政治的出来事の正確な進展についての私たちの理解が不十分である現段階においては、反キリスト側に属している指導者を持つ集団と知らずに結びついてしまうといった過ちを犯す危険がむしろ大きいのです。もちろん、聖書が「大きな流れ」に関する出来事については多くを語りながら、政治の具体的詳細についてはほとんど語っていないのには理由があります。すなわち、前者については確かに知っておく必要がありますが、後者に対して過度に執着することは、私たちを誤った方向へ導き、重大な問題を招く結果となりかねないからです。

5) 時間、労力、そして真の備え:

最後に、そしておそらく最も重要なこととして、聖書が艱難期について語っているすべてのことは、その暗い最終の日が到来したとき、事前の霊的備えの五分間、個々の信者にとって、物質的備えの五年間(さら

⁴ [本シリーズ第5部.II.4.「バビロンから離れ去れ」](#)を参照してください。

には政治的備えの五千年)よりも価値あるものとなる可能性が高いことを示しています。もしそうであるならば、状況の性質上、ほとんど役に立たないか、あるいはまったく役に立たないばかりか(場合によっては大きな逆効果となる可能性さえある)ことに、私たちの貴重な時間と力を費やすべきでしょうか。むしろ、すべての信者が、聖書の中で神が強調しておられるところ、すなわち霊的成長を通して内なる人を整えることに集中することこそが、より良い道です。そのようにするならば、どのようなことが起ころうとも、私たちはあらゆる事に備えられた者となることができます。しかし、もし私たちが、いま考えているようには起こらないかもしれない、ある特定の物質的状况に対してだけ備えていたならば、私たちは大きな失望を味わうことになるでしょう。そしてその結果として、いま本来行っておくべき霊的備えを怠ってしまっていたならば、その失望はなおさら大きなものとなるでしょう。

(34)そして群衆を弟子たちとともに呼び寄せて言われた、「だれでもわたしの弟子になりたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従いなさい。(35)自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために自分の命を失う者は、それを救うのである。(36)人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の魂を失ったなら、何の益があるであろうか。(37)人は、自分の魂と引き換えに、何を差し出すことができるであろうか。(38)もしだれかが、この姦淫の、罪深い世代の中で、わたしとわたしの言葉を恥じるなら、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使いたちとともに来るとき、その者を恥じるであろう。」(マルコ 8 章 34-38 節/NIV 訳)

したがって、私たちは、主が望まれる方法によって身を守ることを固く決意しようではありませんか。恐れて身をすくめたり、食欲のゆえに蓄え込んだりするのではなく、むしろ主と兄弟姉妹のために死ぬこともいとわなない者であること、また、生き残る望みをかけてむなしい政治的争いに武器を取るのではなく、どのようなことが起ころうとも、主が私たち一人一人のために定められたそのとおりの方法で、主の証しを立てることを願い求める者であることを、決意しようではありませんか。

2. 起こる出来事に感情的に反応せず、客観性を保つこと:

艱難期は、クリスチャンが、これまでにないほど、自分が受ける重圧や排斥、さらには迫害に直面しても、それを「個人的なこと」として受け取らないようにすることが重要となる時となります。

(20)「わたしがあなたがたに話した言葉を思い出しなさい。『しもべは主人にまさるものではない。』もし彼らがわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。もし彼らがわたしの言葉を守ったなら、あなたがたの言葉をも守るであろう。(21)彼らがこれらのことをあなたがたにするのは、わたしの名のゆえであり、わたしを遣わされた方を知らないからである。」(ヨハネ 15 章 20-21 節 /NIV 訳)

このように客観性を保つこと、すなわち、私たち自身や私たちに属する者たちの上に起こる恐ろしい出来事に対して、個人的な反応をしてしまうのではなく、むしろ上にあるイエスの御言葉を心にしっかり保ち続けることは、出来事によって過度に落ち込むことなく、大きな全体像に目を向け続けるうえで、大きな助けとなります。もっとも、これは容易なことではありません。私たちの多くは、自分自身や自分の問題に意識を集中さ

せてしまう傾向があり、とくに自分が不当に「標的にされている」と感じるときには、なおさらそうなりがちです。ヨブは、主と主の御心に目を向け続けたために、最も激しい個人的試練を、大いなる忍耐をもって勇敢に耐え忍びました(ヨブ 1 章 21 節, 2 章 10 節)。しかし彼でさえ、自分の苦しみの原因が自分にあるかのように友人たちから不当に責められたときには、一時的に心を乱されました。艱難期においては、信者たちは、これまでにならぬほど社会から排斥された存在となるでしょう。とくに後半の迫害の時期においては、なおさらです。そのような状況の中で、私たちがだれに仕えているのか、またなぜ私たちが標的とされているのかを思い起こし続けることは、大きな試練となるでしょう——しかし、私たちが愛する主イエスを尊び、これまでにかけてきた霊的前進を保ち続けるためには、どうしても向き合わなければならない課題なのです。

しかし、あなたがたが到達したところにしがたって、同じ道を進み続けなさい。(ピリピ 3 章 16 節)

しがたって、あなたがたがキリスト・イエスを主として受け入れたとおりに、そのままキリストのうちは歩みなさい。彼に根ざし、彼のうちに建てられ、教えられたとおりに信仰を堅くし、感謝にあふれなさい。(コロサイ 2 章 6-7 節)

あなたがたが働いて得たものを失わないように気をつけなさい。そうすれば、十分な報いを受けることができます。(第二ヨハネ 1 章 8 節)

「わたしはすぐに来る。だれにもあなたの冠を奪われないように、あなたの持っているものをしっかり保ちなさい。」(黙示録 3 章 11 節)

過度に主観的になってしまうこと——それは試練の時代における信者にとっての一つの危険(たとえば第一ペテロ 4 章 12-13 節)ですが——を避けるためには、私たちは客観性についての聖書の勧め、そして特に、私たちの思いを向けるべき真の対象がだれであるかについての教えに、注意深く従う必要があります。その対象とは、私たちの愛する主イエスです：

(1) こういうわけで、私たちもまた[第 11 章の信者たちのように]、このように大勢の証人たち[人と御使いたちの両方]に取り囲まれているのであるから、あらゆる重荷——とくに私たちにまとりつきやすい罪——を捨てて、私たちの前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けようではないか。(2) そして、私たちの信仰の創始者であり完成者であるイエス(「アルファでありオメガ」である方)に、目を向け続けよう。この方は、ご自分の前に置かれていた喜びのゆえに、十字架の恥を耐え忍び、それをものともせず、神の御座の右に着座されたのである。(ヘブル 12 章 1-2 節)

そして、あなたがたの心の中で、キリストを[あなたがたの]主として聖なるものとしなさい。(第一ペテロ 3 章 15 節; イザヤ 8 章 13 節参照)

また、私たちは、もし殉教ではなく救い出されることが自分の定めであるならば、神が必ず私たちを救い出してくださるということを、しっかりと心に留めておく必要があります。

天に向かって目を上げ、下の地を見よ。天は煙のように消え去り、地は衣のように古び、その住民は蚊のように死ぬ。しかし、わたしの救いはとこしえに続き、わたしの義は決して絶えることがない。
([イザヤ 51 章 6 節](#)/NIV 訳)

かがみ込んでいる捕らわれ人は、まもなく解き放たれ、牢の中で死ぬこともなく、パンに欠けることもない。([イザヤ 51 章 14 節](#)/NIV 訳)

主観的になること——すなわち、自分自身や自分の苦しみに目を向けること——ではなく、艱難期においては、これまで以上に客観的であること、すなわち、私たちの信仰と希望と愛の「対象」である主イエス・キリストに目を向けることが、いっそう重要となります。人類の歴史のすべての時代において、信者たちは信仰によって歩み、この世を旅人また寄留者として通り過ぎながら、歩み続けるために必要な霊的な力を主に求めてきました。

(5)あなたを力とする者は幸いである。その心が巡礼の道に向けられている者は。(6)彼らはバカの谷を通るとき、そこを泉のある所とし、秋の雨もまたそれを水たまりで満たす。(7)彼らは力から力へと進み、それぞれがシオンにおいて神の御前に現れる。([詩篇 84 篇 5-7 節](#)/NIV 訳)

したがって、これまで私たちが経験してきた個人的な試練を通して示された神の恵みと救いを思い起こすことは、これから来る「死の陰の谷」を進んで行くよう召される私たちが、確信と客観性をもってそれを進むための重要な方法の一つとなります——それは、私たちが日々の状況に目を向けるのではなく、イエス・キリストと、私たちに對する主の御目的に目を向け続けているからです。

たとい、死の陰の谷を歩むことがあっても、わたしはわざわざいを恐れない。あなたがわたしとともにおられるからである。([詩篇 23 篇 4 節](#)前半/NIV 訳)

もし私たちが今、個人的な艱難に正しく対処することを習慣とし、すなわち、このサタン的な反対が個人的なものではなく、この現在の戦いにおいて私たちの主イエス・キリストの側に立つことから生じる必然的な結果であることを覚え続けるなら、そしてまたその時にも同じように、艱難期の到来以前に学んだ教訓を思い起こし、それを生かすことを習慣とするなら、神の御心がそうであるならば、私たちは、艱難期の終わり、すなわち自分自身の目で主を見るあの最も偉大な日に、主が私たちのために成し遂げてくださる救いにおいて、大きな喜びと歓喜の歌をもって確信を持つことができます。

主に向かって歌え。主は高くあがめられた。馬とその乗り手を海の中に投げ込まれた。([出エジプト 15 章 21 節](#)後半・NIV 訳)

その日、人々は言うであろう、「見よ、この方こそ私たちの神である。私たちはこの方に信頼した。この方が私たちを救ってくださった。この方こそ主である。私たちはこの方に信頼した。その救いを

喜び楽しむ。」(イザヤ 25 章 9 節/NIV 訳)

3. 神が御計画を進めておられることを喜ぶこと(出来事によって落胆するのではなく):

艱難期は、神が地上に対して大いなるさばきを行われる時であり、そのさばきがこの時代の最も顕著な特徴となります。⁵ 艱難期はまた、悪魔が人間の営みに対して最大の影響力と支配力を持つ時であり、その結果として、信者に対する最大の迫害の時ともなります。⁶ したがって、艱難期が、サタンの変乱によって引き起こされた私たちの主に対する戦いの、最も激しい段階となる以上、その将来の時代に生きる信者たちは、人類の歴史の中で最も困難な時を生きることになるのは避けられません(この原則については、本シリーズの中ですでに詳しく扱ってきました)。そして、神が不信者の世界に向けて下されるさばきから、私たちが特別な守りを受けるという事実によって確かに慰めを得ることはできるとしても、人間の通常の生活がこれまでにないほど大きく揺るがされることが、私たちに大きな影響を及ぼさないと期待すべきではありません(エレミヤ 45 章参照)。たとえ、真の教会の三分之一が殉教する中で、私たち自身がその殉教から守られる側に属することになったとしても、それでもなお同様です。そのような状況の中では、艱難期において、信者たちが自分のすべての考えにおいて天の高みにしっかり立ち続け、あらゆる苦しみの中であって神の観点を受け入れ、それを保ち続けること、そして何よりも、不信者の世界に対して神が送り込まれる数々の激変的な出来事を見つめながら、積極的になく困難な中でも保つ喜びを育み、それを保ち続けることが、これまで以上に重要となります——なぜなら、これから下されるそれらのさばきは、神が御自分の教会である私たちの正しさを明らかにされることであり、同時に、私たちの愛する主イエスの再臨がますます近づいていることを示すものでもあるからです。

いちじくの木が芽を出さず、ぶどうの木に実がなく、オリーブの収穫がなく、畑が食物を生み出さず、囲いの中に羊がなく、牛舎の中に牛がいなくても、それでもなお、わたしは主にあって喜び、わたしの救いの神にあって喜び楽しむのである。(ハバクク 3 章 17-18 節/NIV 訳)

「これらのことが起こり始めるとき、身を起こし、頭を上げなさい。あなたがたの贖いが近づいているからである。」(ルカ 21 章 28 節/NIV 訳)

結局のところ、艱難期において神が悪魔の世界に下されるさばきは、客観的に見て「良いこと」であり、それは、神がパロ(反キリストの型)に下されたさばきもまた、あらゆる点において神によるものであったのと同様です。エジプトに起こった恐ろしい出来事——そこからイスラエルの子らは大部分において奇跡的に守られました(たとえば出エジプト 8 章 23 節)——それらは、神の民の救出に先立つ、必要な準備段階でした。私たちは、この対応関係から、イスラエル人たちがこれらの出来事を見て、神の救いを本来持つべきほどには確信せず、また喜びをもって受け止めもしなかったことを知っています(たとえば出エジプト 5 章 21-23 節, 6 章 9 節, 14 章 11-12 節)。したがって、私たちは彼らの否定的な例から学び、この点において、前

⁵ 『来たる艱難期』第 1 部.III.「艱難期の一般的特徴」を参照してください。

⁶ 詳しくは『来たる艱難期』第 4 部.VII.「大迫害」を参照してください。

もって自分自身と自分の物の見方を訓練し始めるよう心がけるべきです。神が何を成し遂げようとしておられるのかを、聖書によって前もって正確に知っている私たち信じる者は、この世が悲しむことについて、むしろ喜ぶことができます。そして、私たちは実際にそうあるべきです。なぜなら、私たちは、神が私たちをこれから来る激しい混乱の中を安全に通らせてくださるか、あるいは、もしそれが御心であるなら、私たちの死による証しを通してご自身の栄光を現されること、そして、悪しき者の支配する領域に対するさばきを段階的に増し加えながら、ついにはそれを完全な滅びへと至らせられることを信じているからです。

(10) 神よ、あなたは私たちを試み、銀を精錬するように私たちを練られた。(11) あなたは私たちを牢に導き入れ、私たちの背に重荷を負わせられた。(12) あなたは人々に私たちの頭の上を踏み越えさせられた。私たちは火の中、水の中を通ったが、あなたは私たちを豊かな場所へ導き出されたのである。(詩篇 66 篇 10-12 節 / NIV 訳)

私たちは、主が再び来られるとき、その勝利を喜び、大いなる喜びをもってそれを祝うことになることを、確かに知っています。

むしろ、あなたがたがキリストの苦しみにあずかっている度合いに応じて喜びなさい。それは、主の栄光が現される時にも、あなたがたが大きな喜びをもって喜ぶためである。(第一ペテロ 4 章 13 節)

それゆえ、なおさらのこと、私たちは今のうちにそのような見方を身につけ、これから来るその七年間を通して、それを揺るがぬ決意をもって保ち続けることを心に定めるべきです。それらの困難な日々において私たちが耐え忍ぶことになるすべての苦しみは、敵とその手下たちの手から来るものとなります。したがって、信じる私たちが、彼らが私たちに加える苦しみに応じて主が彼らに下されるさばきを喜ぶことは、正しく、またふさわしいこととなります——それらのさばきは、私たちの祈りへの応答として送られるものでもあるのです(黙示録 5 章 8 節, 8 章 3-5 節)。

地をさばく方よ、立ち上がってください。高ぶる者たちに、彼らの受けるべき報いを返してください。(詩篇 94 篇 2 節 / NIV 訳)

主は彼らの不義にしがって報い、彼らの悪のゆえに彼らを滅ぼされる。主、私たちの神は、彼らを滅ぼされるのである。(詩篇 94 篇 23 節 / NIV 訳)

(5) [あなたがたがいま耐えているこれらの苦しみは]、あなたがたが神の国のために苦しみを受けていることにおいて、神があなたがたをその御国にふさわしい者と認めておられるという、神の義なるさばきの証拠である。(6) 神にとって、あなたがたに苦しみを与えている者たちに苦しみをもって報いることは、まさに正しいことであり、(7) また、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに安らぎを与えることも、同様に正しいことである。それは、主イエスが力ある御使いたちとともに天から現れ、(8) 炎の火の中で、神を知らない者たち、また私たちの主イエスの福音に従わない者たち

に報復を加えられるときである。(9) そのような者たちは、主の御前とその力の栄光から離れて、永遠の滅びという刑罰を受けることになる。(10) その日、すなわち、主が聖徒たち(すなわち復活した信者たち)の中で栄光を受け、信じたすべての者たちの間で驚きをもって迎えられるその日に、このことが起こる——あなたがたの場合も、私たちの証しが信じられたからである。(第二テサロニケ 1 章 5-10 節)

「天よ、また[すべての]聖徒たち、使徒たち、預言者たちよ、彼女のことで喜びなさい。神は、あなたがたのために彼女に対する報復を行われたからである。」(黙示録 18 章 20 節)

したがって、苦しみのただ中にあっても喜びを保つという、現在において私たちの「通常の」クリスチャンとしての姿勢(たとえばヤコブ 1 章 2 節; [ローマ 5 章 3-5 節](#); [第一ペテロ 1 章 6 節](#)参照)は、将来のその困難な時代においても注意深く保ち続けられ、希望と感謝の態度と深く結び付けられていなければなりません。すなわち、私たちの愛する主がまもなく来られて救い出してくださることへの希望([詩篇 14 篇 7 節](#); [ローマ 8 章 23-24 節](#); [第一コリント 16 章 22 節](#); [コロサイ 1 章 27 節](#))と、不信者の世界に対して主が下される報いに対する感謝([エペソ 1 章 16 節](#), [5 章 4 節](#), [5 章 20 節](#); [コロサイ 1 章 12 節](#), [2 章 7 節](#), [3 章 15 節](#); [第一テサロニケ 5 章 18 節](#); [ヘブル 13 章 15 節](#); 参照、[詩篇 2 篇 1 節以下](#)参照)⁷とが必要なのです。

(1) 神は私たちの避け所、また力であり、苦しみのときの、いと近き助けである。(2) それゆえ、たとえ地が揺れ動き、山々が海のただ中に崩れ落ちて、(3) その水がとどろき泡立ち、山々がその逆巻く水によって揺れ動いても、私たちは恐れぬ。(詩篇 46 篇 1-3 節/NIV 訳)

4. 信仰、霊的成長、前進、そして奉仕を続けること:

将来のその試練がどれほど困難であったとしても、生活そのものは続いていきます([マタイ 24 章 40-41 節](#)参照)。したがって、艱難期は、私たちが自分の光を升の下に隠してしまうような時ではありません([マタイ 5 章 15 節](#); [マルコ 4 章 21 節](#); [ルカ 11 章 33 節](#))。個人的な生き残りに対する病的なまでの執着は、あらゆる種類の卑しい罪の傾向に身を任せることと相まって、個人的な霊的成長、霊的前進、そして個人的な奉仕を、ほとんど不可能なものにしてしまう可能性があります。しかし、霊的に成長し、前進し、奉仕していくことが今の私たちにとって良いことであるなら——そしてそれが確かにそうであることに疑いはありませんが——私たちは今のうちから、それを将来においても続けていく決意を持つ必要があります。疑いなく、これから来るその日々は、私たちの信仰を試し、神の御言葉を受け取ることも、またそれを他の人々に仕えることも、はるかに困難なものにするでしょう。しかし、もし私たちがいまそれを行うことに献身しておらず、また、その時にもこのただ一つの良い道を進み続けることを心に固く決めていないならば、私たちはその道そのものを見失ってしまう可能性が非常に高いのです。

疑いなく、充実した聖書の教えを求め続けること、キリストが私たちに歩むよう望まれる道を歩み続けるこ

⁷ 信者たちが苦難や迫害の時に励ましとして長く引用してきた多くの詩篇(および他の預言的箇所)は、主の再臨に先立つその試練の日々において、完全な成就を見ることとなります(例えば、詩篇 2 篇, 24 篇, 46 篇, 47 篇, 48 篇, 50 篇 1-4 節, 53 篇 6 節ほか多数; 76 篇, 79 篇, 106 篇)。

と、そして私たちに与えられている霊的賜物を通して神の恵みを分かち合いながら兄弟姉妹を助け続けることは、艱難期において危険を伴わないものではありません。また、それらに伴う行動は、「安全」とされる道とはまったく反対のものとなり、いわゆる「生き残り」を第一とする考え方とは、確実に相いれないものとなるでしょう。そして、まさにそこに重要な点があります。私たちが救われた後も地上にとどめられている第一の理由は、霊的成長、前進、そして奉仕という三つの過程を通して、イエス・キリストに仕えることにあります。主こそが私たちの望みであり、私たちが待ち望んでいるお方です([コロサイ 1 章 27 節](#); [テトス 2 章 13 節](#); [第一テサロニケ 1 章 10 節](#); [第一テモテ 6 章 14 節](#)参照)。この世や世にあるものが、私たちの望みではありません([第一ヨハネ 2 章 15-17 節](#))。しかし、もし私たちが、これから来るあの暗い時代の困難に直面したとき、自分の肉体の命を守ることだけにすべての力を注ぐならば、私たちが望み得る最善の結果は、主の再臨まで生き延びることにすぎません。しかし、たとえそうできたとしても、主が私たちに託された働きをなおざりにすることによって「生き延びた」のだとしたら、主はどれほど喜ばれるでしょうか。実際のところ、霊的な安全なしに、肉体的な安全は存在しません。もし私たちが肉体的には「安全」であったとしても、その過程で霊性を損なってしまうならば、何も得るものはなく、かえって多くを失うことになるでしょう。しかし、もし私たちが霊的な安全に目を向け、そのほかのことを主に委ねるならば、たとえ最終的に殉教という究極の犠牲によって肉体的な安全を失うことになったとしても、イエスがその中において私たちと共にいてくださること、そして私たちの報いが大きいものであることを、確信することができます。この人生は非常に短いものです。本当に重要なのは、これから来るものです。これらすべてのことを前もって十分に理解し、それを私たちの存在の深いところまで信じているならば、何よりもイエス・キリストを喜ばせたいと願う真剣なクリスチャンは皆、いまもその時も同じように、何が起ころうとも、信仰と希望と愛を保ち続けるために、努力を惜しまないようにするべきです。

人の子が来るとき、地上に**信仰**が[なお]見いだされるであろうか。(ルカ 18 章 8 節後半)

[私たちは]祝福された**望み**、すなわち、私たちの大いなる神であり救い主であるイエス・キリストの栄光の顕現を待ち望んでいるのである(すなわち、そのとき、主が現れるときに、私たちもまた栄光のうちに復活するのである)。(テトス 2 章 13 節)

(12)その時、不法が増し加わるため、多くの人の**愛**は冷えてしまう。(13)しかし、終わりまで**耐え忍ぶ者**、この[者こそ]救われるのである。(マタイ 24 章 12-13 節)

この原則は、とりわけ牧師教師や、他の人々が依り頼んでいる奉仕を担っているすべての人々に対して、特に当てはまります。三つの冠を待ち望みながら良い競走を走っているすべての者にとって、艱難期は、その働きの質が試される時となり、イエスが私たちに続けるよう求めておられることを行うのを退いてはならない時となるのです。

しかし、あなたがたは強くありなさい。気落ちしてはならない。あなたがたの働きには報いがあるからである。(歴代誌下 15 章 7 節/NIV 訳)

(3)弱った手を強め、よろめく膝をしっかりとさせよ。(4)不安な心を持つ者たちに言え、「強くあれ。

恐れるな。見よ、あなたがたの神は来られる。復讐する者として来られる。[あなたがたの]神は来られる。報いる者として来られる。主は来られて、あなたがたを救われる。」(イザヤ 35 章 3-4 節; 参照: [ゼパニヤ 3 章 16-17 節](#); [歴代誌下 32 章 7-8 節](#))

(33) 民のうちの思慮ある者たちは、多くの人々を教える。しかし彼らは、ある期間、剣(すなわち殉教)や、火(すなわち殉教に至る拷問)や、捕囚(すなわち投獄)や、略奪(すなわち財産の没収)によって迫害される。(34) そして彼らが迫害されるとき、彼らはわずかな助けを受ける……([ダニエル 11 章 33-34 節](#)前半)

三度目にイエスは彼に言われた、「ヨハネの子シモン、あなたはわたしを愛しているか。」ペテロは、イエスが三度目に「あなたはわたしを愛しているか」と言われたので心を痛めて、言った、「主よ、あなたはすべてをご存じです。あなたは、わたしがあなたを愛していることをご存じです」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を養いなさい。」([ヨハネ 21 章 17 節](#)/NIV 訳)

5. 神からの具体的な命令と導きに従うこと:

すべての信者に対して、クリスチャン生活を送るための豊かで完全な導きを与えている聖書に加えて、艱難期には、その特有の状況に対応するための特別な禁止事項や指示が与えられることになります。そして、これらの命令と導きに注意深く従うことは、私たちの霊的安全のためにきわめて重要となります。これらの指示の中には、現時点ではまだ知られていないものもあるに違いありません。たとえば、モーセとエリヤは、彼らの世界的な福音宣教の働きの中で、私たちすべての信者の益のために、多くのことを語ることになると考えられます。また、艱難期特有のこれらの指示のいくつかについては、その具体的な状況がまだ完全には明らかにされていないとしても、すでに聖書によって知らされています。その中でも、おそらく最も明白なものは、獣の刻印または名を受けてはならないという禁止です([黙示録 14 章 9-11 節](#))。それが具体的にどのようなものであるかは、まだ分かっていませんが、その刻印や名を受けることが断罪をもたらすという事実について、聖書がこれほどまでに明確かつ強く警告している以上、私たちがそれを断固として拒む必要があることについては、まったく疑いの余地がありません。この特定の命令がきわめて重要であるため、以下において、それについては別の項目として扱われています。しかし、ほかにもいくつかあり、とくに「バビロンから逃げよ」⁸という命令が挙げられます。この命令に正しく応答するためには、神の時を注意深く見極めることが必要となります。すなわち、一方では、(艱難期にそこに住んでいる信者たちにとって)適切な時より前にバビロンを離れることを控え、他方では、その命令が与えられたなら、ためらうことなく直ちに立ち去ることが求められます。すべてのことには「ふさわしい時」がありますが、神の具体的な命令に正確に従うことによって、その時を正しく見極めることが、艱難期ほど重要となる時は、他にありません。

万事には定められた時があり、天の下のすべての営みには時がある。(伝道の書 3 章 1 節/KJV 訳)

⁸ [「来たる艱難期」第 5 部.II.4.「バビロンから離れ去れ」](#)を参照。

(1)さて、時と季節[すなわち将来の預言の流れと、その中で起こる個々の出来事]については、兄弟たちよ、あなたがたに書き送る必要はない。(2)あなたがた自身がよく知っているとおりの、主の日[すなわち艱難期に始まる神の終末的さばきの時]は、夜の盗人のように来るのである。(3)人々が「平和だ」「安全だ」と言っているそのまさに時に、滅びは彼らの上に突然襲いかかる。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようにである。(第一テサロニケ 5 章 1-3 節)

6. 偽りの奇跡や偽メシアを決して信用しないこと:

「偽キリストや偽預言者が現れ、大いなるしるしや奇跡を行い、もし可能であれば選ばれた者たちさえ惑わそうとするのである。」(マタイ 24 章 24 節/NIV 訳; マルコ 13 章 22 節参照)

主ご自身によるこの警告は、きわめて重要な情報です。もしこれがなければ、(聖書に十分通じていない人にとっては)反キリストをキリストと取り違える危険があるだけでなく、獣が反キリストであり、その預言者が偽預言者であることを認識している信者でさえ、ほかの誰かがキリストや預言者であると主張した場合に惑わされてしまう可能性があります。実際、艱難期には、この世の人々は、残念ながら多くのクリスチャンを含めて、反キリストに従って行くこととなります。そしてそれは、彼がしるしや奇跡を行う力に乏しいからではなく、むしろそれらを巧みにを行い、自分がイエス・キリストであるかのように装うからです⁹。忠実なクリスチャン、すなわち真に神を知っている者たちは、これから起こると預言されている大騒ぎや熱狂の中に巻き込まれないよう、細心の注意を払う必要があります(それが獣自身から出るものであれ、神から来たと偽って主張する他の者から出るものであれ同様です)。そのためには、目に見えるものや耳に聞こえるものに頼るのではなく、聖書が実際に何を語っているかにしっかりと焦点を合わせる必要があります。

「その時、だれかがあなたがたに、『見よ、ここにキリストがいる』とか、『見よ、あそこにいる』と言っても、それを信じてはならない。」(マルコ 13 章 21 節/NIV 訳; マタイ 24 章 23 節参照)

「人々は、『ほら、あそこにいる』とか、『ここにいる』と言うであろう。しかし、追いかけて行ってはならない。」(ルカ 17 章 23 節/NIV 訳)

主は言われた。「惑わされないように気をつけなさい。多くの者がわたしの名を名乗って現れ、『わたしがそれだ』とか、『時は近い』と言うが、彼らに従ってはならない。」(ルカ 21 章 8 節/NIV 訳)

「だから、あなたがたは注意していなさい。わたしはすべてのことを前もってあなたがたに告げておいたのである。」(マルコ 13 章 23 節/NIV 訳)

7. 反キリストに取り込まれた個人や集団との関係を続けてはならない:

⁹ 「来たる艱難期」第 3 部 A.II.3.c.1「人を虜にする艱難期の偽りの教えの説得力」< A5 版印刷本では 122 頁 > を参照のこと。

[ヘブル 10 章 25 節](#)において、パウロはエルサレムの信者たちに「集まりをやめてはならない」と勧めています。この箇所ではしばしば見落とされているのは、集まることの目的です。それは「互いに励まし合う」ことであり、真のクリスチャンとしての励ましは、神の御言葉の真理によってのみ与えられるものです（牧師からであれ、会衆の仲間からであれ同様です）。ラオデキヤの時代である現代においては、生ぬるい会衆や教派との交わりは、霊的な意味ではしばしば否定的なものです。というのも、一つには真理において成長するために用いることのできた時間や努力が無駄になるからであり、また一つには、そのような集団においては誤った教えや律法主義的で薄められた教え（もし教えがあるとしても）が一般的だからです。それが必ずしも霊的に致命的であるとは限りませんが、艱難期においては事情がまったく異なります。その時には、これらの集団のほとんど、あるいはすべてが、反キリストの世界的宗教の中に取り込まれることになるからです。そのような状況のもとで交わりを続けることは、励ましや霊的成長の助けになるどころか、きわめて危険なものとなります。なぜなら、その時には悪魔の子である反キリストが礼拝の対象となり、イエス・キリストではなくなるからです（今日しばしば見られるような形式的な意味でさえも、もはやキリストが中心ではなくなるのです）¹⁰。どれほど大切に思っている個々のクリスチャンとの交わりであっても、このような根本的な妥協をしてまで続ける価値はありません。また、このように致命的に汚された交わりの中にとどまり続けようと決めている人々は、交わりを続けるに値する存在ではありません。艱難期において、組織化されたキリスト教との関係を断たないままでは、そこから生じるのは、心の痛みと妥協、そして極めて大きな霊的危険だけです。多くの人にとって、仲間外れにされたり排斥されたりすることは、確かに耐えがたいものとなるでしょう。しかし実際には、それは名誉のしるしであり、イエス・キリストに対する真の奉仕となるのです。

(12) それゆえイエスもまた、ご自身の血[すなわち十字架上の死]によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられたのである(すなわち交わりから切り離されたのである)。(13) だから私たちも、宿営の外に出て、みもとに行こうではないか(すなわちこの世よりも神を選ぶ者となるのではないか)。そして主の受けられた辱めを共に担おうではないか。(14) 私たちは、この地上において永続する都を持っているのではなく、来るべき都[すなわち新しいエルサレム]を待ち望んでいるのである。([ヘブル 13 章 12-14 節](#))

8. 反キリストの偽りの宗教に加わったり協力したりしてはならないこと:

艱難期前半において反キリストへの熱狂の波に巻き込まれた生ぬるいキリスト教集団から離れないことも問題ですが、それよりもはるかに重大なのは、艱難期後半において獣の偽りの宗教に正式に加わることです。たとえそれが直接的な意思によるものでなく、すなわち自分が属している教会や教派が正式に獣の宗教に加わり、そのまま所属し続けるという形であったとしても、そのような体制に加担する危険性は、明白な背教に至る一歩手前とも言えるほど、霊的にきわめて致命的なものとなります。この時点において、反キリストは公然と、かつ正式に自らをキリストであると宣言し、エルサレムの神殿に座し、その後、世界中の信者に対する大迫害を開始します。世の考え方からすれば、自分に注意が向けられないようにするために、交わりを続けたり、自分の教会や教団が取っている背教的な道に同調しているかのように振る舞ったりしたくなる人がい

¹⁰ [「来たる艱難期」第3部 A.II.3.「大背教の原因」](#)を参照のこと。

るのは、確かに理解できることです。しかし、獣をイエス・キリストとして受け入れるという冒流的な立場を取る組織に所属し続けながら、同時に真の救い主への信仰を保ち続けることが本当に可能であるかどうか(つまり、強い心の中での留保によって形式的な参加をしながら信仰を保つことができるかどうか)については議論の余地があるかもしれませんが、そのような行動が少なくともきわめて危険であるという点については、まったく疑いの余地がありません。それは、きわめて不確かな身体的安全のために、霊的安全を危険にさらすことになるからです。このような対応は、きわめて割に合わない選択であるだけでなく、たとえ迫害を避けるためにそのような不誠実な関係を続けようとする人が、理論上は当初しばらくの間信仰を保つことができたとしても、その妥協した霊的立場と、そのような偽りの姿勢が必然的に生み出す勇気の低下とが相まって、やがてその時が来たときに獣の刻印を受け入れないでいることは、きわめて困難になるでしょう。

取り返しのつかない段階に至る以前であっても、反キリストとその偽預言者は、特にその世界的宗教を用いて、このような妥協を拒む真の信者たちを見分け、取り扱い(いわば「処理」)しようとする可能性が高いです。この種のことは、歴史上すでに起こっています(たとえば宗教改革期におけるローマ・カトリックによるプロテスタント迫害や、ナチスによるヨーロッパのユダヤ人の一斉検挙などです)。したがって、反キリストの「世界的教会」に取り込まれ、実際にその一部となってしまった教会に所属し続けながら、そのような深刻な道徳的選択に直面せずに済むと考えるのは、きわめて愚かなことです。もしある人が、そのような組織の中に事実上身を隠しているとするならば、自分の番が来て他の信者を裏切るよう求められたとき、その時になって突然、霊的な勇気を見い出して「ノー」と言える可能性がどれほどあるのでしょうか。むしろ、そのような人々にとっては、自分の行いを正当化し、他の人を裏切ることによって安全が保たれている自分たちや身近な人々を守っているのだと考える誘惑の方が、圧倒的に強くなるのではないのでしょうか。¹¹

以上の議論は、すべての信者がこれらの事柄をあらかじめ十分に理解しており、特に臆病な者だけがこの罠に陥る、という前提に立っています。しかし、私たちがラオデキヤの生ぬるい教会時代に生きているという事実を考えれば、その前提が成り立たないことは明らかです。現在の教会に見られる霊的未熟さの度合いを考えると、患難期に備えないまま入っていく人々にとっては、関わりを持つことによる妥協の危険というこの問題が、さらに何倍にも増大することは避けられません。したがって、多くの点において、患難期に備えない信者が直面する問題や危険は、今日すでに存在しているものと本質的には同じであるとはいえ、その時には状況がはるかに危険の度合いを高め、しかも霊的破綻に至るまでの進行期間も大幅に短くなることとなります。

使徒パウロは、エペソの長老たちへの最後の別れの言葉の中で、これらと同様の危険を予見し、その当時の目に見える教会の内外から生じる攻撃の圧力に直面する際に、私たちが取るべき心構えを示しています([使徒行伝 20 章 27-35 節](#))。

¹¹ 確かに、他の人々を守るために義しい形で身を隠したり事実を隠したりした信者の例は聖書の中に見られます(例えば、ラハブがイスラエルの斥候をかくまったこと;そしてヤコブがこの行為を義と述べていることを参照:[ヤコブ 2 章 25 節](#))。しかし、個人的な安全を求める思いから偽りの態度を取ることは、患難期においては少なくとも疑わしい行動となるでしょうし、もしそれが他の信者を傷つける結果につながるならば、それはまったく非難を免れない、弁解の余地のない行為となります。

1) 真の福音の教師は、聖書の真理を余すところなく宣べ伝えます:

「わたしは、神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに告げ知らせることをためらわなかったのである。」([使徒行伝 20 章 27 節](#)/NIV 訳; 20 節参照)

2) キリストの正当な僕として、真の福音の教師は、会衆の真の霊的福祉を気にかけます:

「あなたがた自身と、群れのすべてに気を配りなさい。聖霊は、あなたがたを監督として立て、神の教会を牧させられたのである。神は、ご自身の血によってこの教会を買い取られたのである。」([使徒行伝 20 章 28 節](#)/NIV 訳)

3) 真のクリスチャンの集団であっても、サタンの僕たちによる激しい侵入攻撃を受けることになります:

「わたしが去った後、残忍なおおかみがあなたがたの中に入り込み、群れを容赦なく荒らすようになることを、わたしは知っている。」([使徒行伝 20 章 29 節](#)/NIV 訳)

4) 背教者たちは、御言葉の真理をゆがめることによって、真のクリスチャンの集団の中からさえ現れ、人々を惑わせます:

「また、あなたがた自身の中からも、人々を自分の方へ引き込むために、真理を曲げて語る者たちが起こってくるのである。」([使徒行伝 20 章 30 節](#)/NIV 訳)

5) したがって、これらの危険に対する警戒は不可欠であり、この主題について聖書が繰り返し警告していることに対する正しい応答です:

「だから、警戒していなさい。わたしが三年の間、夜も昼も涙をもって、あなたがた一人ひとりを絶えず戒めてきたことを思い出しなさい。」([使徒行伝 20 章 31 節](#)/NIV 訳)

6) これらの事柄に対する唯一の真の防御は、神の御言葉を聞き、理解し、信じ、適用することによって築かれる霊的成長です:

「今、わたしはあなたがたを神と、その恵みの御言葉とにゆだねる。その御言葉は、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、相続を受けさせることができるのである。」([使徒行伝 20 章 32 節](#)/NIV 訳)

7) 真の福音の教師は、すべての点において清い模範を示すので、偽教師(およびその誤った教え)は、その真の基準に達していないことによって容易に見分けることができます(どちらが真であるか疑いがある場合

でも同様です) :

(33)「わたしは、だれの銀や金や衣服も欲しがったことはない。(34)あなたがた自身が知っているように、この手で、わたし自身の必要と、共にいる者たちの必要とを満たしてきたのである。(35)わたしは、あらゆることにおいて、このように労苦して弱い者を助けるべきこと、また主イエスご自身が言われた、『受けるよりも与える方が幸いである』という言葉覚えておくべきことを、あなたがたに示してきたのである。」(使徒行伝 20 章 33-35 節/NIV 訳)

パウロのこれらの言葉は、現在の私たちにも当てはまるだけでなく、特に艱難期の経験にも当てはまるという重要な意味があります。真理がゆがめられることへの警告と、真理を余すところなく語ることの重要性を強調する中で、使徒は、今日の目に見える教会の中に広く見られる三つの代表的な誤った教理を思い起こさせます。これらはいずれも、それを誤って受け入れる人々を、艱難期において獣の宗教との同化や妥協という罠に陥りやすくするものです(これらについては次の項目でさらに詳しく扱われます)。

- 艱難期前の復活(いわゆる「携挙」)に対する誤った信仰: 多くのクリスチャンは、艱難期が始まったとき、自分たちはそれを経験しないはずだと考えてきたために、実際にそれが始まったときには、何が起きているのか全く理解できない状態に陥るでしょう。このように深く信じてきた誤った教えが事実ではなかったと分かったとき、その失望は信仰全体を揺るがす原因となりかねません。さらに、この教理は偽りの安心感を与えることによって無関心や世俗化を生み出し、霊的未熟さを助長するとともに、「霊的備えが不足していても危険ではない。少なくとも艱難期を経験することはないのだから」という愚かな考えを、現在すでに広めています。
- 無条件の永遠の保障(いわゆる「一度救われたら永遠に救われている」)に対する誤った信仰: この誤った考えは、平穏な時代においてさえ危険ですが、艱難期においてはさらに重大な害をもたらすものとなります。現在の議論に関連して言えば、自分が何をしても救われ続けると考えている人々は、獣の宗教に妥協することが永遠の将来を危険にさらすものではないと考えてしまう可能性があります。そして聖書がきわめて明確に警告しているにもかかわらず、獣の刻印を受けることでさえ問題ないと、愚かにも思い込んでしまうかもしれません。
- 制度的な所属によって霊的安全が保たれるという誤った信仰(いわゆる「行いによる救い」): もしキリスト教会や教派との交わりを維持している人は自動的に守られていると考えるならば、本来は霊的安全のために離れるべき時に、なおもその交わりを続けようとする傾向が生じます。会員であること、献金、洗礼、あるいはその他の具体的な儀式や慣習が、誤って特別な力を持つもののように扱われるならば、その結果として、その信者の信仰は救いの岩であるイエス・キリストではなく、そうした肉的な行為に依存するものとなってしまいます。そして決断の時が来たとき、致命的な妥協に陥る危険性が、それだけ一層高まることになるのです。

上記の三つの誤った教理が、艱難期直前のこの生ぬるい時代においてクリスチャンが直面している問題

を的確に示しているとするならば、それに対する解決もまた同様に簡潔にまとめることができます。そしてそれは、反キリストの宗教に協力することに表れる霊的臆病さとは対照的な、霊的勇気を持つための正しい心構えの基礎ともなるものです。クリスチャン生活における他のすべてのことと同様に、真理——すなわちその真理を信じ、実践し、他の人々に分かち合うこと——こそが、神の御言葉そのものであるイエス・キリストに信頼を置いたすべての人にとっての答えです。霊的成熟、前進、そして実りある働きが、信者のイエスとの歩みの中にしっかりと組み込まれるならば、現在私たちが直面している圧力、そして将来はるかに強く集中的な形で直面することになる圧力に対抗するための正しい心構えは、主とともに注意深く歩むことであり、とりわけ艱難期が始まったならば、主を忍耐強く待ち望むことにあります。

御国が来ますように。(マタイ 6 章 10 節前半/KJV 訳)

(7)こうしてあなたがたは、私たちの主イエス・キリストの現れを待ち望みながら、どの霊的賜物にも欠けるところがないのである。(8)神はまた、私たちの主イエス・キリストの日[すなわち再臨]まで、あなたがたを責められるところのない者として堅く保ってくださいるのである。(第一コリント 1 章 7-8 節)

マラナ・タ! [「主よ、来てください!」の意](第一コリント 16 章 22 節)

(9)…彼らは、あなたがたが偶像から神へと立ち返り、生ける真の神に仕えるようになったこと、(10)そして、天から来られる御子[すなわち再臨]を待ち望んでいることを語り伝えている。この御子こそ、死者の中からよみがえらされたイエスであり、来たるべき怒りから私たちを救い出してくださいる方である。(第一テサロニケ 1 章 9 節後半-10 節/NIV 訳)

(6)神は正しい方であり、あなたがたを苦しめている者たちには苦しみをもって報い、(7)苦しめられているあなたがたには、私たちとともに安らぎを与えてくださるのである。これは、主イエスが力ある御使いたちを伴い、燃え盛る火の中にあって天から現れる時[すなわち再臨]に起こるのである。(第二テサロニケ 1 章 6-7 節/NIV 訳)

私たちは、**祝福された望み**、すなわち私たちの偉大な神であり救い主であるイエス・キリストの栄光の現れ[すなわち再臨の時、私たちも栄光のうちによみがえる時]を**待ち望んでいる**のである。(テトス 2 章 13 節)

あなたがたの信仰が、この人生のるつぼの中で真実であることが証明されるとき、それはイエス・キリストの現れ[すなわち再臨]の時に、あなたがたにとって称賛と栄光と誉れをもたらすのである。(第一ペテロ 1 章 7 節)

すべての信者は、今のうちからイエスを待ち望むことを身につけていくべきです(例:[第一コリント 1 章 7 節](#); [ピリピ 3 章 20 節](#); [第一テサロニケ 1 章 10 節](#); [テトス 2 章 13 節](#); [ヘブル 9 章 28 節](#); [マルコ 15 章](#)

43 節; [ルカ 2 章 25 節](#), [2 章 38 節](#), [12 章 36 節](#), [23 章 51 節](#); [使徒行伝 24 章 15 節](#); [ローマ 5 章 1-5 節](#), [8 章 23-25 節](#); [ガラテヤ 5 章 5 節](#); [ヤコブ 5 章 7-8 節](#); [第二ペテロ 3 章 12-14 節](#); [ユダ 1 章 21 節](#) 参照)。そうすることによって、一方では反キリストの新しい宗教の熱狂に巻き込まれることを避けることができ、他方では、獣に妥協する人々から見捨てられ、交わりや社会的つながりを失うことになっても、それに耐えることができるようになります。イエスは今も私たちの手を取って導いておられます。私たちは、人々や御使いたちの前で、本来すべき証しをしているのでしょうか。もしそうでないなら、本当に大きな圧力がかかったときに、私たちは何を期待できるのでしょうか。したがって、今から主に心を向け、その時にかなって主が来られることを待ち望むならば、その時には、この世が私たちの身体に何をしようとも、私たちの心においてこの世に打ち勝つことが、より確かなものとなるでしょう([イザヤ 16 章 4 節](#)後半; [35 章 1-2 節](#); [第二ペテロ 3 章 10-12 節](#)参照)。

あなたは多くの苦しみと辛い試練とを私に経験させられたが、再び私を生かし、地の深みから再び私を引き上げてくださる。[\(詩篇 71 篇 20 節\)](#)/NIV 訳)

しかし私は、主を待ち望み、私の救いの神を待つ。私の神は私の声を聞いてくださる。私の敵よ、私のことで喜ばな。たとえ私が倒れても、私は再び立ち上がる。たとえ暗闇の中に座していても、主が私の光となられる。[\(ミカ 7 章 7-8 節\)](#)/NIV 訳)

9. 獣の刻印を受けてはならないこと： 艱難期においてクリスチャンに与えられる特別な指示の中で、最も重大な違反となるのは、獣の刻印を受けることです。

(9)さらに第三の御使いが彼らに続いて、大声で言った、「だれでも獣とその像を拝み、その刻印を額または手に受けるならば、(10)その者自身もまた、神の怒りの杯に混ぜ物なしで注がれた神の憤りのぶどう酒を飲むことになる。そしてその者は、御使いたちと聖徒たち、そして小羊の前で、火と硫黄によって苦しめられる。(11)彼らの苦しみの煙は世々限りなく立ち上り、獣とその像を拝む者、またその名の刻印を受ける者には、昼も夜も休みがない。」([黙示録 14 章 9-11 節](#))

これ以上に明白な警告はありません。しかし、前の八つの点に注意を払わず、反キリストの偽りの宗教との妥協に深く入り込んでしまった信者にとっては、この取り返しのつかない境界線を越えることが、本来それほど恐ろしく考えられないことであっても不思議ではありません。ここでの本当の問題は、やがて来る目に見えないものではなく、目に見えるこの世の事柄だけに心を向けてしまうことにあります。しかし、すべての真のクリスチャンの心が本来向けるべき焦点は、目に見えないものにあります。目に見えない方、すなわち私たちの愛する主イエス([ヘブル 11 章 27 節](#))と密接に歩み続けることによってのみ、艱難期の信者たちは、かつて親しかった人々との別れや、艱難期前半において真理を選び続ける人々に必ず向けられる排斥や中傷に耐えることができるようになります。同様に、大艱難期において反キリストの宗教が世界を支配するようになった後には、イエスを第一とし、やがて与えられる祝福に目を向け続けることによってのみ、刻印を受けることを拒む人々に課される厳しい経済的制裁、さらにはそれに続く大迫害に耐えることができます。私たちの真の市民権は、この地上ではなく、天にあります([ピリピ 3 章 20 節](#))。私たちの宝はそこに蓄えられており

([マタイ 6 章 19-20 節](#))、私たちが主に委ねたものは、主によってそこに守られており([第二テモテ手紙 1 章 12 節](#); [エペソ 1 章 14 節](#); [第二テモテ 1 章 14 節](#)参照)、そして主が栄光のうちに再び来られるとき、復活と報いにおいて与えられる救いの賞を、私たちはそこから受け継ぐことを望んでいます([第一ペテロ 1 章 7-8 節](#); [テトス 2 章 13 節](#); [第一ヨハネ 3 章 2-3 節](#)参照)。それとは対照的に、この世が価値あるものとして重んじているすべてのものは、実際には取るに足りないものにすぎません。

諸国の民はむなしいことのために疲れ果て、国々の労苦はただ火の燃え草となるだけである。(エ
[レミヤ 51 章 58 節](#)後半/NIV 訳)

「人の一生はただ一度きりで、やがて過ぎ去ってしまう。キリストのためにしたことだけが永遠に残る」という言葉は、まことに真実です。私たちがイエスの御名によって行うすべてのことには報いが与えられますが、この世のものは、私たちが今想像している以上に、はるかに一時的なものです。私たちの兄弟姉妹の中に、ほんのわずかな年月の間に味わう「一杯の煮物」(すなわち一時的な利益)のために、永遠に続くはずの祝福を危険にさらし、さらには獣の刻印を受ける者の場合には、それを完全に失ってしまう者が出るということは、考えるだけでも身の震えるほど恐ろしいことです。そしてそれは、これから来る困難な荒野を歩むにあたり、クリスチャンとしての焦点を失うことがいかに危険であることを示しています。私たちがこの艱難期という荒野を無事に越え、シオンにおいて主とお会いするためには、イエスを心の中で聖なる方としてあがめ、悪魔の代用品を礼拝することを断固として拒むことが必要です([イザヤ 8 章 13 節](#); [第一ペテロ 3 章 15 節](#)参照)。

(5) 幸いなのは、その力をあなたに置き、その心がシオンへの大路に向けられている者たちである。(6) 彼らは[乾いた]バカの谷(すなわち人生の荒野)を通るとき、そこを泉の湧く場所とする。初めの雨もまた、それを祝福で覆うのである。(7) 彼らは力から力へと進み、ついにはシオンにおいて神の御前に現れるのである。(詩篇 84 篇 5-7 節)

(5) 涙をもって種をまく者は、喜びの歌をもって刈り取る。(6) 種を携えて泣きながら出て行く者は、束を携え、喜びの歌をもって帰って来る。(詩篇 126 篇 5-6 節/NIV 訳)

イエスにあって忍耐する者たちは、主の再臨の時に、その涙が喜びへと変えられるのを見ることになりませんが、心の中でエジプトへと引き返し、獣の刻印を受けてこの世と妥協する者たちには、まったく異なる結果が待っていることは間違いありません:

(35) だから、あなたがたのこの確信を捨ててはならない。それは大きな報いをもたらすのである。(36) あなたがたには忍耐が必要である。神のみこころを行った後に、約束されたものを勝ち取るためである。(37) もうしばらくすれば、どれほど短いことか、来るべき方は来られるのであり、遅れることはない。(38) 「わたしの義人は信仰によって生きるのである。しかし、もし退くなら、わたしの心は彼を喜ばないのである」([ハバクク 2 章 3-4 節](#))。([ヘブル 10 章 35-38 節](#))

主イエスは、三年半にわたる公の宣教においてさまざまな試練を耐え忍ばれる前に——その期間は艱

難期の長さや正確に一致しており(それは意図的なものです)——まず三十年にわたる集中的な備えの時を過ぎられ、さらに荒野における四十日間の試みによってその備えが完成しました。私たちもまた、それを受け入れる用意がある限り、やがて来る出来事に備えて整えられているのです。私たちも今のうちに、個人的な苦難のただ中であって喜びを持つこと(ヤコブ 1 章 3 節参照)や、混乱や試練の中であって平安を持つこと(ヨハネ 16 章 33 節参照)を学ぶことができます。しかし、間もなく訪れる出来事に備えるどころか、ラオデキヤの時代に生きる大多数の信者たちは、むしろ将来の日における圧力に対して自分自身を弱くしているだけです。そして、この霊的無関心によって生じた弱さこそが、かつては信者であった多くの人々が強制に屈して獣の刻印を受けてしまう理由を説明するものです。霊的な意味でまったく備えができていないため、その日の多くの兄弟姉妹は、主に心に向ける代わりに圧力そのものに心を奪われ、その結果として、その圧力に耐えられないほど大きく感じてしまうことになるのです。

(20) 岩地に蒔かれたものとは、御言葉を聞くとすぐに喜んで受け入れる人のことである。(21) しかしその人には[信仰の]根がないので、しばらくの間しか続かない。そして御言葉のために苦難や迫害が起こると、たちまちつまづいてしまうのである(すなわち背教するのである)。(マタイ 13 章 20-21 節)

前に述べたように、現在のラオデキヤの時代において無関心が支配している理由は数多くありますが、今日の目に見える教会に特徴的な霊的自己満足を生み出している大きな要因として、現在広く信じられている三つの誤った考えがあります：

艱難期は「携挙」があるので関係ない、という考え——しかし、もし教会が艱難期を通るとしたらどうでしょうか。そして実際に、教会は艱難期を通ることになるのです。

背教は「絶対的な永遠の保障」があるので心配ない、という考え——しかし、もし真のクリスチャンが信仰を完全に失うことによって救いを失うことがあるとしたらどうでしょうか。そして実際に、多くの人々がそうなるのです。

霊的未熟さは、キリスト教会に「所属している」ことで守られるので問題ない、という考え——しかし、もし組織化されたキリスト教集団がすべて獣に加わるとしたらどうでしょうか。そして実際に、そうなるのです。

終末論について無知であるだけでなく、「携挙」という誤った教理のために艱難期に関する聖書の警告は自分には当てはまらないと考えてそれに注意を払ってこなかったクリスチャンたち、また霊的成長によって信仰を築き上げる努力をしてこなかったばかりか、「一度救われたら永遠に救われている」という誤った教理のために、自分の信仰が脅かされる可能性そのものを否定している人々、さらに「教会に所属していれば安全である」という誤った考えのために霊的成長の過程そのものを怠ってきた人々は、艱難期が始まると同時に、自分たちの拠りどころとしてきたあらゆる安全装置がことごとく揺るがされることとなります。携挙を期待していたにもかかわらず、彼らは艱難期のただ中に自分がいることを知るようになります。「無条件の永遠の保障」を頼りにしていたにもかかわらず、彼らは信仰をめぐる大きな戦いの中に置かれることとなります。また、特定

の教会や集団の中に身を寄せて安全を得られると思っていたにもかかわらず、それらの組織こそが妥協し、やがて何のためらいもなく獣とその宗教に加わっていくのを見ることになります。要するに、ラオデキヤの時代に生きる平均的な信者にとって、その試練の日は、あらゆる面でまったく備えのない、きわめて弱い状態で迎えることになるのです。そのような状況を考えれば、教会の三分の一が背教して刻印を受けるの方が驚くべきことなのではなく、むしろ三分の二がそうならないこと、そしてそのうちの三分の一が霊的妥協よりも死と殉教を選ぶことの方が驚くべきことと言えるでしょう。現在の私たちの目には霊的に生き残る見込みが非常に薄く見える多くの人々が、実際には立ち上がり、忍耐し、多くの場合には主のために命を捧げることによって主をあがめることになるという事実は、神の恵みの大きさと御言葉の力の偉大さを示すものです。ですから、今日広く行き渡っているこれらの誤った教えに陥っていない私たちは、現代のラオデキヤ的な無関心が現実によって打ち砕かれる時が来たときに、兄弟姉妹が前に立ちただかる試練に立ち向かうのを助けるため、主に用いられる者となるべく、今のうちからできる限りの備えをしておく必要があります。

(14)たとえあなたがたが正しいことのために苦しみを受けるとしても、あなたがたは幸いである。「彼らが恐れるものを恐れてはならない。おびえてはならない。」(15)むしろ、あなたがたの心の中でキリストを主として聖なる方としなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について理由を求めるすべての人に対して、いつでも弁明できる備えをしていなければならない。(第一ペテロ 3 章 14-15 節前半/NIV 訳)

10. 迫害や殉教を恐れてはならないこと:

イエス・キリストを信じる者として、私たちはこの世の者ではありませんが、なおこの世にとどまっています。それは、私たちがこの世に対してどのように応答するかを通して、主の真理の力を証しし、主に仕えるためなのです。(ヨハネ 15 章 19 節, 17 章 14-16 節, 18 章 36 節参照)。イエスへの弟子としての歩みを真剣に受け止めているすべての人、すなわち永遠の報いを真に待ち望み、この現在の世界を天の視点から見ている人々にとっては、悪しき者が私たちに投げかけてくる感情的・肉体的な苦しみも、より耐えやすいものとなるはずです。少なくとも、主への深い信仰が絶えず私たちに思い起こさせてくれるとおりに、死は恐れるべきものではないからです。死は、これらの苦しみを終わらせ、私たちが深く愛している主と顔と顔を合わせて会うことへと導くだけだからです。

(31)では、これらのことについて何と言えよいであろうか。もし神が私たちの味方であるならば、だれが私たちに敵対できるであろうか。(32)ご自身の御子をさえ惜しまず、私たちのために引き渡された方が、どうして御子とともに、私たちに必要なすべてのものを恵みとして与えてくださらないことがあろうか。(33)だれが神に選ばれた者たちを訴えることができるであろうか。義と宣言してくださるのは神である。(34)だれが私たちを罪に定めることができるであろうか。キリスト・イエスこそ、私たちの代わりに死なれた方であり、さらに私たちのためによみがえられた方であり、神の右の座に着いておられ、私たちのためにとりなしをしておられる方である。(35)だれが私たちをキリストの愛から引き離すことができるであろうか。苦難であろうか。困窮であろうか。迫害であろうか。飢えであろうか。貧困であろうか。危険であろうか。暴力であろうか。(36)「あなたのために、私たちは一日中死に渡され、ほふられる羊のように見なされているのである」と書かれているとおりにある。

(37)しかし、これらすべてのことにおいて、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、圧倒的な勝利者となるのである。(38)私は確信している。**死も命も、御使いも支配する者たちも、現在のものも将来のものも、どのような力も、**(39)高いものも低いものも、またその他どのような被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできないのである。(ローマ 8 章 31-39 節)

私にとって、生きることはキリストであり、**死ぬことは益である。**(ピリピ 1 章 21 節)

(14)それゆえ、これらの子ら(すなわち 13 節の者たち)が血と肉とを共有しているので、キリストもまた同じものを分かち持たれたのである(ただし処女降誕によって罪がなかったという点においてのみ同一ではない)。それは、ご自身の死によって、死の力を持つ者、すなわち悪魔を滅ぼし、(15)**死への恐れによって**一生涯奴隷状態にあった者たちを解放するためであった。(ヘブル 2 章 14-15 節)

これらのことを知り、また私たちが聖霊によって証印を押され、守られていることを覚え(第二コリント 1 章 21-22 節; エペソ 1 章 13-14 節, 4 章 30 節参照)、さらに、どれほど厳しいものであっても、私たちは自分が本当に耐えられる以上の試みに会うことは決してないという確かな確信を持つならば(たとえ私たちの目や耳がどのように訴えようとも: 第一コリント 10 章 13 節参照)、成熟し備えられた信者たちは、迫害や投獄、拷問、さらには殉教でさえ——もしそれが神のみこころであるならば——主をあがめる仕方で耐え抜くことが可能となります。その主こそ、私たちのためにすべてを捨ててくださった方です。そしてそのように耐え抜くことによって、私たちは、このはかない世が提供し得るどんなものよりも価値あるものとして大切にしてきた永遠の報いを失わずに守るだけでなく、むしろそれを確かなものとし、さらに増し加えることとなります。それは、イエス・キリストのために究極の犠牲を払う用意があることによって実現するのです。なぜなら、主ご自身が私たちのためにすべてを犠牲にしてくださったからです。

[イエスは]再び二度目に離れて行き、祈って言われた、「わが父よ、この杯がわたしから過ぎ去らないで、わたしがそれを飲まなければならないのであれば、あなたのみこころが成りますように。」(マタイ 26 章 42 節/KJV 訳)

この最後の点を十分に理解し、正しく実行するならば、これまで述べてきた多くの点、いやその大部分は解決されることとなります。イエスの御名のために死をも辞さない備えを持つことは、深い霊的成熟の表れです。ですから、嵐の雲が立ち上っているのを見ている私たちは皆、もしそのような必要が生じたときに主をあがめることができるだけの信仰の深さと耐え抜く力を、その時に豊かに持つことができるよう、今、必要なことをすべて行う決意を新たにしようではありませんか。そして、これから来る困難な日々の中で、神が私たちにどのような経験を許されるにせよ、私たち自身の模範によって他の信者たちを励まし、彼らが忍耐し続ける助けとなることができるよう願うべきです。

(13)そこでモーセは民に言った、「恐れてはならない。しっかり立って、今日主があなたがたのために行われる救いを見よ。あなたがたが今日見ているエジプト人を、あなたがたはもはや永遠に再び

見ることはない。(14)主があなたがたのために戦われるのである。あなたがたは静かにしていなければならない。」([出エジプト記 14 章 13-14 節](#))

(12b)彼らが恐れるものをあなたがたは恐れてはならない。それにおののいてはならない。(13)万軍の主、この方こそ、あなたがたが聖なる方として心にあがめるべき方であり、この方こそあなたがたの恐れるべき方、この方こそあなたがたがおののくべき方である。([イザヤ書 8 章 12b-13 節](#))

(12)「わたし、わたしこそがあなたを慰める者である。草にすぎない人間、ただの人の子を恐れるあなたとは何者であるのか。(13)天を広げ、地の基を据えたあなたの造り主である主を忘れ、滅ぼそうとして圧迫する者の激しい怒りのゆえに、日ごとに絶えず恐れているとは何事であるのか。その圧迫する者の怒りはどこにあるのか。(14)おびえている捕らわれ人は、まもなく解き放たれる。彼らは牢で死ぬこともなく、パンに欠けることもないのである。」([イザヤ書 51 章 12-14 節](#)/NIV 訳)

(21)しかし、私はこのことを思い起こす。それゆえに私は望みを持つ。(22)主の大いなる愛(直訳「憐れみ」)によって、私たちは滅び尽くされない。主のあわれみは尽きることがないからである。(23)それは朝ごとに新しい。あなたの真実はまことに大きい。(24)私は自分に言う、「主こそ私の受ける分である。それゆえ私は主を待ち望む。」([哀歌 3 章 21-24 節](#)/NIV 訳)

(24)それからイエスは弟子たちに言われた、「だれでもわたしについて来たいと思うならば、まず自分自身の願望を捨て、次に自分の十字架を取り上げて、わたしに従いなさい。(25)自分の命を守ろうとする者は、それを失うことになり、しかし、わたしのために自分の命を失う者は、それを得るのである。」([マタイ 16 章 24-25 節](#))

(12)しかし、これらのこと(すなわち 8-11 節の出来事)に先立って、人々はあなたがたに手をかけ、あなたがたを捕らえ、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督たちの前に引き出すであろう。(13)それはあなたがたにとって、わたしの証しをする機会となるのである。(14)だから、前もって弁明の準備をしないよう、心に決めておきなさい。(15)わたしはあなたがたに、敵対する者がだれも反論も反駁もできないような口と知恵を与えるからである。(16)あなたがたは、両親や兄弟や親族や友人によってさえ裏切られ、その中のある者は殺されるであろう。(17)また、あなたがたはわたしの名のゆえに、すべての人に憎まれるであろう。(18)しかし、あなたがたの頭の髪の毛一本さえ失われることはない。(19)あなたがたは忍耐によって、自分たちの[永遠の]いのちを保つのである。」([ルカ 21 章 12-19 節](#); [マタイ 24 章 13 節](#); [マルコ 13 章 13 節](#)参照)

(40)そこで彼ら(議会)は使徒たちを再び呼び入れ、彼らを打ったうえで、イエスの名によって語ってはならないと命じて解放した。(41)そこで使徒たちは、御名のために辱めを受けるに値する者とされたことを喜びつつ、議会の前から去って行った。([使徒行伝 5 章 40-41 節](#))

「あなたがこれから受けようとしている苦しみを恐れてはならない。見よ、悪魔はあなたがたの中

のある者を試すために牢に投げ込もうとしている。そしてあなたがたは十日の間、苦難を受けることになる。死に至るまで忠実であれ。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。」(黙示録 2 章 10 節)

また、私は天からの声がこう言うのを聞いた、「書き記せ。今からのち、主にあって死ぬ者たちは幸いである。彼らはその労苦から解き放たれて休むことができる」と御霊が言われる。「彼らの行いが彼らに伴って行くからである。」(黙示録 14 章 13 節)

III. 艱難期のひな型(パラダイム)

真にイエスとともに歩んでいる信者の場合、すべてのクリスチャンの生涯は、ある程度において艱難期の型、すなわちひな型となるものです。成熟した信者の人生には、いずれの時にも個人的な試練(個人的艱難)が訪れるものであり、多くの場合、イエスとのより親しい歩みや、教会に仕える働きにおいてより効果的な証しがなされ、霊的成長が進むにつれて、サタンからの反対もまた増していくことが起こります。ペテロ、パウロ、ヨハネという三人の最も有力な使徒たちは、この原則の典型例です。彼らの働きが成長し、より大きな実を結ぶにつれて、それに伴って悪しき者からの反対もまた生涯を通じて増し加わりました。その結果、三人とも主への奉仕の中で、ますます激しい迫害に耐えなければならず、最終的には殉教によってその生涯を終えることになりました。したがって、艱難期の世代が直面する試練は非常に厳しく、ある意味では特有のものではあっても、まったく前例のないものというわけではありません。聖書には、信仰の共同体が苦難の中で試練に耐え抜いたいくつかの型、すなわちひな形(パラダイム)が示されていますが、それらは神のご計画によって、来たる艱難期を指し示すものとして与えられているのです。それゆえ、これらを注意深く学ぶことは、きわめて有益であり、十分に価値あることであると言えます。

1. ノアと大洪水の類比:

(26)「ノアの日々に起こったことと同じように、人の子の日々にもそのようなことが起こるのである。(27)人々は、ノアが箱舟に入るその日まで、食べ、飲み、めとり、とつぎなどしていた。そして洪水が来て、彼らすべてを滅ぼした。」(ルカ 17 章 26-27 節/NIV 訳; マタイ 24 章 37-42 節参照)

これらの節が示しているように、大洪水と大艱難期との類似は、聖書によって——しかも主ご自身によって——明確に示されています。創世記 6 章から 8 章において、ノアは来ようとしている洪水について警告を受け、家族とともに救われるために取るべき非常に具体的な行動を指示されました。驚くべきことに(人間の性質について多少なりとも知っている私たちにとっては、なおさらのことですが)、ノアは主の指示に正確に従ったのです。

信仰によって、ノアはまだ見えていない事柄について神から告げられたとき、敬虔な恐れをもっ

て、自分の家族の救いのために箱舟を造ったのである。そしてその同じ信仰によって(すなわち神に
応答することによって)、彼は世を罪に定め、信仰によって与えられる義の相続人となったのである。
([ヘブル 11 章 7 節](#))

艱難期においても同様であるように、その時代の世界をさばこうとされた主のご意図は、その世界の極度の
墮落から生じたものでした([創世記 6 章 11-13 節](#)と[黙示録 9 章 20-21 節](#)を比較参照)。ノアは同時代の
他の人々とは異なり、墮落した(文字どおり身体的にも退廃した)同時代人たちから、自分自身と家族とを距
離を置いて保ちました。(第二ペテロ 2 章 5-9 節参照)¹²。同様に、現在の私たちにとっても、艱難期に先立
つこの時期、そしてそれが始まった後にはなおさら、靈的墮落の影響から離れていることが重要な課題の一
つとなります。特に、その墮落が反キリストの世界宗教の中で制度化されるときには、なおさらそうです。ノア
の日々と同様に、艱難期が始まる前のこの数年間は準備の期間と考えることができます。あらゆる推定によ
れば、ノアがあのような巨大な箱舟を建造するために与えられていた期間は百年未満であり、場合によってはそれ
よりもはるかに短かった可能性があります([創世記 5 章 32 節](#), [6 章 3 節](#), [6 章 18 節](#), [7 章 6 節](#)参照)。私た
ちの寿命は明らかにノアの時代の人々よりもはるかに短く、私たち自身の「大洪水」に備えるために残されて
いる時間は、本書執筆の時点で二十年にも満たないのです¹³。さらに、人類史上最も困難な七年間に耐え
るために自分自身を靈的に備えるという課題の大きさを、決して過小評価してはなりません。ノアの箱舟は物
理的なものであり、靈的な助けなしに造られたわけではありませんでしたが、私たちの「箱舟」は靈的なもの
であり、それを来たるべき大災厄に耐えうるものとするためには(すなわち靈的成長・適用・奉仕の過程に積
極的に取り組むことによって)、私たち自身の側でも相当の努力を払う必要があります。

(19)また御霊によって、[キリストは]牢にいる[御使いの]霊たちのところへ行き、[ご自身の勝利
を]宣べ伝えられた。(20)彼らはノアの時代に従わなかった御使いたちであり、箱舟が建造されてい
る間、神が忍耐して待っておられた(すなわち裁きを遅らせておられた)ときのことである。この箱舟の
中に入った者たちは、いわばそれに「バプテスマされる」ようにして、水を通して救われたのであり、
その人数はわずか八人であった。(第一ペテロ 3 章 19-20 節)

洪水が到来したとき、物理的な箱舟はノアとその家族を守りました。同様に、艱難期を生き延びるために
は、信者は靈的に安全な場所に入ることが必要となります。その場所は、荒れ狂う艱難期の水の中を私たち
が安全に通る抜けることができるほど、確かで堅固なものでなければなりません。これはただ、イエス・キリスト
のうちに堅くとどまり続けることを意味します——ちょうど、ノアとその家族を洪水の中から救い通した物理的
な箱舟が、キリストの予型であったのと同じようにです。¹⁴

¹² [「サタン」シリーズ第 5 部 III.1.「人類本来の性質の純粋性に対する洪水期前のサタンの攻撃\(ネビルム族\)」](#)を参照のこと。

¹³ [「サタン」シリーズ第 5 部 II.9.「人類歴史の七日間の具体的年代」](#)を参照のこと。

¹⁴ ここで引用されている箇所(すなわち、[第一ペテロ 3 章 19-20 節](#)と[第一ペテロ 3 章 21 節](#))を比較すると分かるように、また、これまで多くの聖書注解者たちが指摘してきたとおりです。特に、M.F.ウンガーの『旧約聖書注解』およびアーサー・ピンクの『創世記研究』(いずれも該当箇所)を参照してください。

(21)そして、この[真の]バプテスマ[すなわち御霊のバプテスマ]こそが、あなたがたを救うのである(直訳では、箱舟が「水を通しての救い」をもたらしたことへの「対型」または類比である。すなわち、彼らが箱舟の中へ「バプテスマされる」ことによって救われたのと同様に、私たちは御霊によってキリストのうちにバプテスマされることによって救われるのである)。それは肉の汚れを洗い流すような外面的なものではなく、イエス・キリストの復活によって、きよい良心を神に求めることである(すなわち、悔い改めと信仰によって御霊のバプテスマ、キリストとの結合、そしてその結果としての救いが与えられるのである)。
([第一ペテロ 3 章 21 節](#))

大洪水以前の時代の信者たちの残された者たちが、「箱舟の中にいる」ことによって洪水の試練を無事に通り抜けたのと同様に、艱難期の信者たちも霊的に生き残るためには「キリストのうちに」とどまり続けなければなりません。ノアとその家族がそうであったように、私たちもまた、唯一の「門」を通して入り、信仰による救いの時点において御霊によってキリストのうちにバプテスマされるのです。艱難期には、多くの者が大背教の中でキリストから離れてしまいます。無事に通り抜けるためには、キリストのうちにとどまり続けなければなりません。大迫害の中で命を奪われるすべての信者にとっての殉教も例外ではありません。殉教は、私たちの主イエス・キリストをあがめる特別な方法であるだけでなく(それは私たちが選ぶのではなく、主が選ばれる方法です)、同時に大いなる救いでもあります。なぜなら、それによってそのような信者たちは、その大きな試練を信仰(そして報い)を保ったまま確実に通り抜けたことが保証されるからです¹⁵。しかし、信者たちが殉教によって、あるいはキリストが再臨されるときに生ける復活によって苦難から救い出される一方で、ノアの時代の不信者たちが洪水の裁きによって押し流されたように、同様に、その将来の日の不信者たちもまた、神の七つの再臨の裁きを受けることとなります——もし彼らがすでに七つの警告の裁き(すなわちラッパの裁き)や、七つの懲罰的な裁き(すなわち鉢の裁き)によって滅ぼされていなければのことですが。¹⁶

(5)[あなたがたが今耐えているこれらの苦難は]、あなたがたが神の御国にふさわしい者とみなされるといふ、神の義なるさばきの証拠である。その御国のために、あなたがたは苦しんでいるのである。(6)神にとって、あなたがたに苦難を与えている者たちに苦難をもって報い、(7)苦しめられているあなたがたには、私たちとともに安らぎを与えることは正しいことであり、それは主イエスが力ある御使いたちを伴って天から現れるときに実現する。(8)そのとき主は、神を知らない者たち、また私たちの主イエスの福音に従わない者たちに対して、燃え盛る炎の中で報復を行われるのである。
([第二テサロニケ 1 章 5-8 節](#))

ノアと艱難期の信者とのこの比較について黙想する読者は、さらに多くの類似点を容易に思い浮かべることができるでしょう。たとえば、[創世記 6 章 18 節](#)におけるノアへの約束と、私たちがキリストのうちにいることを

¹⁵この意味において、ルカ 21 章 18 節にある「あなたがたの髪の毛一筋も失われることはない」という主の言葉を理解すべきです。これは多くの場合、文字どおりにも真実となるでしょうが、殉教そのものもまた、それに対応する肉体的救いに匹敵する、完全な霊的救いを意味するのです。同様に、テモテ第二 4 章 18 節においてパウロが示した救いへの確信も比較してみてください。

「主は私をあらゆる悪の攻撃から救い出し、私を安全に天の御国へ導いてくださる。」(NIV 訳)
この救いもまた、おそらく殉教というかたちを通して成就したと考えられます(黙示録 2 章 10 節後半参照)。

¹⁶ [「来たる艱難期」第 6 部.I.「再臨時のさばき」](#)を参照のこと。

可能にする福音との類似、洪水によって滅ぼされたネピリムと、再臨のときに滅ぼされるネピリムである反キリストおよびその十人の王との類似、文字どおりの洪水と、ハルマゲドンにおける反キリストの軍勢の「洪水」との類似(ダニエル 9 章 26 節, 11 章 22 節 [ヘブル語] 参照)、ノアのもとへ動物たちが「やって来た」という超自然的備え(創世記 7 章 9 節)や、神ご自身が信者たちを箱舟の中に閉じ込められたことと、十四万四千人の証印など、艱難期の中に信者たちを守るために預言されている数々の救いと類似、箱舟の中の平安と安全と、艱難期の中点でイスラエルから逃れるすべての者のために備えられる荒野の避難所との類似、安全な時が来るまで箱舟から出てはならないという神からの具体的命令(創世記 8 章 16 節)と、キリストの再臨についての早まった偽りの報告を信じてはならないというイエスの命令(マタイ 24 章 26 節; 主の再臨は稲妻のように明白なものである: マタイ 24 章 27 節 参照)との類似、洪水からの救いのしるしであるオリーブの枝と、枝である私たちの主イエスの再臨との類似、そして洪水の後に神が空に置かれた虹と、千年王国において明白な神の栄光のうちに直接統治されるメシヤの虹の栄光との類似などです。しかしながら、この大洪水と来たる艱難期との類似を考える際に、最も心に留めておくべきことは、ノアの神に対する信仰と、ノアに対する神の真実さです。すべての目に見える証拠がそれに反しているように見えたにもかかわらず、神が彼に命じられたとおりに行動し、来たる災いに備えたことこそが安全な道であり、またノアが危機の時に至るまで、そしてその危機の最中においても信仰に基づいて行動し続けたことこそが、主が彼を救い出される手段となったのでした。同様に、今日の私たち信者もまた、日々霊的に成長し備え続ける必要があります、どのようなことが起ころうとも、その苦難の日々が到来するとき、私たちの心の奥底において主イエスに忠実であり続ける決意を固く持たなければなりません。

(5) [神は]大洪水以前の世界を容赦されなかったが、義を宣べ伝える者であったノアと、彼とともにいた七人を守り、不敬虔な世の住民の上に洪水をもたらされたのである……(9) 主は、敬虔な者を試練から救い出すこと、また不義な者たちをさばきの日のために刑罰の下に保っておくことを知っておられるのである。(第二ペテロ 2 章 5 節, 9 節)

2. 出エジプトの類比:

出エジプトの出来事は、来たる艱難期に対する最も近く、しかも最も詳細に記録された聖書的類比です。ノアの場合と同様に、聖書そのものが出エジプトをこのような類比として見るよう私たちに促しており、この比較が「時代の終わりに生きている私たち」に直接当てはまるものであると述べています(第一コリント 10 章 11 節)。すでに見てきたように、出エジプトのパロは反キリストを表す代表的な型であり、また多くの点において、イスラエルの子らがエジプトとパロから逃れようとした経験、そして彼らを滅ぼそうとしたパロの試みは、将来艱難期を通過する信者たちの経験と密接な類似を成しています。すなわち、パロの役割を反キリストが担い、エジプトを出て「約束の地」へ向かう旅は、その将来の日の信者たちがあの最も困難な七年間において経験するあらゆる試練や苦難を通り抜けていく過程に対応しているのです¹⁷。さらに、パロの徹底した傲慢さと執拗な敵意は、獣(反キリスト)の場合を除いては他に例がないほどであり(出エジプト記 9 章 16 節とダニエル書 8 章 23 節; 11 章 21 節を比較参照)、また黙示録において「獣」という語が反キリストとその帝国の両方を指すのと同様に(黙示録 13 章 1-8 節とダニエル書 7 章 1-11 節, 7 章 19-25 節; 黙示録 17 章 3 節参

¹⁷ 「来たる艱難期」第 3 部 B.I.3.b.「パロ」、および「来たる艱難期」第 5 部 II.4.「出エジプトとの類似」を参照のこと。

照)、パロの場合にも、聖書はその邪悪な王とその邪悪な帝国とを切り離せない形で結びつけて描いています(ヨブ記 9 章 13 節, [26 章 12-13 節](#); [詩篇 87 篇 4 節](#), [89 篇 9-10 節](#); [イザヤ書 30 章 7 節](#), [51 章 9-10 節](#))。

(13)あなたは御力によって海を裂き、水の中の怪物の頭を打ち砕かれた。(14)あなたはレビヤタンの頭を砕き、それを荒野の生き物たちの食物として与えられたのである。(詩篇 74 篇 13-14 節 /NIV 訳)

パロと獣の双方は神の民を滅ぼそうとし([出エジプト 14 章](#); [黙示録 12 章 17 節](#))、そのために彼らに厳しい経済的制裁を加えます([出エジプト 5 章 7-13 節](#); [黙示録 13 章 16-17 節](#))。これらの措置は、彼らの神への忠誠を揺るがすことを目的としたものです([出エジプト 5 章 17 節](#); [黙示録 13 章 15 節](#))。そして両方の場合において、主がご自分の選ばれた民への圧迫に応じて、前例のない神の災いが下されます(出エジプト 7-11 章; 黙示録 8-9 章および 16 章)。出エジプトの進展と艱難期の進行との間には、さらに次のような密接な類似点が見られます。

- 両方の場合において、圧力と迫害の中で大規模な背教が起こること(民数記 13-20 章; [第二テサロニケ 2 章 3 節](#))、それは偽りの宗教から生じること([エゼキエル書 20 章 7-8 節](#); [黙示録 13 章 15 節](#); [第一コリント 10 章 14 節](#)参照)。
- そのような圧力の中で信仰を保ち続けるために必要な努力([出エジプト記 5 章 22-23 節](#), [6 章 9 節](#), [6 章 12 節](#); [ルカ 21 章 26 節](#))、そして信仰の光が消えないよう守ること([イザヤ書 42 章 3 節](#)および[マタイ 12 章 20 節](#)の「くすぶる灯心」に見られるように、また文脈上特に出エジプトに関連する[創世記 15 章 17 節](#)の火の器にも並行する:[創世記 15 章 13-14 節](#); さらに十人の乙女のともしび: [マタイ 25 章 1-12 節](#)参照)。
- モーセ自身によって語られた神のことばに対して、パロと反キリストが神の民への敵対を次第に強めていくことにより、試練がますます激しくなること(出エジプト記 7-11 章; [マタイ 17 章 3-4 節](#); [黙示録 11 章 3-11 節](#))。
- 出エジプトの災いと艱難期の災いが、ともに悪魔とその支配者に対する神の応答であり、同時に神の民の救いの手段ともなること(出エジプト記 7-11 章; 黙示録 8-9 章および 16 章)。
- エジプトからの急速な脱出と、艱難期の最後の数か月におけるバビロンからの急速な脱出との多くの類似点(「来たる艱難期第 5 部」参照; 前注参照)、そしてそれぞれの救いの過程のあらゆる段階において神の備えが決定的な役割を果たすこと([出エジプト記 23 章 20 節](#); [黙示録 18 章 4 節](#))。
- イスラエルの子らを覆い守った雲が、十四万四千人への証印(およびこの期間中に信者たちに与えられる特別な保護)に対応すること([出エジプト 14 章 19-20 節](#); [第一コリント 10 章 2 節](#); [黙示録 7 章 3-8](#)

節)。

- ・ パロと獣がそれぞれ神の民を完全に滅ぼそうと計画した時と場所が、かえって彼ら自身の滅びの時と場所となること(すなわち紅海とハルマゲドン:[出エジプト記 14 章](#); [黙示録 19 章](#))。
- ・ 紅海における超自然的な暗闇と、再臨直前の超自然的な暗闇が、いずれの場合も、完全な救いの直前に神の民に休息を与える神の手段となること([出エジプト記 14 章 20 節](#); [ゼカリヤ書 1 章 6-7 節](#))。
- ・ イスラエル人が奇跡的に渡った文字どおりの海(出エジプト記 14 章; [詩篇 78 篇 53 節](#), [106 篇 9-11 節](#)参照)が、艱難期という「苦難の海」に対応すること([ゼカリヤ書 10 章 11 節](#); [黙示録 21 章 1 節](#)参照; また海は反キリストの出現の起源でもある:[黙示録 13 章 1 節](#))。
- ・ パロが紅海で溺れさせられて主によって滅ぼされたのに対し([出エジプト記 14 章 18 節](#), [14 章 28 節](#); [詩篇 136 篇 15 節](#))、反キリストは主の再臨のときに火の池へ直接投げ込まれること([黙示録 19 章 20 節](#))。
- ・ 海の向こう側の荒野が、艱難期の後に地に回復されたイスラエルが清められる場所に対応すること(民数記 13 章;[エゼキエル書 20 章 35 節](#))¹⁸。
- ・ 約束の地への入国が、贖われた者たちがキリストの千年王国へ入ることに対応すること。
- ・ 出エジプトにおいて主が得られた特別な栄光が、ハルマゲドンにおいて主が得られるさらに大いなる栄光に対応すること([ダニエル書 9 章 15 節](#); [黙示録 19 章 1 節](#))。

出エジプトと終わりの時とを最も直接的に結びつけている箇所の一つは、イスラエルのあの世代が経験した類似の苦難の時を主が救い出されたのと同じように、来たる困難な時を通して神が私たちが救い出してくださいを保証しています。

(11) これらすべてのことが彼らに起こったのは、**私たちへの戒めの例としてであり**、それは時代の終わりに生きている**私たちが戒めるために書き記された**のである。(12) だから、自分は堅く立っていると思う者は、倒れないように気をつけなければならない。(13) あなたがたの会った試練は、人に共通するものを超えるものではない。神は真実な方であり、あなたがたが耐えられないほどの試練にあわせることはなさない。むしろ試練とともに、それに耐えられるよう脱出の道も備えてくださるのである(すなわち、たとえ艱難期に直面しなければならない場合であっても同様である)。([第一コリント 10 章 11-13 節](#))

¹⁸ [「来たる艱難期」第 6 部.1.6.「イスラエルの再集結と清め」](#)を参照下さい。

そして、もし私たちが殉教することになるとしても、それもまた大艱難期という海を通しての救いであると言えます。この真理は、次の黙示録の箇所に見ることができます。この箇所は、神の艱難期の殉教者たちを弁護し正当とされるために注がれる最後の神の怒りの災いと、かつてイスラエルの子らを救い出された出来事とを直接結びつけています。両方の場合において、「モーセの歌」は私たちの主の勝利を祝うものです(出エジプト記 15 章; [第二テモテ 4 章 17-18 節](#); [黙示録 2 章 10 節](#)後半参照)。

(2) 私はまた、ガラスの海のようなものを見た。それは今回は火が混ざったものであり、獣とその像とその名の数とに打ち勝ちつつある者たちが、そのガラスの海の上に立ち、主なる神の豎琴を手にしていた。(3) そして彼らは、神のしもべモーセの歌、すなわち小羊の歌を歌っていたのである。([黙示録 15 章 2-3 節](#)前半)

3. キリストの生涯の類比:

すべてのクリスチャンは、私たちの主イエスの足跡に従うよう召されています([ルカ 9 章 59 節](#), [14 章 27 節](#); [ヨハネ 12 章 26 節](#); [第一コリント 11 章 1 節](#); [第一ペテロ 2 章 21 節](#)参照)。また、主の苦しみにあずかるようにも召されています([第一ペテロ 4 章 12-13 節](#); [マルコ 10 章 38-39 節](#); [使徒行伝 5 章 41 節](#); [ローマ 8 章 17 節](#); [第二コリント 1 章 5 節](#); [ピリピ 1 章 29-30 節](#), [3 章 10 節](#); [コロサイ 1 章 24 節](#)参照)。私たちのために主が生きられた生涯ほど、艱難、反対、苦しみに満ちた生涯は他にありません。そして主は最後に、私たちすべての罪のために十字架とさばきとに直面されたのです¹⁹。したがって、イエスの生涯は、主が公の働きに入られる前に通られた長い準備の期間という点においても、また十字架に向かわれる前に神の御国を宣べ伝え、神の真理を証しされた三年半の期間という点においても、ふさわしい類比を提供しています。この三年半という期間は、もちろん大艱難期の期間と一致しており、多くの者にとっては殉教をもって終わることになります。

(18)「まことに、まことにあなたに言う。あなたが若かった時には、自分で帯を締めて、自分の行きたい所へ行っていった。しかし年を取ると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、自分の望まない所へ連れて行くようになる。」(19)イエスはこれを言われたのは、ペテロがどのような死によって神の栄光を現すことになるかを示すためであった。それから彼に言われた、「わたしに従いなさい。」([ヨハネ 21 章 18-19 節](#)/NIV 訳)

迫害に耐え、あざけりや無関心や抵抗、さらには殉教の可能性の中にあっても歩み続けられた主の姿は、すべての信者が心に深く刻むべき模範です。イエスは、その生涯と試練、そして十字架における霊的死というさばきが、たとえ大艱難期の最も激しい時において私たちが直面するどんな最悪の痛みよりもはるかに重いものであったとしても、その向こう側にある救いと報いを見据えておられました。それゆえ、主の模範こそ、私たちが常に第一に心に留めておくべきものなのです。

(1) こういうわけで、私たちもまた[11 章の信者たちと同じように]、このように多くの証人たちに

¹⁹ 詳細については、[「聖書の基礎:第 4 部 A」. I.5.「イエス・キリストの生涯」](#)を参照下さい。

取り囲まれているのであるから、あらゆる重荷——特に、私たちにまわりつきやすい罪——を捨てて、自分たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走ろうではないか。(2)そして、私たちの信仰の創始者であり完成者であるイエスに目を向け続けよう(「アルファでありオメガである方」と比較参照)。主は、ご自分の前に置かれていた喜びのゆえに、十字架の恥を忍び、それをものともせず、神の御座の右に着座されたのである。(3)あなたがたが心に疲れて力を失ってしまわないために、罪人たちからご自身に対して加えられたあの激しい反対を耐え忍ばれた主のことを、よく思い巡らし続けなさい。(ヘブル 12 章 1-3 節)

4. 艱難期を通過することに関するその他の類比:

悪魔は、主に真実に従おうとする信者たちを迫害することを自らの務めとしているため、聖書の中で偉大な信者と呼ばれる人物のうち、その生涯が何らかの形で個人的な艱難の型——すなわち艱難期を予表する個人的試練——をたどり、その後劇的な神の救いを経験した例に当てはまらない人物を見つけることは難しいでしょう(イスラエルの最初の四世代を例に取るだけでも、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフはいずれもそのような例です)。ここで特に注目に値するいくつかの明確な類比を挙げておきます(ただし、これは決して網羅的な一覧ではありません)。

- ・ ロトがソドムから逃れたことの類比: ルカの福音書において、主ご自身はロトがソドムから救い出された出来事を、ご自身の再臨の際、ハルマゲドンの滅びの直前に起こる復活と直接結びつけておられます([ルカ 17 章 28-37 節](#))。ロトはその地に滞在していた相当な期間の間に激しい試練を受けましたが([第二ペテロ 2 章 5-9 節](#))、それでも「義なるロト」は信仰を失うことなく、最終的にはソドムに臨んだ滅びから奇跡的に救い出されました。
- ・ 荒野におけるダビデの類比: サウルから逃れて隠れていたダビデの艱難は、およそ七年ほど続いたと考えられます([サムエル記下 5 章 4 節](#)によれば、彼は三十歳で王となり、それ以前に成人として数年間サウルの軍の指揮官として仕えていた後、逃亡を余儀なくされたと考えられるためです)。この経験は、艱難期に私たちが直面するかもしれない苦難を示すと同時に、それに耐えるために必要な霊的資源をも示しています。獣を礼拝することを拒む私たちも、同様に身を隠さなければならなくなる可能性があります。そのようなとき、ダビデが示したように主に慰めを求め、主の救いに同じ確信を置くことが重要です。このことは特に詩篇の中で明らかにされています。
- ・ エリヤが身を隠していた時の類比: エリヤの試練が正確に三年半続いたことは知られており、これは大艱難期の期間と同じ長さです([ルカ 4 章 25 節](#); [ヤコブ 5 章 16-18 節](#))。また、その時代にも主に忠実であったのはごく少数の残りの者だけであったことがわかっています([列王記上 19 章 18 節](#)の七千人)。この試練の期間を通して、エリヤ自身が特別な備えをしていたわけではありませんでした。神は奇跡的に彼を養われ、からすを送って食物を与えられました([列王記上 17 章 4-6 節](#))。さらに、霊的に大きな勝利の直後にイゼベルの脅しに対してエリヤが示した残念な反応からも、来たるべき試練の中で自分の命を完全に主の御手に委ね、もし神のみこころであるならば勇気をもって殉教を受け入れる備えを持つ必要があることを学ぶことができます。

- ・ ユダに対するアッシリア侵攻の類比: このシリーズの第3部Bで見てきたように、アッシリアの王は反キリストの預言的な型です。同様に、紀元前701年頃のユダに対するアッシリアの侵攻は、獣によるハルマゲドンの戦役と明確に類似しており、「主の日の型」はその出来事の聖書的描写においてしばしば用いられています(特にイザヤ書において:たとえば[イザヤ書 13章 6-13節](#))²⁰。艱難期の終わりに近い時期、バビロンからイスラエルへ逃れ、主の再臨を待ち望んでいる私たちにとって、その時にアッシリア軍が完全かつ奇跡的に滅ぼされた出来事は、反キリストの一見抗しがたい軍勢がエルサレムを滅ぼそうとして集結してくるとき、特に心に留めておくべき重要な事例となるでしょう。
- ・ ダニエルと三人の友の類比: 異教的で完全に敵対的な国の中に置かれたこの四人の偉大な信者たちを神が繰り返し奇跡的に救い出された物語は、来たる困難な時代を生きる信者たちにとって、まさに「行動指針」となるものです。ダニエルとその友人たちの場合と同様に、私たちにとっても、悪との妥協か殉教かという選択を迫られる場面が数多く訪れることでしょう。私たちは今のうちに、後者を恐れず、いかなる場合にも前者を受け入れないという心構えを養わなければなりません。そして常に、主は不可能と思われる状況においてさえ私たちを救い出すことができるお方であることを覚えていなければなりません——たとえ燃える炉の中や獅子の穴の中に投げ込まれるようなことがあったとしてもです([ダニエル 3章 28節](#), [6章 23節](#))。

IV. 艱難期への備え

(1) こういうわけで、私たちもまた[11章の信者たちと同じように]、このように多くの証人たちに取り囲まれているのであるから、あらゆる重荷——特に、私たちにまわりつきやすい罪——を捨てて、自分たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走ろうではないか。(2) そして、私たちの信仰の創始者であり完成者であるイエスに目を向け続けよう(「アルファでありオメガである方」と比較参照)。主は、ご自分の前に置かれていた喜びのゆえに、十字架の恥を忍び、それをものともせず、神の御座の右に着座されたのである。(3) あなたがたが心に疲れて力を失ってしまわないために、罪人たちからご自身に対して加えられたあの激しい反対を耐え忍ばれた主のことを、よく思い巡らし続けなさい。([ヘブル 12章 1-3節](#))

結局のところ、来たる艱難期に備えるための最善の方法、そして実際のところ唯一の方法は、私たちがこれまでずっと行っているべきであったことを、これからも継続して行うことにほかなりません。すなわち、神の御言葉の真理を受け入れて信じることによって霊的に成長し、その真理を私たちの日々の歩みに適用し、とりわけ信仰を精錬するために与えられる試練を正しく乗り越えていくこと、さらに、私たちに与えられている賜物と奉仕を賢明かつ神にかなった形で用いることによって、他の信者たちの成長と前進を助けることです。こ

²⁰ [「来たる艱難期」第1部.IV.1.b.「主の日のパラダイム」](#)を参照のこと。

れらはすべて、キリストのからだを建て上げるために備えられているものです。すでに何度も見てきたように、この実りあるクリスチャン生活の三つの側面は順番に起こるものではなく、互いに重なり合いながら進んでいくものです。そして特に試練に関して言えば、主は私たちが主にますます近づいていくにつれて、ますます大きな反対に直面することを許されるのです。

(3) 私たちの主イエス・キリストの神また父がほめたたえられるように。神はその大いなる憐れみによって、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことにより、生ける望みへと私たちを新たに生まれさせてくださったのである。(4) そして、決して滅びることも、汚されることも、色あせることもない相続へと導いてくださったのであり、それは私たちのために天に蓄えられて守られている。(5) また私たち自身も、終わりの時に現される備えられた最終的な救いに至るまで、神の力によって、神への信仰を通して守られているのである。(6) この最終的な救いを待ち望むゆえに、あなたがたの喜びはあふれているのであるが、**今しばらくの間は、さまざまな試練によって苦しむことがあなたがたに定められているかもしれない。**(7) それは、あなたがたの信仰が本物であることが明らかにされるためである。この信仰の真実さの証明は金よりもはるかに尊い。金もまた火によって試されるが、やがては滅びてしまう。しかし、人生という炉の中で本物であると証明されたあなたがたの信仰は、イエス・キリストの栄光ある再臨の時に、賛美と栄光と誉れをもたらすのである。(8) あなたがたは主を見たことはないが、それでも主を愛している。また今も主を見ることはできないが、それでも主を信じている。そのゆえに、あなたがたは言い表すことのできない栄えに満ちた喜びをもって喜んでおり、それは来たるべき栄光の未来を示すものである。(9) その時あなたがたは、この信仰の目的そのものである究極の賞——すなわちあなたがたのいのちの[永遠の]救い——を、勝利のうちに受け取ることになるのである。[\(第一ペテロ 1 章 3-9 節\)](#)

すでに何度も述べてきたように、すべてのクリスチャンは「キリストの苦しみにあずかる」よう召されています([ローマ 8 章 17 節](#); [第二コリント 1 章 5 節](#); [ピリピ 1 章 29-30 節](#); [3 章 10 節](#); [コロサイ 1 章 24 節](#); [第一ペテロ 4 章 12-13 節](#); 参照:[マルコ 10 章 38-39 節](#); [使徒行伝 5 章 41 節](#); [第二コリント 4 章 10-11 節](#); [ガラテヤ 6 章 17 節](#); [第一テサロニケ 1 章 6 節](#); [第二テサロニケ 1 章 4-5 節](#); [第二テモテ 3 章 12 節](#))。そして上の箇所が明らかにしているように、このような試練や個人的な艱難を耐え忍ぶことは、実際のところクリスチャンの成長過程において不可欠な一部分なのです。もし今日、イエスとその教会のために真に影響力を持って働いている本物のクリスチャンの経験が、歴史的に見てやや少なく見えるとすれば、それは主が、対処する備えの整っていない未成熟な信者たちに、不当な苦しみ(神の懲らしめとは異なるもの)の重荷を負わせることはなさらないからです([第一コリント 10 章 11 節](#); 参照:[マタイ 11 章 29-30 節](#))。霊的未熟さが一般的となっているこのラオデキヤ的な生ぬるい時代においては、個人的な艱難を耐え忍び、信仰によって勝利を得ることによって神に栄光を帰しつつ、実際にキリストの苦しみにあずかる信者の例は、残念ながらごく少数にとどまっています。未熟な者たちが自分の耐えられないものから守られているだけでなく、悪魔が最も激しい攻撃を向けるのは、実際に霊的前進を遂げ、神のご計画の進展に真に貢献している者たちであるということも確かです(その顕著な例として、ヨブやパウロの事例が挙げられます)。

(18) 「世があなたがたを憎むならば、それがまずわたしを憎んだことを知っておきなさい。(19) も

しあなたがたがこの世に属していたなら、この世は自分のものを愛したであろう。しかしあなたがたはこの世に属していない。わたしがあなたがたをこの世から選び出したのである。だからこの世はあなたがたを憎むのである。(20)わたしがあなたがたに教えたこの原則を覚えていなさい。しもべは主人にまさる者ではない。もし彼らがわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するのである。」(ヨハネ 15 章 18-20 節)

(8)身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、むさぼり食おうとして歩き回っているからである。(9)あなたがたが経験しているのと同じ種類の苦しみを、この世にいる信仰の仲間たちも受けていることを覚えて、信仰に堅く立って彼に立ち向かいなさい。(第一ペテロ 5 章 8-9 節)

ラオデキヤのこの時代がこれまでのところ芳しい実績を残してこなかったにもかかわらず、この生ぬるさの時代の最後の世代は、最も偉大な世代の一つとなる可能性を示す兆しもいくらか見られます。というのも、ラオデキヤの時代は、そのまま来たる艱難期へと直接移行することが定められているからです。したがって、今備えをしている者たちこそが、間近に迫ったその日において、聖徒たちが何が起ころうとも獣に抵抗できるよう備えさせ、励ますための土台となることは疑いありません。確かに教会の三分の一は背教へと堕ち、現在の備えの不足と怠慢な態度の結果を十分に刈り取ることになるでしょう。しかし残る信者たちは二つの同数の群れに分かれます。すなわち、キリストのために殉教によって命をささげる者たちと、艱難期全体を耐え抜き、生きたまま立ち上がって空中で主に会う者たちです(第一テサロニケ 4 章 17 節)。したがって、ラオデキヤの流れに逆らって歩んでいる今日の信者たちに委ねられている使命は、個人的な霊的成長・前進・実りという重要な課題をさらに超えたものです——これらが極めて重要であることに変わりはありませんが、それ以上の意味を持つのです。艱難期の直前に立っている現在の前進している信者たちの使命は、来たるべき事柄に耐えられるよう集中的に霊的備えを行うことであり、また、艱難期の到来を現実として悟ったときに、前もって十分に備えていなかった他の人々を、できるだけ短期間で整えさせる助けとなれるよう準備しておくことでもあるのです。

要旨として言えば、今日、私たちの兄弟姉妹の多くが安逸な生活を送っているように見える一方で、真に地の塩であると思われる者たちに不釣り合いなほど多くの苦難が降りかかっているように見えるとしても、それは驚くことではありません。神は、ご自身の教会に十分な動機を与える出来事が起こり、正しい応答がなされるようになったときに、その欠陥を正すための中核となる人々を備えておられるのです。

これまでも何度も述べてきたように、艱難期に備えて物質的な準備をすることは無益な試みです。というのも、これから先の苦難の時代においてどのような出来事が起こり、どのような危機に対処しなければならなくなるのか、その正確な経過や詳細を私たちは予測することができないからです。しかしこの問題は非常に重要であるため、ここでも改めて繰り返し、強調しておくのがふさわしいでしょう。その日が来たとき、地下室に蓄えた缶詰よりも、心に蓄えられた真理のほうがはるかに価値があります。蓄え込みやそれに類することは、私たちの時間や労力、資源を浪費することにもなりますが、それらはむしろ、私たちのクリスチャンとしての歩みを完成へと近づけ、個人的な霊的備えを最大限に高めるために用いられるべきものです。いわゆ

るサバイバル主義的な考え方に伴う最も重大な問題は、第一に、そのようなことに携わる人々が、主が私たちを殉教へと定めておられる可能性（信仰を守り背教を拒む者たちにとっては、五分五分の可能性がある）に対して、心構えを持たなくなる傾向を生むことです。そしてさらに重要なのは、第二に、それがまったく誤った心構えを助長することです。この種の準備は、その性質上、自己中心性や自己保存の思いへと傾きやすいからです。今、真にイエスに従っている私たちは、むしろ、自分の人生の目的の一部として、来たるべき事柄に霊的に耐えられるよう備えるだけでなく、嵐のように迫る困難の中で、より慎重さに欠けていた兄弟姉妹たちを助ける備えをもしておくべきです。これまで見てきたように、艱難期——ましてその後半である大艱難期——は、霊的成長を急いで始めるための最良の時ではありません。しかし実際には、おそらく大多数の信者がまさにそのような状況に置かれることになるでしょう。そして、このように備えのなかった信者たちの多くは、前もって十分な霊的備えをしていた者たちからの大きな助けなしには、艱難期を無事に通過することは難しいであろうと考えられます。²¹

これらの理由から、来たるべき困難な時代に備えて主が私たちに経験させられる「訓練期間（いわばブートキャンプ）」は、非常に厳しいものとなることが予想されます。十字架の時代の第一世代——同時に教会時代の基礎を築いた世代——は、これまでのところ「最も偉大な世代」のクリスチャンたちであり、その大半は人生の多くの期間を荒野のような状況の中で戦い抜かなければなりません。マリヤ、ヨセフ、ヨハネの両親、アンナ、シメオン、羊飼いたち、そしてもちろんバプテスマのヨハネ、使徒たち、さらに初代教会の他の英雄たちの経験は、その後の時代——そして教会の大部分の後続の時代——に見られるものとは著しい対照をなしています。

もしラオデキヤの時代が立ち上がり、あの先の偉大な世代に匹敵するようになるのであれば——そして実際、耐え抜く艱難期の信者たちによって預言されている特別な証しが実現するためには、そうならなければならないように思われますが——激しい清めが必要となるだけでなく、ラオデキヤがついに目覚めたときには、同じく非常に力強い成長への推進が必要となるでしょう。これを成し遂げるためには、前もってキリストのからだに仕えるための備えを十分に整えてきたすべての者たちの、即応できる助けが必要となります。親愛なるクリスチャンの皆さん、これを実際的な意味で言うなら、たとえ今は自分の賜物が十分に用いられていないように思えたり、十分に評価されていないように感じられたり、感謝されていないように見えたりしても、それでもなお、自分の良い歩みを忍耐強く続けるために、あらゆる努力を払うべきだということです。というのも、それらの賜物が極めて必要な形で用いられる日が、急速に近づいているからです。また、親愛なる皆さん、これを個人的な意味で言うなら、現在経験している困難、疎外、苦難、試練、そして艱難は、偶然に起こっているのでは決してなく、来たるべき最も困難な時においてイエス・キリストに仕えるために、あなたの刃をちょうどよい鋭さに鍛え上げるために、まさに必要とされているものでもあるということなのです。

キリスト・イエスの良い兵士として、私とともに苦しみを忍びなさい。（[第二テモテ 2 章 3 節](#)； 参照。[第一テモテ 1 章 18 節](#)、[6 章 12 節](#)前半； [申命記 8 章 15-16 節](#)）

²¹ [「来たる艱難期」第 3 部 A.II.3.b.「艱難期における聖書の教えの欠乏」](#)を参照のこと。

私は良い戦いを戦い抜き、走るべき道のりを終え、信仰を守り通した。(第二テモテ 4 章 7 節)

私たちは主イエスの兵士であり、やがて来る戦いの日において破れ口に立つことができるよう、主ご自身によって注意深く、また意図的に訓練されているのです。その時には、私たちはより弱い兄弟姉妹たちを励まし、彼らが信仰において力尽きてしまわないよう、模範を示すことが求められるでしょう。

思慮ある者たちは、夜明けの輝きのように輝き、多くの者を義へと導いた者たちは、とこしえまでも星のように輝く。(ダニエル 12 章 3 節)

多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人々にも教えることのできる忠実な人々にゆだねなさい。(第二テモテ 2 章 2 節)

この課題に応えるためには、これまでとは異なる特別な備えが必要となります。したがって、現在の苦難に絶望するのではなく、それらを主のご目的のために必要なものとして受け止め、来たる危機の中でできる限り主に役立つ者となることを望みつつ、それらを最大限に生かそうと決意しなければなりません。

「わたしを遣わされた方のわざを、昼の間に行わなければならない。だれも働くことのできない夜が来ようとしている。」(ヨハネ 9 章 4 節; 参照: イザヤ 55 章 6 節)

時を有効に用いなさい。時代が悪いからである。(エペソ 5 章 16 節)

ですから私たちは、与えられている時間と置かれている状況を最大限に生かすことを決意し、現在の苦難や試練を、単に霊的成長のために必要なものとみなすだけでなく、むしろ——この世の「普通」の考え方を完全に逆転させて——それらを歓迎すべきものとして受け止め、やがて大いなる艱難期が到来するときに、主とそのからだである教会、すなわち私たちの仲間の信者たちのために、できる限り有用な者となる備えの機会として用いるべきなのです。

(2) 兄弟たちよ、さまざまな試練に取り囲まれるときには、大いに喜ぶよう努めなさい。(3) あなたがたは知っているはずである。あなたがたの信仰が試されることによって、忍耐が生み出されるのである。(4) その忍耐を十分に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けるところのない成熟した者となり、十分な報いを受けるにふさわしい者とされるのである。(ヤコブ 1 章 2-4 節)

(3) それだけでなく、私たちは苦難の中にあっても誇りとする。なぜなら、苦難が忍耐を生み出し、(4) 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すことを知っているからである。(5) そしてこの希望は、私たちが失望させることがない。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからである。(ローマ 5 章 3-5 節)

私は、現在のこれらの苦難は、やがて私たちに現されることになっている栄光とは、比較すること

さえできないものと考えている。(ローマ 8 章 18 節)

(17) 私たちのこのしばらくの軽い苦しみは、比較にならないほど大きく、永遠に続く栄光を私たちのために生み出している。(18) だから私たちは、見えるものに心向けるのではなく、見えないものに心向ける。見えるものは一時的なものであり、見えないものは永遠のものである。(第二コリント 4 章 17-18 節)

したがって私たちは、これまで述べてきたすべてのことに加えて、主が来たるべき試練のために私たちを訓練しておられる中で、忍耐と粘り強さを今から実際に身につけ、それを磨き上げていくよう努めるべきです。そしてまた、(他にも多くの真理の原則がありますが) 次の十二の点を常に心に留めておく必要があります。

1. 燃えさかる試練は避けられないが、試みの炉こそ、私たちの愛する主イエスとの最も親密な交わりのある場であり(ダニエル 3 章 25 節)、また獅子の穴こそ、私たちが最も強く主に信頼するよう求められる場所である(ダニエル 6 章 22-23 節)。

(12) 愛する者たちよ、あなたがたを試すために臨んでいる激しい試練を、何か思いがけないことが起こったかのように不思議に思ってはならない。(13) むしろ、あなたがたがキリストの苦しみにあずかれば、あずかるほど、いっそう喜びなさい。そうすれば、キリストの栄光が現れるとき、あなたがたはこの上ない喜びに満たされて喜ぶことができるのである。(第一ペテロ 4 章 12-13 節)

神がこのように苦しむ者たちに与えてくださる慰めと励ましの深さを真に理解し、それを実際に知るためには、しばしば大きな苦しみに耐えることが必要となります(詩篇 23 篇 4 節, 94 篇 19 節, 119 篇 50 節; イザヤ 51 章 12 節; 61 章 1-2 節; 使徒行伝 9 章 31 節; 第二コリント 13 章 11 節; ピリピ 2 章 1-2 節; 第二テサロニケ 2 章 16-17 節)。

(3) 私たちの主イエス・キリストの神また父、すなわち憐れみの父、すべての励ましの神がほめたたえられるべきである。(4) 神は、私たちがあらゆる艱難の中にあるときに私たちを励ましてくださる。その結果、私たち自身が神から受けたその同じ励ましによって、あらゆる種類の艱難の中にある人々を励ますことができるようになるのである。(5) というのも、私たちがあなたがたに仕える中でキリストのための苦しみが増し加わったように、キリストを通して私たちが受ける励ましもまた、それと同じ程度に増し加わったからである。(6) したがって、もし私たちが艱難を経験しているのであれば、それはあなたがたの励ましと救いのためである。また、もし私たちが励ましを受けているのであれば、それはあなたがたが受けている励ましのためであり、その励ましは、私たちも経験したのと同じ苦しみを、あなたがたが忍耐をもって耐え抜くことを可能にしているのである。(7) このようにして、私たちがあなたがたについて抱いている望みは確かなものである。なぜなら、あなたがたが苦しみにあずかる者となったのと同じように、励ましにもあずかる者となることを、私たちは知っているからである。(第二コリント 1 章 3-7 節)

まさに戦いのただ中においてこそ、私たちはイエスを最もはっきりと見るようになるのです。

(7) 私は主をほめたたえる。主は私に助言を与えてくださる方である。まことに夜ごとに、私の心は主への賛美をもって私を教え導く。(8) 私はいつも主を私の前に置いてきた。主が私の右におられるゆえに、私は揺るがされることがない。(詩篇 16 篇 7-8 節)

(24) 信仰によって、モーセは成長したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、(25) 罪の一時的な楽しみを味わうよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選んだ。(26) それは、キリストのために受けるそしりを、エジプトのすべての宝よりも大いなる富であると考えたからである。彼は報いを見つめていたのである。(27) 信仰によって、彼は王の怒りを恐れずにエジプトを去った。彼は目に見えない方を見ているかのようにして(すなわち、目に見えない主イエス・キリストに心の目を据え続けることによって)、強くされたのである。(ヘブル 11 章 24-27 節)

(8) あなたがたは主を見たことはないが、それでも主を愛している。また今は主を見ることができないが、それでも主を信じている。そのゆえに、あなたがたは言い表すことのできない栄えに満ちた喜びをもって喜んでいるのであり、(9) そのときあなたがたは、この信仰の目的そのものである究極の賞——すなわちあなたがたのいのちの[永遠の]救い——を、勝利のうちに受け取ることになるのである。(第一ペテロ 1 章 8-9 節)

2. 私たちが見ているこの世は過ぎ去ろうとしており、私たちの前には、来たるべき世における確かな未来が備えられています。その未来は、あらゆる点において比べものにならないほどすばらしいものです。私たちには、神ご自身が設計者であり建設者である、より優れた都——新しいエルサレム——があります(ヘブル 11 章 10 節; 黙示録 21-22 章)。私たちには、より優れた市民権があります。それは天に属し、永遠にわたり、いまだ完全には知ること十分に理解することもできないほどの特別な特権を伴うものです(ピリピ 3 章 20 節)。私たちには、より優れた相続があります。それは決して色あせることも、失われることも、奪われることも、汚されることもありません(マタイ 6 章 19-20 節; 第一ペテロ 1 章 4 節; ヘブル 11 章 40 節)。私たちには、より優れたからだがあります。それは滅びることがなく、永遠のいのちに完全にふさわしいものです(第一コリント 15 章 35-50 節; ピリピ 3 章 21 節; 第一ヨハネ 3 章 2 節)。そして私たちには、何よりもはるかに優れた支配者、より優れた花婿、より優れた友、より優れた主であり主人である、私たちの愛する主であり救い主イエス・キリストがおられ、この方とともに、私たちはとこしえに甘美な交わりを楽しむことになるのです。これらこそ、私たちが思いを向けるべき事柄であり、この世の思い煩いに心を奪われてはならないのです(マタイ 6 章 25-34 節)。

(1) したがって、あなたがたがキリストとともに[立場的に]よみがえらされたのであるなら、上にあるものを求め続けなさい。そこにはキリストがおられ、神の右に座しておられるのである。(2) 地上のことではなく、上にあることを思い続けなさい。(コロサイ 3 章 1-2 節)

最後に、兄弟たちよ、すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純粋なこと、すべて愛すべきこと、すべて評判の良いこと、何か徳とされること、また称賛に値することがあるなら、そのようなことを思い巡らしなさい。(ピリピ 4 章 8 節)

3. この世の重圧が耐えがたいほどに感じられるとき、私たちには主にあつて自らを励まし、また互いに励まし合う力と責任があります。

ダビデは非常に苦しんだ。民が皆、自分の息子や娘のことで心を痛み、ダビデを石で打ち殺そうと言い出していたからである。しかしダビデは、その神、主によって自らを奮い立たせた。(サムエル上 30 章 6 節)

(3) 弱った手を強めよ。くずおれそうな膝をしっかりさせよ。(4) 心騒ぐ者たちに言え、「強くあれ。恐れてはならない。見よ、あなたがたの神が来られる。報復する者として、また報いを与える者として来られる。神は来て、あなたがたを救われる。」(イザヤ 35 章 3-4 節)

その日、人々は言うであろう。「見よ、これこそ私たちの神である。私たちはこの方を待ち望み、この方が私たちを救ってくださった。これこそ主である。私たちはこの方を待ち望んだ。私たちはその救いを喜び楽しもう。」(イザヤ 25 章 9 節)

(12) 兄弟たちよ、あなたがたのうちだれも、生ける神から離れてしまうような悪い不信の心(すなわち信仰の欠如)を抱くことがないように、よく注意しなさい。(13) むしろ、「今日」と呼ばれている間——すなわち、私たちがまだこの世にいる間——誰も罪の欺きによって心をかたくなにしてしまうことがないように、毎日互いに励まし合いなさい。(ヘブル 3 章 12-13 節)

主が私たちの岩であり、避け所である以上、どのようなことが起ころうとも、信仰者にふさわしい不屈の精神と勇気をもって立ち向かうことを、私たちは決意すべきです。

「強くあれ。雄々しくあれ。彼らを恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主があなたとともに行かれるからである。主は決してあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」(申命記 31 章 6 節; 参照: ヨシュア 1 章 6-7 節)

「永遠の神はあなたの避け所であり、その下にはとこしえの御腕があるのである。」(申命記 33 章 27 節前半)

「主は私の岩、私の砦、私の救い主である。(3) 私の神は私の岩、私はその中に身を避ける。主は私の盾、私の救いの角、私のやぐら、私の避け所、私の救い主である。暴虐な者からあなたは私を救われるのである。」(サムエル下 22 章 2-3 節)

(1 後半)主よ、あなたは代々にわたって私たちの住まいであられた。(2)山々が生まれる前から、あなたが地と世界を生み出される前から、永遠から永遠まで、あなたは神であられる。(詩篇 90 篇 1 後半-2 節)

目を覚ましていなさい。信仰に堅く立ちなさい。雄々しくあれ。強くありなさい。(第一コリント 16 章 13 節)

4. また私たちには、抗いがたいほどに思える圧力に直面しても、決意をもって妥協することなく堅く立ち続ける力と責任があります。なぜなら、私たちの救いと永遠の報いは、自制、自己鍛錬、そして忍耐として表される信仰の堅固さにかかっているからです([ローマ 5 章 3-4 節](#); [ガラテヤ 5 章 22-23 節](#); [コロサイ 2 章 5 節](#); [第二テサロニケ 1 章 4 節](#); [第一テモテ 4 章 8 節](#); [第二テモテ 1 章 7 節](#); [テトス 1 章 8-9 節](#); [ヤコブ 1 章 2-4 節](#), [5 章 10-11 節](#); [第二ペテロ 1 章 5-8 節](#); [黙示録 2 章 19 節](#); 参照 [使徒行伝 24 章 25 節](#))。

(24)競技場で走る者たちは皆走るが、賞を受けるのは一人だけであることを、あなたがたは知らないのか。あなたがたも賞を得ることができるよう走りなさい。(25)また競技に参加する者はすべてのことについて自制する。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、私たちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。(26)だから私はこの競走を走るにあたって、目標をはっきり見据えて走っている。また、この戦いにおいて、空を打つような拳闘はしない。(27)むしろ私は自分のからだを打ちたたいて従わせているのである。そうするのは、他の人々に福音を宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者となってしまうことがないようにするためである。(第一コリント 9 章 24-27 節)

(3) 私たちの主イエス・キリストの神であり父である方がほめたたえられるように。この方は、その大いなるあわれみによって、イエス・キリストの死者の中からの復活を通して、私たちを生きた望みへと新しく生まれさせ、(4) また、朽ちることも、汚されることも、衰えることもない相続財産へと導いてくださった。この相続財産は、あなたがたのために天に蓄えられている。(5) あなたがたは、終わりの時に現される用意のできている最終的な救いに至るため、神の力によって、信仰を通して守られているのである。(第一ペテロ 1 章 3-5 節)

(35)だから、あなたがたのこの確信を捨ててはならない。それは大きな報いをもたらすものである。(36) あなたがたには**忍耐**が必要である。神のみこころを成し遂げた後に、約束されたものを勝ち取るためである。(37)「もうしばらくすれば、来たるべき方は来られる。遅れることはない。(38) わたしの義人は信仰によって生きる。しかし、もし退くなら、わたしの心は彼を喜ばない」(ハバクク 2 章 3-4 節)。(39) しかし、私たちは滅びに至るような臆病な背信に属する者ではなく、いのち(永遠のいのち)に至る**信仰を持つ者**である。(ヘブル 10 章 35-39 節)

5. 私たちは常に——とりわけ艱難の時に——イエスこそ私たちの模範であり、私たちが仕え従うべきお方であることを覚えていなければなりません。主は私たちのために死ぬことをいとわず、そして実際にそのとおりにしてくださいました。主に倣って、私たちもまた、主が耐えるよう求められることが何であれ、それに耐

える備えをしていなければなりません。たとえ、殉教によって主をあがめる者として選ばれる場合であってもです。

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、まず自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしに従いなさい。」([マタイ 16 章 24 節](#))

(1) こういうわけで、私たちもまた、このように多くの証人たちに取り囲まれているのであるから、あらゆる重荷、とりわけ私たちにまとわりつきやすい罪を捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではないか。(2) そして、信仰の創始者であり完成者であるイエス(すなわち「アルファでありオメガ」である方)から目を離さないようにしよう。この方は、ご自分の前に置かれていた喜びのゆえに、十字架の恥を忍び、それをものともせず、神の御座の右に着座されたのである。(3) あなたがたが心に疲れて力を失ってしまわないように、罪人たちからご自身に向けられたあの激しい反抗を耐え忍ばれた方のことを、よく考えなさい。([ヘブル 12 章 1-3 節](#))

(19) 不当な苦しみを受けながらも、神を意識してそれを耐え忍ぶなら、それは神のみこころにかなうことである。(20) 罪を犯して罰を受け、それを耐え忍んでも、何の誉れがあるだろうか。しかし善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神に喜ばれることである。(21) あなたがたが召されたのは、この[キリストの苦しみにあずかる]ことのためである。キリストもあなたがたのために苦しみを受け、あなたがたがその足跡に従うよう、模範を残されたのである。(22) 主は罪を犯さず、その口に欺きも見いだされなかった。(23) 主はののしられても、ののしり返さず、苦しめられても脅すことをせず、正しくさばかれる方にすべてを委ねられたのである。([第一ペテロ 2 章 19-23 節](#))

6. 私たちが本来あるべきようにイエスに従っているなら、主に従う上で乗り越えられない障害は一つもありません。激しく荒れ狂う艱難の海に直面するとしても、主が私たちに必ず安全に導き通してくださることを、私たちは確信することができます。嵐、風、雨、波、轟音、暗闇、稲妻のただ中にあっても、もし私たちに「からし種ほどの信仰」があり、生きるにしても死ぬにしても主のために生きる覚悟があるならば、主がどのような道を選ばれるとしても、それが最終的に私たちの益となることを確信しつつ、イエスにあって平安と静けさと喜びと確信のうちに歩むことができます。

(1) …神はわれらの避け所、また力であり、苦難のときに常に助けとなってくださる方である。(2) それゆえ、たとえ地が揺らぎ、山々が海のただ中に崩れ落ち、(3) その水が轟き泡立ち、荒れ狂って山々が震えるとしても、私たちは恐れない。セラ([詩篇 46 篇 1 後半-3 節](#))

(10) 神よ、あなたは私たちを試し、銀を精錬するように私たちを練られた。(11) あなたは私たちを捕らえ、私たちの背に重荷を負わせられた。(12) あなたは人々に私たちの上を踏み越えさせられ、私たちは火と水との中を通らされたが、あなたは私たちを豊かな場所へと導き出された。([詩篇 66 篇 10-12 節](#))

主は海を分けて彼らを通らせ、水を壁のように立たせられた。(詩篇 78 篇 13 節)

(25) 夜の第四の見張りのころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところへ行かれた。(26) 弟子たちは、湖の上を歩いておられる主を見て恐れおののき、「幽霊だ」と言って恐怖のあまり叫んだ。(27) しかしイエスはすぐに彼らに語られた。「勇気を出しなさい。わたしである。恐れることはない。」(28) するとペテロが答えて言った。「主よ、もしあなたでしたら、水の上を歩いてあなたのところへ行くよう、私に命じてください。」(29) 主は言われた。「来なさい。」そこでペテロは舟から降り、水の上を歩いてイエスの方へ行った。(30) しかし風を見て恐ろしくなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。(31) するとすぐにイエスは手を伸ばして彼をつかみ、「信仰の小さい者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。(32) そして二人が舟に乗り込むと、風はやんだ。(マタイ 14 章 25-32 節)

(21) イエスは答えて言われた。「まことにあなたがたに言う。もし信仰があつて疑わないなら、あなたがたは、このいちじくの木に起こったことだけでなく、この山に向かって『立ち上がって海に投げ込まれよ』と言え、そのとおりになる。(22) 信じて祈るなら、求めるものは何でも受けることになる。」(マタイ 21 章 21-22 節)

神は真実な方である。神はあなたがたが耐えられないほどの試練に会わせることはなさない。むしろ試練とともに、それに耐え抜くことができるよう逃れる道をも備えてくださるのである(たとえ艱難期に直面することになったとしても)。(第一コリント 10 章 13 節後半)

7. 私たちが本来あるべきようにイエスに仕えているなら、担うことのできない重荷は一つもありません。なぜなら、私たちに力を与え、その重荷とともに担ってくださるのは主ご自身だからです。

しかし主を待ち望む者は新たに力を得、鷲のように翼を広げて上ることができる。彼らは走っても疲れることなく、歩いても弱ることがない。(イザヤ 40 章 31 節)

(28) 「すべて疲れた者、重荷を負っている者は、わたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう。(29) わたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。わたしは柔和でへりくだった心を持っているから、あなたがたの魂は安らぎを得るであろう。(30) わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ 11 章 28-30 節/NIV 訳)

(17) 私たちのこのしばらくの軽い苦しみは、比べることもできないほど重い永遠の栄光を、私たちのために生み出しているのである。(第二コリント 4 章 17 節)

8. 来たるべき暗い時代において、私たちが苦しみ、耐え、担い、そして乗り越えるよう求められるあらゆる事柄において、神の恵みが私たちを支え通してくださることを、私たちは確信することができます。

(21) 私はこのことを心に思い返す。それゆえ、私は望みを抱くのである。(22) 主の恵みによって、

私たちは滅び尽くされずにいる。主のあわれみが尽きることはないからである。(23) それは朝ごとに新しい。あなたの真実はまだことに大きい。(哀歌 3 章 21-23 節/KJV 訳)

(9)しかし主は私に言われた。「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さの中でこそ完全に現れる。」それゆえ私は、キリストの力が私の上に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇ろう。(10)だから私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦難、迫害、困難を喜びとしている。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからである。(第二コリント 12 章 9-10 節/NIV 訳)

(12) 私は乏しい中にあることも知っており、豊かな中にあることも知っている。私は、満ち足りることに、飢えることに、豊かであることに、乏しいことに、あらゆる場合に対処するすべを、すでに学んでいる。(13) 私を強くしてくださる方によって、私はすべてのことに耐える力を持っている。(ピリピ 4 章 12-13 節)

9. この戦いにおける私たちの導きと励ましは、常に神の御言葉の真理でなければなりません。そしてその真理を、聖霊によって照らされ、力を与えられながら、信仰をもって適用していかなければなりません(ゼカリヤ 7 章 12 節)。

あなたのみことばは私の足のともしび、私の道の光である。(詩篇 119 篇 105 節)

「権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」と万軍の主は言われる。(ゼカリヤ 4 章 6 節)

(9)しかし、こう書かれている。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かびもしなかったもの、それが神を愛する者たちのために神が備えてくださったものである。」(10)そして神は、これらのことを御霊によって私たちに示されたのである。御霊はすべてのことを、神の深みさえも探られるからである。(11)人のことは、その人の内にある人の霊のほかに、だれが知ることができるだろうか。同じように、神のことは神の御霊のほかにだれも知らない。(12)しかし私たちは、この世の霊ではなく、神から来る御霊を受けたのである。それは、神が恵みによって私たちに与えてくださったものを知るためである。(13)そして私たちはこれらのことを、人間の知恵によって教えられた言葉によってではなく、御霊によって教えられた言葉によって語っているのであり、霊的な事柄を霊的な人々に伝えているのである。(14)しかし、肉的な人は神の御霊の事柄を受け入れない。それらは彼にとって愚かなものだからであり、霊的に判断されるものであるため、それを理解することができないのである。(15)しかし、霊的な人はすべてのことを正しく判断するが、彼自身はだれからも正しく判断されない。(16)「だれが主の御心を知り、主を教えることができるのか」と書かれている。しかし私たちはキリストの思い(すなわち、御霊によって教えられる主の真理)を持っているのである。(第一コリント 2 章 9-16 節)

そしてこの霊の戦いにおいては、救いのかぶとをかぶり、御霊の剣——すなわち真理の御言葉——

—を取りなさい。(エペソ 6 章 17 節)

神の御言葉は生きていて力があり、どんな両刃の剣よりも鋭く、魂と霊、関節と骨髄とを切り分けるほどに貫き、心の思いやはかりごとを見分けるものである。(ヘブル 4 章 12 節)

私たちはまた、預言者たちの語った御言葉を、いっそう確かなものとして持っている。あなたがたがそれに十分に注意を払うなら、それは暗い所に輝くともしびに目を留めるようなものであり、やがて夜が明け、明けの明星があなたがたの心に昇るまで(すなわち再臨の時まで)、そのようにするのがよいのである。(第二ペテロ 1 章 19 節)

10. 私たちは決して一人ではありません。神がすべてを支配しておられます。神のご計画は、この世界が創造される前から、あらゆる点においてすでに完成しており、私たち一人ひとりのため、そして歩みのすべての段階において必要な備えも、見えるものも見えないものも含めて、すべて整えられていたのです(詩篇 121 篇;イザヤ 37 章 26 節)。

(15) 神の人のしもべが翌朝早く起きて外に出ると、見よ、軍勢が馬と戦車をもって町を取り囲んでいた。しもべは言った。「ああ、わが主よ、どうしたらよいのでしょうか。」(16)すると彼は答えた。「恐れてはならない。私たちと共にいる者は、彼らと共にいる者よりも多いのである。」(17)そしてエリシャは祈って言った。「主よ、どうか彼の目を開いて、見えるようにしてください。」すると主はそのしもべの目を開かれ、彼が見ると、見よ、山はエリシャの周りに火の馬と火の戦車で満ちていた。(列王記第二 6 章 15-17 節)

(28) 私たちは知っている。神を愛する者たち、すなわち神のご計画に従って召された者たちのためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださるのである。(29) 神はあらかじめ知っておられた者たちを、御子のかたちに似た者となるよう、あらかじめ定められた。それは、御子が多くの兄弟姉妹の中で長子となられるためである。(30) そして、あらかじめ定められた者たちを、神はまた召し、召された者たちをまた義とし、義とされた者たちをまた栄光を与えてくださったのである。(31) それでは、これらのことについて何と言うべきであろうか。もし神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できようか。(32) ご自分の御子を惜しまず、私たちすべてのために引き渡された方が、どうして御子とともに、すべてのものをも恵んでくださらないことがあるだろうか。(33) だれが神に選ばれた者たちを訴えることができようか。神が義としてくださるのである。(34) だれが罪に定めることができようか。キリスト・イエスは、私たちのために死なれ、さらに死者の中からよみがえられ、神の右に座して、私たちのためにとりなしておられる方である。(35) だれが私たちがキリストの愛から引き離すことができようか。患難か、苦しみか、迫害か、飢えか、裸か、危険か、剣か。(36) 「あなたのゆえに、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊のように見なされている」と書かれているとおりである。(37) しかし、これらすべてのことの中にあっても、私たちは私たちが愛してくださった方によって、圧倒的な勝利者となるのである。(38) 私はこう確信している。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、現在のものも、将来のものも、力あるものも、(39) 高いもの

も、低いものも、そのほかどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできないのである。(ローマ 8 章 28-39 節)

11. 主は、今も将来も、私たちのあらゆる苦しみを通して私たちを救い出してくださいます。

「悩みの日にわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを救い出し、あなたはわたしをあがめるであろう。」(詩篇 50 篇 15 節/NIV 訳)

(14)「彼がわたしを愛しているゆえに、わたしは彼を救い出す」と主は言われる。「彼がわたしの名を知っているゆえに、わたしは彼を高く上げる。(15)彼がわたしを呼び求めるとき、わたしは彼に答える。わたしは苦しみのときに彼と共にあり、彼を救い出し、彼に栄誉を与える。(16)長寿をもって彼を満ち足らせ、わたしの救いを彼に示す。」(詩篇 91 篇 14-16 節/NIV 訳)

(23) しかし私は絶えずあなたとともにいる。あなたは私の右の手をしっかりと握っておられる。
(24) あなたは御助言をもって私を導き、その後、私を栄光のうちに受け入れてくださる。(25) 天において、あなたのほかにだれを私は持つであろうか。地においても、あなたのほかに私の望むものはない。(26) 私の肉体と心は衰えようとも、神は私の心の力、そしてとこしえに私の受ける分である。(詩篇 73 篇 23-26 節/NIV 訳)

(1) 神は私たちの避け所であり力であり、苦難のときにすぐに見いだすことのできる助けである。
(2) それゆえ、たとえ地が揺らぎ、山々が海のただ中に崩れ落ちようとも、(3) その水がとどろき泡立ち、そのうねりによって山々が震えようとも、私たちは恐れぬ。(詩篇 46 篇 1-3 節)

主は、あらゆる悪の攻撃から私を救い出し、ご自身の天の御国へと安全に導き入れてくださる。主に栄光が世々限りなくあるように。アーメン。(第二テモテ 4 章 18 節)

12. そして、もし神の御心が、この救いを殉教という形で実現されることであるならば、それが私たちのために常に備えられていた御心であり、その旅立ちが私たちの主イエス・キリストに栄光を帰し、私たちの報いを確かなものとし、その手段によって私たちは確かに苦しみから救い出されたのであることを知る慰めがあります。

(1) 正しい者が滅びても、それを心に留める者はなく、敬虔な人々を取り去られても、正しい者が災いから取り去られるのであることを悟る者はない。(2) 正しく歩む者は平安に入り、その床に横たわるとき、安らぎを得る。(イザヤ 57 章 1-2 節/NIV 訳)

主の聖徒たちの死は主の目に尊い。(詩篇 116 篇 15 節/NASB 訳)

この神こそ、永遠から永遠に至るまで私たちの神である。主は死に至るまで私たちを導かれるの

である。(詩篇 48 篇 14 節)

これこそが安息であり、これこそが平安であって、私たちの主が私たちを召して与えてくださったものであり、艱難期の嵐のただ中に立っているとしても、主への信仰によって平安と確信を持つことができるのです。ですから私たちは、艱難期の旋風が本格的に襲いかかる前に、人生の嵐を乗り越えることに熟達するため、今この時にこの平安と安息に入るよう、あらゆる努力を払うべきです(申命記 33 章 27 節; [イザヤ 30 章 15 節](#), [57 章 19 節](#); [ヘブル 3 章 19 節—4 章 3 節](#); 参照. [詩篇 62 篇 1 節](#), [116 篇 7 節](#); [イザヤ 8 章 6-7 節](#), [28 章 12 節](#); [エレミヤ 6 章 16 節](#); [エペソ 2 章 14-22 節](#))。

(9)それゆえ、神の民のためには、なお安息日の休みが残されているのである。(10)神の安息に入った者は、神がご自身の業を終えて休まれたように、自分の業を終えて休むのである。(11)だから私たちは、この安息に入るよう努めよう。同じ不従順の例に従って倒れる者が出ないようにするためである。(ヘブル 4 章 9-11 節)

人の理解を超えた神の平安が、キリスト・イエスにあってあなたがたの心と意思を守るのである。(ピリピ 4 章 7 節)

「わたしはあなたがたに平安を残す。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、この世が与えるのとは異なる。」(ヨハネ 14 章 27 節)

心を堅く保つ者を、あなたは完全な平安のうちに守られる。彼があなたに信頼しているからである。(イザヤ 26 章 3 節/NIV 訳)

キリストの平安があなたがたの心を支配するようにしなさい。あなたがたは一つの体としてこの平安に召されたのである。そして感謝する者となりなさい。(コロサイ 3 章 15 節/NIV 訳)

「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあってあなたがたが平安を持つためである。この世にあってはあなたがたには苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っているのである。」(ヨハネ 16 章 33 節/NV 訳)

どうか平安の主ご自身が、いつも、あらゆる仕方で、あなたがたに平安を与えてくださるように。主があなたがたすべてと共におられるように。(第二テサロニケ 3 章 16 節/NIV 訳)

真にイエス・キリストを信じる者にとって、最も良い時でさえ、この人生はしばしば「かいても治まらないかゆみ」のようなものです。私たちは、良い歩みを進めるたびに悪しき者から反対を受けることが定められており、この世の不快感を受け入れつつ、主と目に見えない事柄に心を向けて生きることを学ばなければなりません([コロサイ 3 章 1 節](#))。上にこそ私たちの主がおられ、また上にこそ私たちの宝があります。これらの真理に内なる目を向け続けること、この人生やこの世よりも主と永遠の未来を尊ぶことを学ぶことには、人生の浮き沈

みに容易に流されない粘り強い思考習慣を築く必要があります。言い換えれば、このような真の平安のうちに生きることは、霊的成熟を必要とするのです。このため、艱難期が始まる前に私たちが受けている試練は、実は主からの恵みに満ちた祝福であり、これから来るすべての苦難に備えるための準備なのです。そして、もし私たちが忍耐を十分に働かせ(ヤコブ 1 章 2-4 節)、日々与えられている機会を最大限に生かして、目や耳ではなく主を信頼するならば、それは確かに実現するでしょう。私たちは日々、主が教えてくださった祈りを祈ります(マタイ 6 章 9-13 節; ルカ 11 章 2-4 節)。私たちは必要の供給を祈ります。そして主は毎日の「今日」において私たちを養ってくださいます。私たちは赦しを祈ります。そして主は私たちのために死なれたあの「昨日」において、すでに私たちを救ってくださいました。私たちは救出を祈ります。そして主は、私たちが現在のすべての苦しみから救い出し、これから来るすべてを通して私たちを導いてくださいます——このことについて私たちは完全な確信を持つことができるのです。本当の問題はただ一つです。すなわち、試練の中の試練が始まったとき、私たちがその真理を揺るがない確信をもって信じ、信仰を実際に用いることができるほどに、その真理をしっかりと信じているかどうか、ということです。

備えるべき時は、まさに今なのです。

(25)このゆえに、あなたがたに言う。自分のいのちのことで、何を食べようかと思ひ煩うのをやめなさい。また自分の体のことで、何を着ようかと思ひ煩うのをやめなさい。いのちは食べ物より大切であり、体は衣服より大切ではないか。(26)空の鳥を見なさい。彼らは種をまかず、刈り入れず、倉に集めもしない。それでもあなたがたの天の父は彼らを養っておられる。あなたがたは彼らよりもはるかに価値ある存在ではないか。(27)あなたがたのうちのだれが、思ひ煩ったからといって、自分の背丈に少しでも付け加えることができるだろうか。(28)なぜ衣服のことで思ひ煩うのか。野のゆりがどのように育つかをよく考えてみなさい。彼らは勞せず、紡ぎもしない。(29)しかし言うておく。榮華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも装ってはいなかった。(30)今日あって、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神がこのように装ってくださるなら、ましてあなたがたには、もっとよくしてくださらないことがあろうか。信仰の薄い者たちよ。(31)だから、「何を食べようか」「何を飲もうか」「何を着ようか」と言って思ひ煩ってはならない。(32)これらはみな異邦人が切に求めているものである。あなたがたの天の父は、これらすべてがあなたがたに必要であることをご存じである。(33)だから、まず神の国とその義とを求めなさい。そうすれば、これらすべてのものは加えて与えられるのである。(34)だから明日のことを思ひ煩ってはならない。明日のことは明日が思ひ煩うのである。一日には、その日だけの苦勞があれば十分である。(マタイ 6 章 25-34 節)

御国が来ますように。(マタイ 6 章 10 節)

V. 神の御国

先の IV 項に関連して言えば、危機に備える霊的準備とは、その本質において、目に見えるこの世界を、腐敗しやすく一時的なものとして心の中で死んだものとみなし、その代わりに、あらゆる点において永遠であ

り、すばらしい来たるべき世界のために生きるという基本的な心構えを築くことです。上で考察してきたすべての原則は、主を愛し、主と共にある永遠を愛することに帰着し、それは私たちの目に見えるこの物質的世界に対する重大な感情的執着を排除するものです。見えない方を見続け、見える世界に対して自らを盲目とすることこそ、私たちクリスチャンが「まず神の国を求める」([マタイ 6 章 33 節](#))最も重要な方法なのです。

(18)「もし世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを覚えておきなさい。(19)もしあなたがたが世のものであったなら、世は自分のものを愛したであろう。しかし、あなたがたは世のものではなく、わたしがあなたがたを世から選び出したのである。それゆえに世はあなたがたを憎むのである。」([ヨハネ 15 章 19 節](#))

「わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。そして世は彼らを憎みました。わたしが世のものではないように、彼らも世のものではないからです。」([ヨハネ 17 章 14 節](#))

(15)この世も、この世にあるものも愛してはならない。もしだれかがこの世を愛するなら、その人の内には父への真の愛はない。(16)なぜなら、この世にあるすべてのもの、すなわち肉の欲、目の欲、そして生活の誇りは、父から出たものではなく、この世から出たものだからである。(17)この世とその欲とは過ぎ去っていく。しかし神の御心を行う者は、永遠に生き続ける。([第一ヨハネ 2 章 15-17 節](#))

このような根本的な方向転換が私たちの心全体を占めるようになるなら、王の永遠の都において王とともに過ごす永遠——すなわち、この短い人生で主に正しく仕えたことによって得た報いを永遠に楽しむその御国こそが、地上でイエスのために行う私たちの努力の真の目的となり、また「このからだによって」([第二コリント 5 章 10 節](#)) 私たちが目指すすべての目標となるのです。正しく理解するなら、この御国——王の支配される領域——こそが、私たちのすべてです。それは、私たちクリスチャンが正当に目指してよいすべてを表しており、また私たちがあらゆる苦しみに耐える理由そのものを示しているのです。

(45)「また、**天の御国**は良い真珠を探している商人のようなものである。(46)彼は非常に価値の高い一つの真珠を見つけると、行って自分の持っているすべてを売り払い、それを買ったのである。」([マタイ 13 章 45-46 節](#)/NIV 訳)

「貧しいあなたがたは幸いである。**神の御国**はあなたがたのものである。」([ルカ 6 章 20 節](#)後半)

イエスは彼に答えて言われた。「まことに、まことにあなたに言う。人は新しく生まれなければ、神の御国を見ることはできない。」([ヨハネ 3 章 3 節](#))

(12)父に感謝しなさい。父はあなたがたを、光の中にある聖徒たちの相続にあずかるにふさわしい者としてくださったのである。(13)父は私たちを闇の力から救い出し、愛する御子の御国へと移してくださったのである。([コロサイ 1 章 12-13 節](#))

(4) それゆえ私たち自身も、あなたがたが現在耐えている迫害と艱難の中で示している忍耐と信仰について、神の諸教会の間であなたがたを誇りとしている。(5) これらのことは、あなたがたがそのために苦しんでいる**神の御国**にふさわしい者と判断されるという、神の正しい評価の証拠なのである。(第二テサロニケ 1 章 4-5 節)

それゆえ、揺るがされることのない**御国**を受けている私たちは、感謝をささげ、それによって敬虔と畏れをもって神に喜ばれる仕え方をしようではないか。(ヘブル 12 章 28 節)

(10) それゆえ兄弟たちよ、ますます熱心に、あなたがたの召しと選びとを確かなものとするよう努めなさい。これらのこと(すなわち徳、成長、そして信仰から生まれるクリスチャンとしての実り)に励むならば、あなたがたは決してつまづくことはない。(11) このようにして、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の**御国**への道は、豊かに、そして円滑にあなたがたの前に開かれるのである。(第二ペテロ 1 章 10-11 節)

私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、イエスにあって共に艱難と**御国**と忍耐にあずかる者であるが、神の御言葉とイエスの証しのゆえに、パトモスと呼ばれる島にいたのである。(黙示録 1 章 9 節)

神の御国(マタイの福音書では、先に挙げた最初の箇所のように「天の御国」とも呼ばれている)は、新約聖書において名称としてだけでもほぼ百回言及されており、さらにそれを明確に指し示している多くの他の箇所もあります(また旧約聖書のメシヤ預言のすべてにおいても、名称こそ明示されていない場合があっても、確かに予告されています)。この主題についてはすでに多くの書物が書かれており²²、またこれらの用語の用いられ方はある点では多様に見えるかもしれませんが、来たるべき御国についての聖書のすべての言及には、一つの根本的な考えが共通してあります。すなわち、信じる者にとって、来たるべき御国こそが私たちの真の永遠の住まいであり、数々の試練や患難に満ちたこの一時的な世界こそが本来の住まいなのではない、という事実です。

イエスは[ピラトに]答えられた。「わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであったなら、わたしのしもべたちは、わたしがユダヤ人に引き渡されないように戦ったであろう。しかし実際には、わたしの国はここからのものではないのである。」(ヨハネ 18 章 36 節)

それゆえ、すべての時代のすべての信者にとって——しかし特に艱難期の信者にとってはなおさら——御国は単なる思想以上のものとならなければなりません。それは、私たちが採用すべき基本的な心構えであり、人生の試練、そしてとりわけ大艱難期(ダニエル 9 章 27 節)を乗り越えるために、私たちが目指すべき本質的な目標とならなければならぬのです。

(8) 信仰によって、アブラハムは神に召されたとき、従って、相続として受けることになっていた地

²² 特に、A.J.マクレイン著『神の御国の偉大さ(The Greatness of the Kingdom)』(シカゴ、1968年)を参照してください。

へ出て行った。しかも彼は、自分がどこへ行くのかを知らないまま出て行ったのである。(9) 信仰によって、彼は約束の地に他国人として住み、同じ約束の相続人であるイサクやヤコブと共に天幕に住んだ。(10) なぜなら彼は、堅固な基礎を持つ都、すなわち神ご自身が設計者であり建設者である都(すなわち御国の都、新しいエルサレム)を待ち望んでいたからである。(ヘブル 11 章 8-10 節)

神の御心に従い、また「すべてのことを働かせて益としてくださる」(ローマ 8 章 28 節)という御計画の基本原則に従って、神は現在私たちが経験している苦しみから、私たちの望む形で救い出してくださることもあれば、そうでないこともあります。このシリーズの中で繰り返し見てきたように、イエス・キリストのために苦しむことは、霊的成長のために成熟した信者に必要な重荷の重要な一部であるだけでなく、大艱難の期間においては、忍耐し続ける者たちの半数が、殉教によって私たちの主イエスを誉れある形で証しするよう召されることとなります。しかし、この人生において私たちがどのような苦しみを割り当てられようとも、イエス・キリストにあって完全な分を持つ信者である私たちは、同時に、主の来たるべき御国にも完全な分を持っています。それは、失われることも汚されることもない相続であり、私たちが受け取るのを待って天に蓄えられている確かな相続です(第一ペテロ 1 章 4 節)。このようにして、御国——すなわち、イエス・キリストという王の血によって救われた私たちすべてのために備えられた神の御計画の永遠の到達点——こそが、その御計画の究極的な具現であり完成なのです。そこにおいて、主に従うことを選んだ私たちは、主と顔と顔を合わせて、永遠に、私たちの永遠の人生とすべての永遠の報いを楽しむこととなります(第一テサロニケ 2 章 12 節)。それゆえ、いのちそのものよりもイエス・キリストを愛する者として、私たちの真の、そして正しい焦点は、この世やこの世のものではなく、来たるべき世界と、これから起こる事柄に向けられるべきです。私たちの真の、そして正しい焦点は、神の御子の来たるべき御国——そこで私たちは栄光の復活の体をもって主の地上の支配にあずかることとなります——そして父の来たるべき御国と、新しいエルサレムにおける私たちの永遠の住まいに置かれるべきなのです。

(19) 自分のために地上に宝を蓄えてはならない。そこでは虫が食い、さびがこれを損ない、盗人が穴をあけて盗むのである。(20) むしろ、自分のために天に宝を蓄えなさい。そこでは虫もさびもこれを損なわず、盗人も穴をあけて盗むことはない。(21) あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もあるのである。(マタイ 6 章 19-21 節/ESV 訳)

(20) 私たちの真の国籍は天にあるのであり、そこから私たちは救い主、主イエス・キリストを待ち望んでいるのである。(21) 主は、そのすべてを従わせることのできる御力によって、この卑しい私たちの体を、ご自身の栄光の体と同じ姿に変えてくださるのである。(ピリピ 3 章 20-21 節)

(1) それゆえ、あなたがたはキリストと共によみがえらされた者として、上にあるものを求め続けなさい。そこにはキリストがおられ、神の右に座しておられるのである。(2) 地上のものではなく、上にあるものを思い続けなさい。(コロサイ 3 章 1-2 節)

しかしあなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレムに来ているのである。(ヘブル 12 章 22 節前半)

イエスは私たちの王であり、永遠なる大いなる王である天の父の御子です。私たちが王について思い巡らすとき——そして私たちは絶えずそう努めるべきですが([ヘブル 11 章 24-27 節](#), [12 章 1-3 節](#); 参照. [コロサイ 3 章 1-4 節](#); [ピリピ 4 章 8 節](#))——そのとき同時に、王の御国について、そして来たるべきその偉大な日における復活によってそれに完全にあずかるときに私たちが享受する祝福について思いを向けることは、正しくふさわしいことです。

[私たちは]見えるものに目を留めるのではなく、見えないものに目を留める。見えるものは一時的なものであり、見えないものは永遠のものである。([第二コリント 4 章 18 節](#))

しかし私は、私たちの主イエス・キリストの十字架以外には、決して誇るべきことがないようにしたい。その十字架によって、この世は私に対して十字架につけられ、私もこの世に対して十字架につけられたのである。([ガラテヤ 6 章 14 節](#))

私たちは祝福された望み、すなわち私たちの大いなる神であり救い主であるイエス・キリストの栄光の顕現(すなわち主が現れるとき、私たちもまた栄光のうちによみがえらされるその時)を待ち望んでいる。([テトス 2 章 13 節](#))

艱難期を目前に控えた信者にとって、来たるべき栄光の御国について意識的に思い巡らす思考習慣を築くことほど有益なことはありません。次の点について日々黙想することを習慣とするのは、大いに有益でしょう:

- ・ イエス・キリスト、来たるべきメシヤこそ、私たちの王であられる方です([ヘブル 7 章 1-3 節](#); [黙示録 17 章 14 節](#), [19 章 16 節](#); 参照. [マタイ 21 章 5 節](#); [マルコ 15 章 2 節](#))。
- ・ 私たちは地上において主の兵士です([ヨハネ 18 章 36 節](#); [第一コリント 9 章 7 節](#); [ピリピ 2 章 25 節](#); [第二テモテ 2 章 3-4 節](#); [ピレモン 1 章 2 節](#))。
- ・ 私たちは主とその御国のために、霊的な戦いに従事しています([マタイ 11 章 12 節](#); [第二コリント 10 章 4 節](#); [エペソ 6 章 10-17 節](#); [第一テモテ 1 章 18 節](#))。
- ・ 私たちは勝利された王の再臨と、その栄光に満ちた御国の開始を待ち望んでいます([黙示録 11 章 15 節](#), [12 章 10 節](#))。
- ・ 私たちは主への奉仕に対する報いとして、主が勝ち取られた戦利品を分かち合うことを期待しています([詩篇 111 篇 5 節](#); [イザヤ 53 章 12 節](#); [ルカ 11 章 21-22 節](#), [20 章 16 節](#); [エペソ 4 章 7-10 節](#))。

私たちがイエス・キリストのために持ち、存在し、また耐えるすべてのことは、すべて報われる価値のあるものです——そしてその真理は、言葉に尽くせないほど崇高なその日に、主の威厳に満ちた再臨を目の当た

りにするとき、まばゆいほど明らかになるでしょう。どうか私たちすべてが、来たるべき試練において、ふさわしい者と認められますように。

[あなたがたが今耐えているこれらの艱難は、あなたがたがそのために苦しんでいる神の御国にふさわしい者と判断されるという、神の正しい評価<判定>の証拠である。]([第二テサロニケ 1 章 5 節](#))

キリストからの警告：

やもめと裁判官のたとえにおいて、イエスは弟子たちに「いつも祈るべきであり、失望してはならない」ことを教えられました([ルカ 18 章 1-8 節](#))。なぜなら主が説明されたように、不正で気乗りしない裁判官でさえ、やもめの粘り強さによって、ついには彼女の願いを聞き入れたからです。したがって私たちは正しい方である神が祈り続ける選ばれた者たちを助けることを長く遅らせることはない、ということを理解すべきなのです。

主はこのたとえを、最初はやや不思議に思えるかもしれない言葉で締めくくられましたが、それは歴史の終わりの時代の入口に立っている現在の教会にとって、非常に重大な意味を持つものです。主はこのように言われました。「しかし、人の子が来るとき、地上に信仰を見いだすであろうか。」この問いは、終末の預言的出来事が近づくとつれて教会の将来についてあまりにも楽観的になっている人々に、深く考えさせるものです。この問いは、信仰が実際に存続するかどうか疑わしいほどの状況になることを示唆しており、もし主の再臨に先立つ破滅的な時代を通して信仰が保たれるとしても、それはきわめて危うい状況になることを意味しているのです。このたとえの動機として示された粘り強い祈りは、将来その時代を生き抜き、信仰を保ち続ける者たちにとって、贅沢ではなく必須のものとなる可能性があります。

ルカは、やもめと裁判官のたとえを補足する別の重要な点も記しています。それによれば、イエスがこのたとえを語られた目的は、弟子たちに「いつも祈るべきこと」を教えるだけでなく、「失望しないようにする」ためでもありました([ルカ 18 章 1 節](#))。この「失望」あるいは「気力を失うこと」は、一見すると祈りの持続という問題にだけ関係しているように思われるかもしれませんが、主の問いはそれがはるかに広い意味を持つことを明らかにしています。主は、多くの信者、おそらく大多数の信者が時代の終わりに訪れる試練によって激しく試され、その圧力によって信仰が折れ、「信仰の喪失」が広範囲に起こる可能性を懸念しておられたのです。

明らかに、私たちの主の言葉は靈感による預言的なものです。すべての聖書を神聖で価値ある教えとして受け止める信者として、私たちは自分たちの信仰が極めて厳しい試練にさらされる可能性を思うとき、ある種の畏れを抱かざるを得ません。さらに、将来の恐ろしい時代を生きることになれば、私たちの信仰や、この人生で積み上げてきた霊的なすべてのもの、さらには私たちの救いさえ危険にさらされる可能性があるという事実は、まことに厳粛な思いを抱かせるものです。私たちは、主のこの問いが最終的に適用される世代が、まさに私たちの世代である可能性を無視することはできません。私たちの中のある者は、将来の出来事によって提示される信仰への究極の試練に直面するかもしれません。そしてある者は、その試練に耐えられないかもしれません。そのような危険を、どの信者も軽視することはできませんし、無知のままで直面すべきも

のでもありません。

今日、キリスト教が世界中で著しい広がりを見せ、世界各地で何百万もの人々が自らをクリスチャンと名乗っている時代にあつては、このような懸念は差し迫ったものには見えないかもしれません。しかし、聖書を真剣に受け止めるすべての人は、[ルカ 18 章 8 節](#)を深く考えるべきです。なぜなら私たちの主イエス・キリストは、実際にはご自身の再臨の時までに、地上における信仰が希少なものになっていることを明確に示しておられるからです。

しかし、人の子が来るとき、地上に信仰を見いだすであろうか。[\(ルカ 18 章 8 節後半\)](#)

現在の状況と、キリストの問いが示唆する暗い未来との間に生じるこの恐ろしい逆転の原因は、主の再臨前の最後の時代、すなわち大艱難期において、信者に対して解き放たれることになる激しい圧力と迫害にほかなりません。ルカ 18 章における主の問いが示す信仰への試練の予兆は、この箇所だけに限られてはいません。というのも、この将来の期間において、「多くの者の愛が冷える」[\(マタイ 24 章 12 節\)](#)こと、「大いなる背教」が起こること[\(第二テサロニケ 2 章 3 節\)](#)、そして「多くの者が信仰から離れる」[\(第一テモテ 4 章 1 節\)](#)²³ことが予告されているからです。この最後の激しい試練の時において、信仰はこれまでで最も厳しい試験を受けることになります。キリストの問いは単なる問いではありません。それは、どの信者も無視してはならない警告なのです。

「すべての幻が成就する日が近づいている。」[\(エゼキエル 12 章 23 節後半\)](#)

(27)「人の子よ、イスラエルの家は、『彼が見る幻はまだ遠い将来のことであり、彼は遠い時代について預言している』と言っている。(28)それゆえ彼らに言え、『主なる神はこう言われる。わたしの言葉はもはや遅れることはない。わたしが語ることは必ず成就する』と主なる神は宣言される。」[\(エゼキエル 12 章 27-28 節\)](#)

(3)このことをまず心に留めておきなさい。終わりの時には、あざける者たちが現れ、自分たちの欲望に従って歩みながら、真理をあざけるようになる。(4)そしてこう言うのである。「主が再び来るといふあの約束はどうなったのか。私たちの先祖たちが眠りについて以来、世界の初めからすべては同じままではないか。」(5)しかし彼らはこのことを主張する際に、次の事実を見落としている。すなわち、はるか昔にも天があり、また地があり、それは神の御言葉によって、水の下から(すなわち「下の水」から)出て、水の中を通して(すなわち「上の水」の間を通して)形づくられたのであり(創世記 1 章 2 節以下)、(6) その二つの水によって、当時の世界(すなわちノアの時代の世界)が水に覆われて滅びたのである。(7) しかし現在の天と地は、その同じ御言葉によって火のために蓄えられ、不敬虔な人々の滅びのためのさばきの日(すなわち歴史の終わり)まで保たれている。(8) 愛する者たちよ、この一つの事を見落としてはならない。すなわち、主の御前では一日は千年のようであり、千年は一

²³ このシリーズ[第 3 部 A.II.「大背教」](#)を参照してください。

日のようなものである(すなわち、最後の「日」は千年にわたるのである)。(9) 主は約束の実現を遅らせておられるのではない。ある人々が遅れていると考えているようなことではない。むしろ、あなたがたのために忍耐しておられるのであり、だれも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに至ることを望んでおられるのである。(10) しかし主の日は盗人のようにやって来る。その日には(すなわちその期間の中で)、天は大きな音を立てて過ぎ去り(すなわち千年王国の終わりに)、諸要素は燃えて解け、地とその上でなされたすべてのことはあらわにされる(すなわち最後のさばきのために)。(11) これらすべてのものがこのように滅び去ることになっているのであれば、あなたがたはどのような者であるべきかを考えなさい。すなわち、聖く敬虔な生き方に身をささげる者であるべきである。(12) 神の日(すなわち再臨の日)の到来を待ち望みつつ、その日を切に待ち望む者であるべきである。その日には(すなわちその終わりに)、天は燃えて解け、諸要素は火に焼かれて溶けてしまうのである。(13) しかし私たちは、主の約束に従って、新しい天と新しい地を待ち望んでいる。そこには義だけが住むのである。(第二ペテロ 3 章 3-13 節)

その日が来るとき、備えができ、霊的に整えられているなら、艱難期は私たちにとって最も輝かしい時となるでしょう。私たちは、私たちを導いてくださる羊飼いを信頼しています。主は私たちの物質的必要性を満たし、真理の水によって霊的必要性を満たし、義の道を通してシオンへと導いてくださいます。その道が暗闇と嵐の中を通り、死の陰の谷を通ることになろうとも、私たちは恐れる必要はありません。主が私たちを守り、保ってくださいからです。獣の王国の中であってさえ、イエスは私たちを豊かに養い、御霊によって力づけ、最も深い霊的経験によって祝福してくださいます。その経験によって私たちは計り知れない永遠の祝福を得ることができるのです。そして私たちが愛する主イエスと顔と顔を合わせて会うその日まで、主は決して祝福と恵みを私たちから差し控えることはありません。主はすでに新しいエルサレムにおいて、私たちのための場所を備えておられるのです。それは、私たちが主のためにささげる奉仕と犠牲にふさわしいものとなるでしょう。

(1 後半)主は私の羊飼いです。私は乏しいことがない。(2)主は私を緑の牧場に伏させ、静かな水のほとりに導かれる。(3)主は私の魂を生き返らせ、御名のゆえに義の道に導かれる。(4)たとえ死の陰の谷を歩むことがあっても、私はわざわざを恐れない。あなたが私と共におられるからである。あなたのむちとあなたの杖が、私を慰める。(5)あなたは私の敵の前で、私の前に食卓を備え、私の頭に油を注がれる。私の杯はあふれている。(6)まことに、私のいのちの日の限り、恵みと慈しみが私を追い、私はいつまでも主の家に住むであろう。(詩篇 23 篇 1 後半-6 節/NIV 訳)

そしてこのことを行いなさい。今がどのような時であるかを知っているからである。あなたがたが眠りから覚めるべき時がすでに来ている。私たちの救いは、最初に信じた時よりも今や近づいているのである。(ローマ 13 章 11 節)

そして今、小さな子どもたちよ、主のうちにとどまりなさい。主が現れるとき、私たちが確信を持ち、その来臨のときに恥じることがないためである。(第一ヨハネ 2 章 28 節)

「見よ、わたしはすぐに来る。この書の預言の言葉を守る者は幸いである。」(黙示録 22 章 7 節)